

---

# G A N T Z に選ばれた男の娘

音夢

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

GANTZに選ばれた男の娘

### 【Nコード】

N0811X

### 【作者名】

音夢

### 【あらすじ】

主人公の神田 茜（かんだ あかね）は、友達をかばって死にGANTZが始まる事になった

## 主人公設定（前書き）

字が間違っているかも知れませんが、

## 主人公設定

神田 茜（かんだ あかね） 13歳

身長142cm 体重40kg

性別、男

特徴、格闘技『ほぼ全て出来る』、料理、星人狩り

好きなもの、友達、武器作り

苦手なもの、意味不明な事でも頭はかたくない

容姿、玄野計が2で本恵が8で割った感じ、  
美男子にも美少女にも見える。

何方かと言つと美少女より

声はピコの男成分を半分抜いた感じ

性格

仲間や友達は大事にするが、大事な人を傷付ける人にはようしゃしない

星人を一人で倒す時は表情を殺している

戦闘

ガンツソードから、Xガン全てを、使いこなして、星人を、簡単に、倒す



## 男の娘は死にました。そしてGANTZへ

目の前には見慣れない動物がいる。

動物と言ふよりは怪物、化け物と表した方が適切だろうか？

僕はその様な事を考えながらも持っている刀を怪物に向かって振り抜く

ただ動かす用に当たり前で当然の用に刀で切り殺す

肉片が散り血が僕の頬についたが、僕は何事も無かったかの用にその場から移動する。

僕はどうしてこうなったのかと、ふと昔の事を思い出した。

そうあの一年前から僕の命は終わり始まった

「……………」『一年前』……………」

僕は中学校の玄関で靴を出そうとしていると、誰かが話しかけて来た

「一緒に帰ろうぜ、茜」

話しかけて来たのは、僕と同じクラスの佐々木

蓮<sup>れん</sup>だった

「そうだな 蓮」

蓮と帰る約束をして、靴箱を開けると、大量のラブレターが詰まっていた。

詰まりきらなかったであろうラブレターが数通、僕の足に落ちて来る

「またか」

蓮はそう言いながらラブレターを処理するのを手伝ってくれた。

「ありがとうな」

「仲間だろ」

そうしてチャッチャッと片付けて帰る

帰る途中、僕達はいつもの道を話しながら帰っていた

「全く茜は可愛いし、あんだけラブレター貰ってるんだから付き合えばいいのに」

蓮は笑ながら言う

「蓮、お前地味に酷い事、言っな」

茜はすこし怒りながら言う

「何がだよ」

「だから男の僕に可愛いとか言っな」

僕がそう言い終わると、蓮が僕の首を腕で挟み髪をグチャグチャにする

「うわっ」

僕は何とか脱出する

「何するんだ蓮」

「うるさいラブレターを、一つも貰ってない俺なんか…わー」

蓮は泣きながら交差点に飛び出していく

その時、車が蓮にぶつかりそうになる

「えっ」

蓮は何を言っているかわからなかったんだろう

蓮の目の前には、自分をかばって代わりに車にひかれた茜がいる

蓮は叫んだんだろう。

あれ、ここ何処だろ、

…あつ、そうだ蓮を助けて僕、死んだのかな？

そうすると光が茜の目を刺し、茜を包み込む

目を開けると、そこには大きな黒い玉と茜を見ている数人の人がいた

そうそれが僕、神田

茜がGANTZを始めて見た時だった

男の娘は死にました。そしてGANTZへ（後書き）

うp主は、学生で、あまり長続きがしないので、期待しないで、読んでください。



## 初ミッションは僕を駆り立てた

茜の目の前には数人の人がいる

「あれ、につしーなんているんだ」

そこには茜の知り合いの西<sup>にし</sup> 丈一郎<sup>じょういちろう</sup>がいた

「それはこっちの台詞だ、何で茜が」

「多分、蓮を助けて車にひかれた」

西は飽きれているようで茜らしいと思いながら自分の頭の中で状況の整理する

「西、その子はお前の知り合いか」

黒いコスプレの様な物を着た男が喋る

「あの神田 茜<sup>あおき</sup>っていいいます」

茜が話すとまたしてもコスプレを着た女が喋る。

「茜ちゃんか、可愛い名前だね」

女は赤いショートヘアを揺らしながら笑顔で言う  
(少し違うような)

すると西が喋る

「自己紹介したら」

二人は思い出したかの様に自己紹介を始める。

「俺の名前は、<sup>かしはら</sup>檀原 <sup>おおき</sup>大樹よろしくな」

茜は笑顔で返す

「私は、<sup>じんくう</sup>神功 <sup>あかり</sup>明里気軽に読んでね」

「よろしくお願いします」

茜の笑顔に二人も笑顔になる

茜は一拍でいど空けると、西に喋りかける

「そういえば、ここ何処」

そうすると三人が茜を傷書きながら説明してくれた。

説明を聞いて、茜はビックリしたが、状況を理解して確認を求める  
「まず僕たちは死んでいて、これから 星人と戦って、そのGANTZとか言う黒い玉に表示されて中に入ってる、武器で戦って外ではこの事を話しちゃダメと」

「大体、そんなとこ」

西が言っていると明里が氣を使い喋る

「信じれないかもしれないけど事実だから」

「信じてますよ」

「えっ」

大樹達が驚きながら一斉にハモリ

「だって車が当たった時、物凄く痛かったし、実際に起こるんだから、この目で確かめた方が早いしね」

三人はなるほどと思った時に、GANTZからラジオ体操の音がする  
「始まったぞ」

大樹が言っていると、GANTZに星人の事が、表示される

カメ星人

特技、甲羅の、中に、入る

好きなもの、肉

口癖、「うおー」

と書かれる

そうするとGANTZのトランクが開く

「早くスーツを着ろ」

西は慌てて言う。

茜はその場で脱ごうと、すると明里に連れられつ廊下で着替える。

その最中に二人は西から茜は男だと告げられる。

「まじかよ」

「私よりも可愛いのに」

そうして茜は出てくる。

「につしー、刀とかない」

茜が西に聞くと、銃と刀の持ちてらしきものとコントレーラーを渡して来る。

茜は使用方法を聞いて、準備を全て終わらした、途端に大樹と西が足から消えて行く。

「なっ」

明里が囁く

「大丈夫だから」

そうして茜と明里も移動が始まる。

移動した場所は、グラウンドだった

「ここは」

茜があたりを見渡すと明里が近くにいた。

そうすると巨大なカメが現れる。

「茜ちゃん 銃で応戦して」

茜は言われたとつりに、カメ星人に撃つがびくともしない、

その瞬間、カメ星人が明里に向かって突撃をする

明里はカメ星人の攻撃を受けてグラウンドのフェンスにぶつかる  
フェンスがネットの代わりになったのか明里は気絶だけですんだ  
すると茜は刀を出し、右足を後ろに引き刀を構える

（なんだろう？この感じ楽しんでるのかな？）

するとカメ星人が茜に向かって突進する

茜は高く飛び上がり、カメ星人の真上で茜は刀を抜き構える

するとカメ星人の動きが止まる

（やっぱり、上は見えてないな）

茜はそのまま甲羅の上に落ちながら刀を振り抜く

刀はカメ星人の甲羅を貫き、カメ星人を見事に四つに切り裂く

西と大樹はその光景を見てビックリしていたが理解した、

茜の身のこなしは、戦闘センスを極限まで使い、全くスーツを使わ  
ないで倒したと言う事が

そうして転送が始まり採点が始まる

ちいてん

あかねちゃん

9てん

TOTAL 9点

茜は、GANTZに『あかねちゃん』と言われたのに、キレそうだ  
った

そうして茜の家の話しになった。

茜は一人ぐらしの為、世間的に大丈夫とわかって、安心して帰ることになった

帰り道で茜はわかった事があつた

それは『星人狩り』を自分が楽しんでいると言つ事だつた。

初ミッションは僕を駆り立てた（後書き）

2時間以上は絶対にかかるので、たまにグチャグチャですが、次からは主人公チートで、やって行こうとおもいます。

## GANTZは僕を開花させる（前書き）

感想、ありがとうございます。

少しづつですが、直していきたいと思います。

他の章も、治そうとしたのですが、あまり無理でした  
すません

iPhoneは、非対応なのでしょうか

## GANTZは僕を開花させる

最初のミッションから一ヶ月がたち、その間に4回のミッションが行われた

ミッションを積むたびに茜は成長して戦闘中は全ての声が聞こえなくなっていた。

夜の街はカップルや酔っぱらいがたまり、それを電灯のライトが照らす街に茜は一人歩いていた

何処に入る事もなく

すると茜に寒気が体を駆け抜ける

（ミッションか）

そうすると茜は走り出し、街から外れたありビルに入る  
ビルからは物音が一斉する事はなく茜の靴音が響き渡る

茜は屋上に上がり、屋上の真ん中に立つ

茜を照らす様に満月の光が屋上に集まる

すると転送が始まる

足からジワジワと

転送が終り茜は周りを見る

そこはいつものGANTZ部屋だが茜以外はいなく、茜が一人だけだった

（いないのか）

1回だけ茜だけがミッションに呼ばれた事があった

茜がその様な事を考えていると

GANTZに星人の情報が出表示される

悪魔星人



特徴、黒い

好きなもの、人、悪

口癖、「はははは」

と表示されるとGANTZのトランクが一斉に開く

茜は直ぐ服を脱ぎ捨てガンツスーツに身を包み、ガンツソードを装備する

（よし）

すると茜は簡単な柔軟を始める

茶色のショートヘアをすこし揺らしながら屈指やしんきやくなどの柔軟をやる

すると再度 転送が始まる

またしても足からジワジワと

転送が終わる

そこはブランコやシーソー軋み響き渡る公園だった

だが公園と見ては大き過ぎる様な感じもする

（公園か）

茜は公園で割り切る

すると茜の後ろから槍が襲う

茜は前に倒れる様に何とか交わしながらガンツソードを抜き槍を打った者を見る

それは鬼に翼が生えた様にも見える悪魔星人だった

茜は空中で体を回す様にしてガンツソードを振り抜く

ガンツソードは悪魔星人を捉え真つ二つにする

すると茜の頬に赤く、深紅と呼ぶべきだろう血しぶきが飛びつく

茜は再度 周りを見る

そこには100体は超えるで在ろう悪魔星人がいる

茜はガンツソードを振り抜き、血を落とすと悪魔星人に向かって走り出す

悪魔星人も同様に茜に向かって攻撃を始める

茜は気にせずにガンツソードを構え切り裂く  
ガンツソードは円を描きながら悪魔星人の首を吹き飛ばす  
これはもはや星人狩りだった

一体の悪魔星人が茜に向かい矢を放つ

茜は交わす訳でもなく、

近くにいた悪魔星人を捕まえ矢の方へ向ける  
矢は見事に悪魔星人を射殺す

茜は気にせずにガンツソードを振り抜く  
たった一太刀により一瞬で悪魔星人は死ぬ

そして何度も、何度も悪魔星人を切り裂く

茜はいくら血しぶきが着こうが動揺すらしない

茜は自分の行動に疑問感じた

（僕は正義感と言うなの狩りを楽しんでいたのか？）

茜はまた悪魔星人を切り殺しある一転の事が導き出された  
（もっと強くなって死に触れていたい）

茜は死体を見ながらそう思った

すると転送が始まる  
また足から

転送が終わり  
採点が始まる

ちいてん

あかねちゃん

10点

TOTAL36点  
と表示される

茜の血は消されていた

茜はガンツスーツを脱ぎトランクにしまい  
服に着替える

茜はガンツを見てあまりいい気分ではなくなり直ぐに帰る

（僕はもう人とは言えないほど、腐っているのか）

**GANTZは僕を開花させる（後書き）**

設定を、少し変えました、すいません。

次はほのぼのにしまし

## 大切な人

数日前

「茜ちゃん、明日一緒に買い物行かない？」

「どうしたんですか？いきなり」

茜は明里のいかなりの事に疑問を持ちながら言う

「何となくだよ」

茜は軽く悩みながら答えを出す

「はい、行きます」

そうして二人は待ち合わせ場所を決めて解散する

次の日

朝、AM 8：00分

茜は重い体をベットから立ち上がらせる

そうすると閉まりがない声が口から漏れる

「ふぁー」

茜は肩を伸ばしながら台所に向かう

冷蔵庫から卵二個と牛乳を取り出しオムレツを慣れた手付きで作  
り出す

その間にトーストを焼く

2分ぐらいが経過すると、

トーストとオムレツが同時に出来上がる

茜は野菜ジュースをコップに注ぎ、トーストとオムレツを綺麗に盛り付ける

そうして茜は朝食を食べ始める

オムレツを一口サイズに切り口に入れる

口には卵と牛乳の甘みが広がる

そうして朝食を食べ終え、茜は時間確認する

AM 8：25分

「結構時間があるな」

待ち合わせ時間は10：00の為かなりの時間が空いていた

すると茜は服を着替え始める

そうしてると9：30分になり茜は待ち合わせ場所に向かう

茜は待ち合わせ時間の20分前に着くと明里がいた

「明里さん、早いんですね」

茜が明里に駆け寄ると、明里が手を振る

二人は軽く挨拶を済ませると、明里が茜の服を見始めた

茜の服はジーパンに黒いTシャツだった

明里は急に、茜の手を取る

『なんですか、明里さん』

「私にコーディネートさせて」

そうして茜は明里の着せ替え人形になった

3時間も考えたすえに茜は凄い格好になった

モデル雑誌にいそつなくらい可愛くなった

フリフリのスカートで、ジャケットを来ていた  
猫みたいで色は白系だった

「可愛いよ茜ちゃん」

茜は顔を赤くしながら恥ずかしがる

そうして時間は午後1時くらいだったので、昼食を取る事になった  
二人は近くにあったレストランに入ると

そうして注文を頼み、来る

茜はおろしハンバーグ

明里はチーズハンバーグだった

二人は食べ始める

「それにしても、なんでこの服なんですか？」

茜が聞くと 明里は笑顔で答える

「凄い可愛かったからだよ」

茜はかなり複雑な気持ちになった

そうすると明里が「あーん」と言いながらハンバーグを掴んだ箸を  
出してくる

茜は赤くなる

明里が「早く〜」と急かす

茜は赤くなりながら、明里の出したハンバーグを食べる

そうすると明里は口を開けながら「あーん」と言う

茜は赤くなりながらも、明里の口にハンバーグを入れる

「あーん」が繰り返され2時くらいに、食べ終えて、今度は明里の  
服を買う

茜は何度も服を、着替える明かりにコメントを、しないといけなく  
なって大変だった

そうして7次になる

二人は公園にいた

「今日は楽しかったですね」

「そうね」

二人は今日の思い出をたくさん話した

明里が急に茜に抱きつく

明里は耳元で喋る

今にも消えそうな声で

「私は何度も星人を殺して、こんなに幸せでいていいのかな、直ぐにまた壊れちゃうよ」

茜は唇を噛み締め優しく包みこむように喋る

「僕が守ります。明里さんも今のGANTZメンバーは絶対に守ります」

明里は茜から離れて、涙が顔に残りながらも笑顔で喋る

「うん、私も」

そうして明里は帰って行った

茜は絶対に、たとえ自分が死のうともGANTZメンバーを守る事を決めた。



## 大切な人（後書き）

もう少し文字を増やした、ほうがいいですか？  
コメント、感想を送って下さい。

## 心は何処に

茜は家で筋トレをしていた

ミッシオンにはスーツを使うが戦闘センスを磨くには筋トレが、重要だからだ

「よっし終わり」

茜は筋トレを終え汗を流す為にシャワーを浴びる

脱衣所にあるカゴに服を投げ捨て、着替えはとなりにあるカゴに入れシャワー室に入る

20分ぐらいで茜はシャワーから出て来る

茜の服装は黒いジャージに身を包んでいる

すると茜の体に寒気が駆け抜ける

「やるか」

茜は肩を伸ばす

すると腰辺りから転送が始まる

そうして転送が終わる

「茜ちゃん」

先ず最初に明里の笑顔が茜の目に入り込む

「こんばんわ」

そうして簡単な挨拶を終えるとGANTZに星人のデータが表示される

## 人形星人

特徴、人間に見える

好きなもの、人形

口癖、「心」

と

GANTZのトランクが一斉に開き、茜達は準備を始める

茜はガンツスーツを身にまとい足にはガンツソードが装備されている

すると茜はいつもの様に柔軟を始める

「茜って何でいつも柔軟なんてしてるの？」

西が疑問を聞いて来る

「やらないとダメでしょ普通」

「そうよ西、ちゃんとやらないと、いくらスーツを着てもねえ」

明里は大樹に話をふる

『俺にふるな』

『そう言えば前、大樹、アキレス腱切ってガンツに転送されてた』  
そんな事を話していると転送が始まる

転送が終わり茜は周りを見渡す

そこはだいたい400m四方の駐車場だった

駐車場にはかなりの台数の車が駐車されている

茜は更に周りを見渡すと大樹達がいた

「茜ちゃん」

三人が近づいて来る

「全員で移動するぞ」

そして全員で移動をする

中心の近くに着くと茜達の後ろから何かが襲う  
全員ギリギリで交わし、すぐさま武器を構える  
茜以外は全員Xガンを持つ

茜は襲った相手を見る

それは棒と棒でつながった西洋の人形だった

茜は直ぐに星人に向かってソードを降る

だが星人は茜の顔を蹴り上げる様に交わす

「くそ」

茜は直ぐに後ろに下がる

「撃つぞ」

その言葉と共にXガンが発射される

全てが星人に命中し、星人は倒れる

「終わったか？」

茜は確認する為に星人に近づく

すると星人は一瞬で起き上がり、茜を蹴ろうとする

（あれ、見える）

星人の蹴りがスーツのポイントを貫く

ポイントからはゲルが出るが

茜は気にせずに、冷静

先ほどもより早く振り抜き

切り裂く

そうして転送が始まる

ちいてん

あかねちゃん

10点

TOTAL 46点

と表示される

全員の採点が終わり解散する

茜は手を握り閉める

（なんだっ たんだ、あの力は）

## 僕の力は

あれ、何でここになんで

『なんでだー』

僕は心の声が口に出た

何故 僕がこの様な事を、言っているかと言うと2、3分前に遡る

――――2、3分前――――

夜

夜の街は建物、電灯の光がカップルや喧嘩、五月蠅い程騒ぐ酔っぱらい何かを照らし当てている

そんな街を茜は街をあるいていた

すると寒気が茜の体を駆け抜ける

寒気は一瞬だけ体をマヒさせる

（GANTZか）

茜は路地裏に走り込む

路地裏には誰もいなく、ただ暗闇が存在する

茜は路地裏に入る

すると転送が始まる

足からだんだんと消えて行く

そうして転送が終わり上がりは周りを見る

そこはいつものGANTZ部屋ではなく

ひと気がなく、ただ静寂さが漂う廃墟ね街だった

あれ、何でここになんで

「なんでだー」

茜は心の声が口に出た

茜の足元にはガンツソードが置いてあった

茜はソードを拾う

するといきなり後ろから刀が茜を襲う

茜は直ぐにソードを出し刀を抑え、刀の持ち主を見る

その姿は茜と同じ姿だった

「なんなんだよ」

その途端、星人のデータが頭に  
むりくり入り込む

ドッペルゲンガー星人

特徴、全てを真似る

好きなもの、本物を殺す

口癖、「本物は誰かな」  
と

「くそ、なんだこいつ」

すると星人はニヤツと笑い、刀に力入れソードごと振り抜こうとする

茜はソードを滑らせる

ソードと刀が擦れる火花が飛び跳ねる

茜は刀を交わし二人はほぼ同時に後ろに下がる

「本物は誰かな」

星人は茜目掛けて円を描く様に刃を振動させながら刀を振り上げる  
茜はギリギリのラインで交わしながらソードを肩に目掛けて振り上げる

星人も茜と同じ様に交わしながら、急にリミッターが外れたかの様に早く鋭く峰を茜の腹に振り抜く

「ぐはっ」

茜は腹に激痛が走り

その動きを理解出来ない

まま空中を吹き飛ばされ、建物にぶつかる

茜は壁を貫通しても吹き飛ば

茜は空中で体を起こす様にして、体制を直し、すぐさまソードを持ち直し足で円を描く様に後ろに引き構える

星人は直ぐに茜に近づき刀を振り抜く

（見える、しかも軽い）

茜は星座の動きを見て、

倍ぐらいのスピードで右腕を切り落とす

星人の肩からは血が吹き出し茜にかかる

茜は肩で息をしながらもソードを構える

星人は左手にソードを持ち直し茜に斬りかかる



（見える）

星人が茜を切ろうとした時には星人は茜により切り裂かれた  
「終わった」

茜には血の雨が振り注ぐ  
頭の中に何かが入って来る

ちいてん

あかねちゃん

1点

TOTAL 47点

そして自分の部屋に転送される

茜は倒れる様に座りこむ

何が僕に力を

僕の力は（後書き）

次回からはもう少し長くします。

## 覚醒した力

僕は感じ取っていた  
何なんだろう、この衝動は

前回のミッションから5日ほどがたったある日

茜はGANTZに呼ばれた  
今日も茜だけだった

（また、一人か）

茜は少しほっとしていた  
そうして星人のデータが出る

修行星人

特徴、なにかを教える

好きなもの、教え子を強くする

口癖、『雑魚い』

と新しいものが表示される

制限時間

0時間

（制限時間なんかあったのかよ）

茜は少しだけビクリしていた  
そうすると、GANTZのトランクが一斉に開く  
茜はスーツを着始める

茜は黒いスーツを身にまとうとガンツソードを足に装備する  
そうして柔軟を始める

茶色のシヨートヘアーを少し揺らしながら屈指などをやる

すると転送が始まる

今回は左右からジワジワと転送される

茜は目を閉じ音だけを聞いていた

転送が終わり茜は目を開け、周りを見渡す

転送された場所は学校のグラウンドだった

グラウンドには遊具が軋む音や風が学校の窓ガラスに当たり振動する音が響き渡っている

「普通の学校か」

茜は学校の方に向かう

なんだろう、この感じ

茜の中には何かが蠢いていた

茜は学校の中に入る

二階の廊下に行く

廊下の真ん中辺りには立つと何かが感じる

茜はとっさに窓側に移動する

そうつすると床にヒビが入り割る

茜は直ぐガンツソードを構える

すると星人と思える26歳くらいの刀を持った男が現れる

男は笑いながらも茜に斬りかかる

「くそ」

それは鋭く、早く、正確に

茜のミッションで覚えた剣技とは比べものにならない程に強かった

茜は体を引く様にしてなんとかソードで防ぐ

星人は急に横に移動をする

茜はこけそうになるが体制をギリギリ立て直す

「雑魚い」

星人の言葉が茜に突き刺さる

（僕は強くなっちゃいけないんだ）

茜の中に眠っていた衝動が目覚める

茜はソードで一本の線を描きながら、星人の腕や足を切り裂く  
その動きは星人と互角であった

だが星人は刀でソードを抑え、茜の顔面を蹴り上げる

茜は体を反りながら星人の蹴りを交わしながら、足払いをして星人を倒す

だが星人は倒れる威力を利用して茜を殴ろうとする

茜は直ぐに立ち上がりながら交わしながらソードを振ろうとする

すると星人も直ぐに立ち上がり、茜に目掛けて刀を振り放つ

ソードと刀がぶつかり響きあう

茜の目は死を直視して急に体が軽くなる

「はぁ」

茜のソードは星人の刀を切り裂いてく

星人は体ごと真つ二つになり血が吹き出て茜にかかり髪の一部が深紅と呼ばれる赤になる

茜は肩で息をしていると転送が始まる

また、最初と同じように両端から消えて行く  
転送が終わると採点が始まる

ちいてん

あかねちゃん

11点

TOTAL58点  
と表示される

茜は手を握り閉める

「死を見たよな？」

茜はそんな事を考えながら、スーツを脱ぎ捨てる様に脱ぎ、しまい服を着て家に帰る

茜は倒れる様に寝りにつく

僕はつよくなったのかな？

それから、11カ月ぐらいたつ  
そうこれが僕のはじまりだった

## 覚醒した力（後書き）

今回は遅くなりました  
ごめんなさい



## 最後の戦い

茜は街に出ていた

何故かと言うところこそ最近

ミッシヨンが毎日あるため茜は外に出てるようにした

街は深夜0時を通り越していたのに、金曜のせいなのか人が沢山いる  
建物と建物の間でイチャついてるカップルや、カラオケなどに入る  
人が沢山いる

茜はそれが不愉快なのか、静かな所に行こうとすると寒気が体に走る

（始まるか）

茜は人がいない場所に走り出す

にぎやかだった場所とは違い、ホームレスなどが寝ている者もいれ  
ば、ゴミを荒らしている者もいる

それはゴミ捨て場だった

そうすると転送が始まる

足からジワジワと消えて行く

それは子供が見れば泣き出すぐらい気持ち悪かった

転送が終わり、部屋につく

部屋は誰もいないのに人を飲み込むような威圧がある

それはGANTZから流れていた

そうしているとメンバー全員が来る

G A N T Zに星人のデータが表示される

神様星人

特徴、物を作る

好きなもの、寝る事

口癖、『青いのー』

と表示された 途端にG A N T Zのトランクが開き

茜達はスーツを着る

茜はスーツに足を入れる

足からは冷たいシリコンのような感触がする

スーツは裸でしか着れない為、少し違和感があるが着心地よい  
そうして着終わるとガンツソードを装備して柔軟をし始める

全員の準備が終わった所で転送が始まる

全員が両端からジワジワと消えて行く

茜は何故か目はつぶっていた

転送が完了して茜は目を開けるとそこは駐車場だった

駐車場は推定1000車以上は入るくらい大きく、半分ぐらいが駐車してあった

だが、駐車場は静かだった

以上な程に静かで、それは怖さまで覚えるように

後ろから誰かが話しかけてくる

茜は後ろを振り向くとそこにはメンバーが全員いた

『あつ、いたいた茜ちゃん探したよ』

明里は子守りをする姉のように言う

明里が近くに来て手を握る

茜は顔を赤くして慌てながら言う

『ああああ明里さん、なななな何してりゆんですか』

茜は慌てているせいか呂律が回っていない

明里は笑みを浮かべる

それはアイドル以上に可愛い笑顔だった

『迷子にならないようにだよ』

そうしてると大樹と西が『探すぞ』と言い星人を探し始める

かなり大きいせいか、5分ぐらい歩いても同じ景色が続いていた

真ん中辺りに近づくと星人が見える

それは何処にでもいそうなじいさんだった

茜達は武器を構えながら出る

『青いのー』

じいさんがそう言った直後に無数の矢が茜達に飛んでくる

西や大樹、明里は固まってXガンを撃ちながら交わしていた

茜はガンツソードを出さずに避けていた

それは矢が茜を避けているかの様に

そうしてると急に矢が止まる

『まだまだ青いのー』

西と大樹が神様星の両端に周り、Xガンを撃つ

Xガンは確かに神様星人に当たったが爆風がしてゴミが舞っただけで神様星人は無傷だった

その瞬間、西と大樹の叫び声が聴こえる

茜と明里は西達を見るとそこには、倒れて心臓に矢が刺さって血を

吹き出している二人がいた

明里が茜に囁く

『私がスキを作りから決めて』

茜は無言で頷くとそれと同時に明里が神様全員に撃ちかかる

『当たれー』

明里は叫びながらロックと同時に撃つ

『青いのー』

明里の攻撃は全て消える

まるで星人の回りに盾があるかのように

茜は神様星人の後ろに回り込む

『後ろはガラ空きだよ』

茜はガンツソードを投げる

ガンツソードはスーッと茜の強靱な力により250キロぐらいのス  
ピードで神様星人に迫る

神様星人から50センチぐらいの場所で持ち手が消えるが刃の部分  
が神様星人にぶつかりそうになる

神様星人は自分に向かってくる刃を右手で当てて粉々にする

『青いのー』

神様星人は誇らしげに言う

その瞬間、神様星人の左腕は消える

それは明里が撃った攻撃だった

だが、その瞬間、明里は死亡した

神様星人は右手で明里の心臓を突き刺し、右腕を振るう  
そうすると明里は消える

おそらく、神様星人が消したのだろう

次の瞬間、茜は神様星人の腹部を蹴ろうとするが、神様星人は触れる事なく茜を吹き飛ばす

茜は車に当たる

ボンネットはへこみ、ガラスは割れて警報音が鳴り響く

茜の節々は一発でガタガタだが、茜は立ち上がる  
すると茜は居合いの形をする

茜は深く息をすい、深く吐き目を閉じる

破壊をする

明里は次の瞬間、目を開ける

その目は、星人狩りをする目だった

茜は一瞬で神様星人に蹴りを入れるが、一瞬にして神様星人のオーラは変わった

それは茜の出している、オーラを食い尽くす程に強烈だった  
茜は飲み込まれない様にしながら

蹴りの体制をすぐに直して、合気道のつき見たいなのをする  
茜の手には確かな手応えがあった

だが、その瞬間、茜は神様星人に心臓をつき抜かれる

『えっ』

茜は血を吹き出しながら倒れる

『青いのー』

その言葉だけが響く

僕は死ぬない

まだ、たくさんやりたい事だっ  
てあつたし  
それにこんな死にかたは嫌だ

茜が次に目を開けた場所は

## 最後の戦い（後書き）

次からは『とある』に転送した茜と

『GANTZ』を更に進化させた世界の二つの作品を書きます

『とある』の方は『とあるGANTZからの転送者』と言うタイトルでやっていききたいと思います

『とある』が書けるのは多分、この話が終わってからだと思います

## 新たな世界

僕は死にそして目覚めた

僕は重いまぶたを開けて回りを見渡した

そこはGANTZ部屋と同じ間取りの部屋だった

そして数人の人がいて、奥にはGANTZとは違う浮遊している物体がある

何故か茜の服は黒をベースに作られたジーンズに、白いシャツになっていた

するとGANTZよりも一回りぐらい小さな丸い物体は静かにこちらに来る

茜の目の前で止まる

物体からはその場を威圧していたオーラが流れていた  
すると言葉が表示される

『君にこれを贈呈します』

すると刀とグローブが落とされる

刀は黒をベースにされていて、刃に白い線が通っていた

長さは1m60cmぐらいで茜にしては長刀並の刀のせいかな茜はしまう場所を考えていた

グローブは相反して、中心にある黒い宝石から黒い線がグローブに付いていたリングまで伸びている

すると黒い玉の上に茜のデータが表示される茜が3Dで表示表示される

3Dは映像とは思えない程にリアルだった

茜は自分の姿を見て目を見開いた

「何これ」

3Dの映像は男とは更に程遠くなっていた



体の筋肉はGANTZにより全くなかったのが少しまともになったのが、今の茜からは全く感じられず筋肉の問題ではなく、白い女性の体になっていた。

顔も同様に白く

髪は腰まで滑らかに伸びており、そのうえ茶色だった色は鮮やかな誰もが見とれる黒になっていた

茜はかなり落ち込んでいた

すると横に茜のデータが表示される

名前、神田 茜

13歳

ランク、未知

身長147cm

体重40kg

性別、男

と表示される

茜以外は「ええー」と叫ぶ

すると一人の女性が話しかけて来る  
声は透き通るように綺麗な声だった

茜は女性の方を見る

髪は鎖骨ぐらいまであり、色は綺麗な青で

唇は鮮やかな赤。目も同色で赤だった

「君、何処の出身なの」

「東京です」

茜は少し引きずりながら答える

「そうなんだ、あつ そうだ私の名前は天草<sup>あまくさ</sup> 涼<sup>りょう</sup>って言うんだ」

涼はウインクをしながら言う

そうすると急に体が消え始める

両側からジワジワと消える

そうしてある場所に転送される

茜は回りを見る

そこは街だった

街は鳥やノラ猫の気配すらせずにただ電灯の灯りだけが光る

「茜ちゃん」

後ろから急に声が掛けられて茜は直ぐに戦闘体制に入る

長い髪は刺す様に舞いながら茜の背中に戻る

茜は声の主を見る

声の主は涼だった

「何だ、あなたか」

茜は飽きれながら言う

「何だとは何よ、涼って呼びなさい」

茜はため息を吐き出しそうに返す

「はいはい、涼さん」

すると、涼はふと疑問に思ったかの様に聞いて来る

「君なんでそんなに冷静で要られるの」

茜は問いに答えない

（何かが近づいて来る）

涼はもう一度聞いて来る

「ねえ」

すると目の前から3体の侍が来る

急に茜の目が変わる

「早くいくわよ」

涼は茜の手を握り逃げ用とする

だが茜は動かない

「あいつら殺していい」

茜は冷静にかつ威圧とオーラを放ちながら問いかけり

「私達だけで倒せるわけないでしょ」

茜は涼の手を降り離す

「君は弱いね」

茜の言葉は冷たく涼に突き刺さる

茜は侍の方に向かう

「私は弱くない」

涼は強く自分を見ながら言う

「ならそこで大人しくしてて」

茜は刀を出し両手で持つ

手にはグローブがはめられていた

茜は侍に向かい走り出す

すると一瞬で二人の侍が斬り殺されていた

ブンつと風が切れる音だけが静寂な夜に鳴り響く

茜は死体の後ろで刀に血を付けたっていた

まさに刹那に起り、刹那に終わった

侍の切りあとはまるで、ハサミで紙が切られたかの様に切られている

「次はあんだだよ」

茜はそう言うつと刀を振り付いていた血を吹き飛ばす

茜の横にあつた壁に血がついた

「くそぉー」

侍はやけになつたのか無鉄砲に茜を切ろうとしてくる

茜はそれをかわし始める

侍が茜の右肩を切ろうとしてくるが茜は左に交わす

すると侍は茜のスピードに付いて来れなかったのか、茜の右横に倒れそうになる

茜はそれと同時に刀を手首で回して侍の首を跳ね飛ばす

侍は血を吹き出しながら倒れる

「君、何をしていたの」

涼は茜に問いただす

「質問の意味が解らない」

「だから、何であんな簡単にあいつらを倒せるのよ」

涼が怒鳴る様に言うのと転送が始まる

「くそ、次に会ったら絶対に聞くんだからねー」

涼はそんな言葉を残して消える

茜の転送が終るだが、そこはさっきの部屋ではなく、学校の校長室だった

しかも、目の前には校長先生らしき人がいた

「えっ」

茜はかなり戸惑っていて言葉にすらなっていなかった

「君が神田 茜君かね」

茜は何とか戻って来て喋る

「はい」

「そうか、話しはGANTZから聞いていたぞ」

「はぁ」

茜は余り理解をしなくなかった

「理解はしなさい」

茜は大人しく理解した

そつして簡単な説明会を受けて聞き直す

「僕は今日からこのリアル学園であるREALとか言うエセGANTZで戦えと」

「君は理解が早くて助かる、あとこの学園はREALで現れた者が

人を殺さない様にするための組織じゃ、そして武器などは欲しかったらREALで手に入れた金で買うがいい」  
そして茜は寮でくらす事になった

部屋に入る

何故かマンション並の大きさだった

ベッドと冷蔵庫、制服だけは常備されていた

（欲しかったら、REALで金をためると）

茜がベッドの上を見ると封筒が置いてあった

封筒の中には携帯が入っていた

（なるほど、これに金が貯まると）

茜は携帯を起動させる

画面にSTARTと出る

起動画面が終わるとアプリ画面が出る

アプリは普通の携帯のアプリにマネーと校則だけが増やされていた  
だけだった

校則を確認する

ある程度は普通の学校だったが、二つだけあり得ないのがあった

1、常に武装をする

2、本校の生徒は警察と同じ組織とされる

（これは）

茜は余りツッコまないが制服を見て唖然とする

「何で、高校生なんだー」

生徒手帳には高校2年生と印されていた

茜は諦めて寝る

## 新たな世界（後書き）

今回は遅れました  
すいません

転入初日（前書き）

今回も遅れました  
ごめんなさい

## 転入初日

僕は逃げていた

呼吸はかなり荒れていた

そのせいか、余り本気で走れずにいた

僕の目の前でゴミを捨てている男子生徒がいるが  
僕は構わず突き進む

「はあー」

僕は高く飛び男子生徒の上を通るために高く飛ぶ

茜は足を胸につけながら男子生徒の上を通過する  
僕はギリギリ男子生徒の上を通るのに成功した

まだ体力は大丈夫だな

一瞬だけ呼吸を止めてダッシュを付けながら

僕はまた走り出す

そうこれが転入初日目の放課後だった

何故、僕がこのような事になったかと言うと  
朝から始まっていた

午前5時30分

基本的には起きている人は少ない時間だ

ましては学生など大事な睡眠時間だ

よほどの事がない限り寝ているだろう

ちなみに僕が起きた理由は簡単に習慣で朝に筋トレをするためだった  
そうして僕は筋トレを始める



まずは腕立てから

腕立ての姿勢になり腕立てを始める

昨日は色々あったせいで、できなかったためか微妙に体が重い  
だけど僕は気にしないで腕立てを続ける

そうして、1時間ぐらい腕立てや腹筋をしていた

僕は立ち上がる

軽く腕を伸ばすと大量の汗がかいていたのが解った

服が僕に張り付いている

「シャワーにでも入るか」

僕は替えの下着と制服を持って脱衣場に入り服を脱ぎ始める

そして、約30分間シャワーに入っていた

時刻は午前7時になろうとしていた

学生なら朝食を食べ始めるだろう

僕もその一人である

だが、一つの疑問が僕の中に浮き出る

それは

「あつ、何処で食べるんだ」

普通なら学食で食べるのだろうが、僕は今日から学校に行くため知る余地もなかった

僕はすぐさま携帯を出して確認する

携帯には『学食』と印された物があった

僕は『学食』を開く

本校の学生はREALで手に入れた電子マネーにより買う事が出来る  
入れる時間は午前6時から午後9時まで  
と印されていた

僕はマネーのアプリを起動させる

画面には円、ドル、ユーロと各国でのマネー変換がされていた  
20000円

と印されている

僕は金がある事が判ると学食に行く

まあ、場所がわかるはずもなく地図を見ながら行く

学食は1000人ぐらいは入るだろうとゆうくらい大きいが流石に  
朝食を食べる学生は多く人でゴツチャ返していた

食欲を誘う匂いが充満していた。

そうして茜は30分ぐらいで食事を済ませて部屋に戻る

僕は部屋に戻る

だが、戻るのにも10分ぐらいがかかり

結局、部屋に着いたのは7時50分だった

部屋に入ろうとするとメールが来る

茜はメールを見る

8時25分に職員室に来るように

学園長

と表示される

僕はその短い文に唖然としながらも、行き先が解りほっとしていた。

（まだ時間があるな）

僕は時間がある為、座禅を組み、裏返した拳を構えながら精神統一  
をする。

まずは足から段々と力を脱き始める。

匂い、感覚、思考、視力、全ての力すらも抜く

そして僕は全ての力を抜き終わると、ある拳の中心にだけ集中させる。

そして僕は20分間やる

僕は時刻を確認する

時刻は7時10分になっている

ゆつくりと感覚を戻しながら僕は立ち上がる

そして携帯で学園内の地図を開きながら、職員室に向かう

まあ、当然10分ぐらい掛かる

僕は職員室の前に立ち、呼吸を整えてノックをして職員室に入る

「失礼します」

僕が入ると数人の視線を感じる

職員室は教室二個分ぐらいの大きなだった

オフィステーブルが並び39人ぐらいが座れるぐらいだ

オフィステーブルは10万はするだろうと言うぐらい高級感が漂っている

すると先生だろう女性が話し掛けて来る。

「君が神田 茜ちゃんかな？」

僕は眼を見開いた。

その姿は明里さんが髪を伸ばしたような姿だった

「明里さん!？」

僕は何を言っているのか解らなくなっていた。

「君、なんで私の名前を知ってるの」

すると学園長が僕達に話しかけてくる

「神功君、茜君、来てくれ」

僕達は学園長に連れられて学長室に入る

学長室は一つの教室並に大きく、100万はするオフィステーブルが置いてあった

何処まで金を掛けてるんだよ

学生長が僕達の事を聞き始める

「君達は知り合いじゃったのか」

学園長は不思議そうに聞いて来る

「いいえ」

明里さんはキツパリと答える

「じゃが、さっきの茜君は」

学園長はまた不思議そうになる

「前の世界で同じ人とGANTZで一緒だった」

僕は真実を言う

「なんだか、始めて会った感じじゃないのよね」

明里さんもまた不思議そうになる

すると学園長がいい案を思い付いたかのように喋り出す

「そうじゃ神功君、茜君は転入初日じゃ

君が面倒を見てくれ」

僕は一言 言葉が浮かび上がる

「はあ」

数秒ほど置いて

「はあーーーー」

僕は叫ぶ

「なんじゃ、大きな声を出して」

「あり得ないだろ」

すると横から声が掛けられる

「私はいいですよ」

「明里さんまで何を」

僕はとつさに『明里さん』と出る

「始めて会った感じじゃないしね、後 明里さをじゃなくて、明里先生ね」

そうして僕も納得して教室に向かう事にした

教室に向かう途中に明里さんが自分の事を聞いてくる。

「明里さんは優しく僕を沢山、助けてくれました」

僕は余韻にしたりながら喋る

「守りたかった、でも僕は明里さんを助けれずに死んで、しかも今、僕は生きている」

僕は寂し元に言ったのだろう

すると急に明里さんが僕に抱き着く

優しく抱き込む様に

「泣かなくていいんだよ」

明里さんは助けを述べるかの様に囁く

「えっ」

僕の目には涙が溢れていた

雫は僕の頬をつたり床に落ち飛び跳ねる

「私からしたら、茜ちゃんは始めて会った人だけどあなたは大切な人だから」

明里さんの声は静かにか細く今にも消えてしまいそうな

「僕にもう一度、あなたを守らせてください」

僕は自分が思った事を掴み隠さずに伝える

「はい」

明里さんがそう言うのと静かに唇を重ねた

そうして僕達は自分を落ち着かせて教室に向かう

遅れる事、5分

やっと教室に着いた

「私が読んだら入って来てね」

「はい」

そうして明里さんは教室に入っていく

扉の前に立っていた、僕には中の声は余り聞こえないが2分程度すると明里さんの声が僕の耳に入り込む

「茜ちゃん、入って来て」

僕は扉を開け、足を前に出す

教室の中では人の雑音がすごい

僕は明里さんの横に立ち明里さんの顔を見る

明里さんは笑顔で話す

「はい、静かにして」

すると教室は静かになる

「じゃあ、茜ちゃん自己紹介をしてね」

僕は呼吸を落ち着かせて自己紹介を始める

「神田 茜です、よろしくお願いします」

僕は笑顔で自己紹介をすると「キャー」と男女ともに、黄色い悲鳴が聞こえるただ一人を除いては

## 転入生（前書き）

今回は短くして涼の描写をいれました。

## 転入生

私はかなりむしゃくしゃしていた。

それは昨日いた、あいつのせいだ！

何で初心者私が私に命令するのよ

私は今、REALの中で一番強いのも  
それなのに何で

すると神功先生が少しだけ送れて来る

「みんな、遅れてごめんねー」

神功先生は軽く謝り教壇に上がる

「早速だけど転入生を紹介するは茜ちゃん入って来て」

すると扉が開き転入生が入って来る

私は余り興味がなく、見なかった

神功先生が周りを落착着かせると

転入生が自己紹介を始める

「神田 茜です、よろしくお願いします」

私に衝動が走る

私は急いで転入生を見る

それは昨日あった、私をむしゃくしゃさせる

元凶だった

すると「キヤー」と悲鳴が聞こえる

私は立ち上がり刀を構えて雑音をかき分けてあいつの肩を切る

だけど、あいつは糸も簡単に私の刀をはじき返し、しかも私の首に  
自分の刀を置いていた

私はその単純な動作さえついていけなかった



## 転入初日 後編

僕が自己紹介を終えると「キャー」と言う黄色い悲鳴が鳴り響く  
すると一人の女性が僕に向かって来る

女性の手には刀が構えられている

（涼さん？）

僕は少しだけ焦りながらも涼さんをちゃんと見る

すると涼さんが手に持っている刀で僕の肩を切ろうとしてくる

僕は直ぐに持っていた刀を出し、涼さんの刀をはじき返す

涼さんは軽く後ろにバックする

僕は体に染み付いた動作が涼さんを襲う

刀は軽く唸りをあげながら涼さんの首に移動する

「何なんですか いったい」

僕は冷静に聞く

「何なのよあんだ、私ですら無理なのに何であんなにも簡単に」

涼さんの言葉は僕からしたら不愉快の何者でもなかった

「涼さんは命を掛けた事がありますか」

「えっ」

涼さんは僕が言った言葉に戸惑っているが僕は喋り続ける

「死ぬ痛みすら知り、それでも大切な人を守りたいとあなたは思ますか」

僕は冷血にただ言葉を述べる

「あんたは何を見てきたのよ」

涼さんの言葉には強さをただ求めながら喋る

「毎日、夢で見るさ」

涼さんは動揺するが僕は喋る

「殺した奴をまた夢の中で殺して、  
段々とそれが気持ち良くなって、

自分が壊れるのが解るんだ」

僕の目には気づかず、涙が溜まっていた

涼さんはまるで小動物を見る目で僕に話し掛ける

「ごめんね」

涼さんは僕に抱き着きながら喋り続ける

「私を守るから、君が全ての人から見放されても」

すると涼さんの唇が僕の唇に触れる

僕は後ろからゴゴゴツと聞こえる

後ろを見るとそこには悪魔<sup>あかり</sup>さんがいた

明里さんも何故か抱き着きキスをする

「何で神功先生が茜ちゃんにキスしてるんですか!？」

「茜ちゃんは私の彼氏だからよ」

そうして色々と誤解をとく

だが、涼さんは僕と付き合うことになった。

そうしてHしを終わらせて2時間目の数学が始まる。

「えー、では神田君」

数学で何故か僕が円周率を答える事になった

明里さんがいなく涼さんも違う授業でいないため、僕はやる気がなかった

だが問題にはちゃんと答え

「
$$\begin{array}{cccccccc} 2 & 6 & 4 & 3 & 3 & 8 & 3 & 2 & 7 & 9 & 5 & 0 & 2 & 8 & 8 & \vdots & \text{です} \end{array}$$

そこにいた全ての人は啞然としていた

まあ、飛び級とはいえ僕は中学生だ無理もないだろう

覚えていた理由は簡単

学校で流行っていたからだ、誰が暗記力があるか測る為に  
そうして数学は終わる

僕は次の授業である体育の準備をしようとするのが人に囲まれ、準備は出来ずにいた  
趣味や特技と言った事を聞いて来る者もいれば、授業での事を聞いて来る者もいる

「はい、はい、とつと次の授業の準備をする」  
すると全員が準備を始める

僕は声の主を見る

そこには明里さんと涼さんが立っている

「茜ちゃん、君はこつちで着替えるから」

明里さんは僕の手を引きながらある場所に向かう

「先生、そっちは男子の更衣室じゃありませんけど」

涼さんからは黒いオーラが流れている

「男子更衣室なんかにはやったら襲われちゃうでしょ」

「先生の方が心配ですよ」

二人はいがみ合いながらも結局、明里さんに連れられて着替える事になった

そうして着替え終わる

着替えるといつても、重りが付いている制服に着替えるだくだ

そしてグラウンドに移動する

グラウンドには射的用の施設から、移動訓練用の1周5kmはあるだろうとゆうくらいのコース、剣道場まで揃えられていた。

僕は少しだけ啞然としていた

そうして僕はまずコースを走る事にした  
コースでは二人一組の競争せいだった

僕はある程度前に並ぶ  
すると1番目が走り出す

コースには銃やジャンプをしないと通れない段差がある

そうしてると一人に銃弾が当たる  
だが銃弾は制服に当たるだけで貫通はおろかただ痛みだけが通っている感じだった  
そうすると横にいた女生徒が話し掛けて来る

「君、噂の転入生でしょ、これに出るなんてすごいね」  
女生徒は楽しそうに喋る

「何が？」

僕は不思議に思い出しながら聞く

「何がってこれはねえ、まだ一人もクリアした人はいないんだよ」  
そうすると僕達の番になる

スタートの合図で僕達は走り出す

女生徒は足早とリタイヤした

僕は直線に走っていると左右から銃弾が撃ち出される  
だが僕は避けるそぶりすら出さずにただ直線に走り続ける  
周りにはあり得ないと言う雰囲気だが僕はただ真っ直ぐに走り続ける

すると銃弾は僕をすり抜ける  
まるで僕の周りに壁があるかの様に

周りは啞然としているが僕は走り続ける

1 m程度進んだ所で第二射が来る

第二射ではマシンガンに変わっている

だが振れが無く撃ち出される

それにより弾幕が張られる

流石に僕でも大変かな

僕は弾幕の間を縫う様にくぐり抜ける

だがマシンガンは僕を追う様に撃ち出される

その瞬間、僕は高く飛ぶ

前に段差があつた為だ

銃弾は僕に追いつけずに乱射される

すると足元に2丁の銃が置かれている

目の前には米粒程のマークが付いている

僕は直ぐに銃を取る

銃はフルオートの拳銃だった

(16か)

僕は重さだけで総弾数がわかる

直ぐに走りながらマークを撃つ

これは拳銃をライフルの変わりにしている様なものだった

銃弾は全てマークに当たる

そうして銃弾が僕に向かい飛んで来る

が僕は交わしながらも、残りの約5 kmを終わらせる

そうして次は射的訓練を受ける

まあ、さっきのを見て判るかの様に何故か僕は銃の扱いが得意だった

剣術の方も G A N T Z でかなり鍛えられていた為、一瞬だった  
教師がクズだった

それは瞬く間に全生徒に広がり今にいたる

僕は何とか逃げ切れた

そして寮に戻れた

（大変だった）

僕はかなりの量の部活動誘を受けた

そうして夜になっていく

## 戦闘（前書き）

感想を下さい

## 戦闘

夜

夜と言っても太陽が沈み1分と経っていない

茜はグラウンドで刀のトレーニングをしている

流石に先生に呼ばれる

ある程度の追っかけは消えたおかげで移動出来る様になった

そうして茜は食堂に行く

食堂には明里、涼がいる

茜は二人に呼ばれて二人に挟まれる形で座る

「茜ちゃん、遅いよ」

明里はそう言いながら茜に「アーン」をしてくる

茜が食べると涼も負けじと「アーン」をしてくる

そうして25分ぐらいで食べ終える

「あつ、そうだ涼さん」

茜は涼に問い掛ける様に話し出す

「なに茜ちゃん」

「銃とナイフって何処で買うの」

携帯には武器は販売してるとは書いてあるが、販売場所までは書いていなかった

「あれはね、売ってるんだよ」

涼はある部屋を指差す

その部屋には『ウェポンショップ』と書かれていた

茜は余り見ていなかった

「やっぱ、茜ちゃんも戦うんだよね」

明里は少し寂しそうに言う

「大丈夫ですよ、<sup>あいつら</sup>星人の方が強かったし」



そうして茜達はウエポンショップに入る

そこには重火器から刀剣類、電気系の物までそろっていた

「涼さん、銃の選び方ってなに？」

茜は初歩中の初歩を聞く

「えーとねえ、手の大きさと反動あとは好みかな」

茜はそうすると軽く物色を始める

そうして茜は1丁の銃を取る

それはフルオートの手動ガンだった

総弾数は16発だった

「それでもいいけど反動すごいよそれ」

涼は注意するが茜は余り聞いていない

茜はバタフライナイフを出す

「うわーすごいわね茜ちゃん」

明里はバタフライナイフを余りナイフとは見ていなかった

「茜ちゃん、それ使い辛いわよ」

「それは承知ですよ」

そうして茜は武器を買う

19000円とかなりの値段だった

時刻が11時を回った頃、転送が始まる

頭からゆっくりと消えていく

そうして転送が終わる

そこには涼と数人の生徒がいた

茜を含む全員が制服で転送されている

茜の腰には銃と刀が装備され、グローブを着用していた

ナイフは制服の中に閉まっているのだろう

転送が終わると周りにいた、数人の人が慌てる

まあ、単純に一日で記録がかなり塗り変えられた為だ

だが、直ぐに涼が助けてくれたので収まった

「涼さん、ありがとうございます」

茜はかなりありがたそうに言う

「じゃ、御礼にキスして」

茜は赤くなる

つられて、明里も赤くなる

茜は明里にキスをする

それは他人から見ても解るぐらい優しくする

二人は一瞬で赤くなるが、そのまま再度転送が始まる

そうして二人は路上に転送される

「涼さん」

「何、茜ちゃん」

「何で抱き着いているんですか」

涼は茜に抱き着いていた

しかも一向に離れ様としない

そうして10分ぐらい二人は歩く

その時、様にあったコンクリートが壊れる

茜は直ぐさま、涼を連れ走り出す

「涼さん、銃出して」

茜の言葉とともに二人は銃を出し構える

コンクリートの粉が舞ってすがたが見えない

二人は唾を飲む

すると姿が見える

それは西洋の騎士だった

二人は見えたと同時に銃を撃ち出す

だが、銃弾は厚い甲冑は破れない

「甲冑の間を狙ってください!!」

茜は自分も撃ちながら叫ぶ

二人は狙うが甲冑の間に挟まるだけで銃弾は通らない

（行くか）

その瞬間、茜は挟まった銃弾に合わせて刀を突き刺しながら間を移動させる

すると刀から火花が飛び、銃弾に発火する

「やめろ」

騎士は叫ぶが茜はやめない

声だけが無残に響き渡る

騎士は銃弾の発火により出たガスと茜の刀により死亡する

「やっぱ、すごすぎる」

涼は少し落ち込んでいた

無理もない

茜の動きには一切の無駄が無く、ただ動くだけで恐怖を覚えるだろう  
「涼さん、何、落ち込んでいるんですか、とっとうりますよ」

「はっ、待ってよぉー」

茜の言葉に目覚めたのか涼は茜に追う

100mぐらい歩いた所で新たは騎士が見つかる

騎士はグラウンドの中止辺りにいて、しかも辺りには電柱が無く姿が見えない

「どうします」

茜は冷静に聞く

「流石に今回は呼んだ方がいいんじゃない」

涼が答えると直ぐさま茜が喋る

「あっ、いえ、どっちがスナイパーをやるかで話していたのですが」  
茜の言葉に涼は呆然とした

（次元が違う）

涼はそう思うのだった

そうして涼が銃で応戦し茜が騎士をやる事になった

作戦が始まる

涼が騎士に向かい銃弾を撃つ

銃弾は騎士の頭や武器に集中的に撃ち出される

茜はグラウンドを走り騎士の方に向かう

すると騎士が茜を殺す為に茜に向かって走り出す

茜は加速をする

騎士はそれでも走るが次の瞬間、騎士は止まる

騎士の後ろには茜が普通に立っている

ただ一点を除いて

茜の刀には大量の血が付いている

茜は刀を振り、血を全て落とす

すると騎士から何かが落ちる音がする

涼が急いで見る

落ちたのは武器や付いているアクセサリーでは無く、頭だった  
首から跳ねらていた

涼が固まっていると転送がされる

そうして転送が終わる

「茜ちゃん、すごすぎ」

涼がいきなり茜に抱き着く

そうしてじゃれあいながら二人は寮に戻り寝る

## 過去、最後の涙（前書き）

今回は過去を書いてみました  
たまに書いていいいと思います

## 過去、最後の涙

それは茜が涙と言う、言葉を捨てた時だった

――――9ヶ月前――――

茜は何時もの様にGANTZに呼ばれる  
転送が終る

そこにはメンバー全員がいる

「明里さん、こんばんは」

茜は何故か明里にだけ話す

「こんばんは、茜ちゃん」

茜の言葉に笑顔で答える明里

転送が終わってから2分ぐらいがたつと星人のデータが表示される

吸血鬼星人

特徴、いっけんふつう

好きな物、黒いボール

と表示される

するとトランクが開く

茜達は直ぐにスーツに着替える

全員の準備が終ると転送が始まる

（始まるか）

全員が同じ事を考えていた  
そうして転送が終る

そこは地下鉄だった

「あれ、何で人がいるんだ」

「そうだな、今までこんな事なかったのに」  
全員が同じ様な事を考える

「どうする」

西はどの様に行動するべきか考え始める

「四人で動きましょ」

明里の案に決まり動こうとした時、銃声と銃弾が飛びかう  
乗客は走り出すが銃弾に当たり死亡していく

茜達は椅子の角に隠れて銃弾を交わす

（何なんだよ）

大樹はそう考えながらもXガンを準備する

茜達とはっさに準備していた

西はXガン

茜はガンツソード

明里も茜と同じにしていた

すると銃弾が止まる

一瞬だけ無音になるが直ぐに先程よりもうるさくなる

茜と明里は吸血鬼星人に向かい刀を切り落とす

大樹達はスキを見て撃つ

茜は吸血鬼星人の肩に目掛けてソードを降るが吸血鬼星人は銃でソードを抑える

横にいた吸血鬼星人は茜に撃つが茜は交わす  
すると一瞬、抑えていた銃口が茜に向く



茜は交わしながら、右足を後ろにひきながらソードを回して吸血鬼星人二体の首を跳ねる

すると明里のソードが茜を襲う

茜はギリギリ交わす

「ごめーん」

明里はそう言いながら吸血鬼星人を切り殺す

二人は西達を見る

西達も倒したらしく手を上げていた

茜は動こうとすると茜は抱き付かれる

と言うより刀を首に向けられた

茜の耳元で話し声よりは大きな超えが聞こえる

それは綺麗な女性の声だった

「仲間の仇を」

女性は茜を盾にしながら銃を撃つ

だが、当然の様に茜の背中には胸があたる

明里は交わしながらも星人に近かすぎ茜の腕を引っ張る

「茜ちゃんを放しなさい」

すると星人は明里に銃口を向ける

「この可愛い物体は私がもらう」

「はっ」

茜意外のメンバーは全員ハモる

茜は固まっていた

『殺されたいんですか』

明里はすこし赤くなりながら言う

「黙れ」

星人は銃弾を撃ち出すがその時、茜は軽く抱きつく

「撃つちゃだめー」

茜の言葉で銃が止まる

「何でよ、あいつらは君を」

星人は心配をした姉の様に言う

「違うよ、皆は良い人だよ」

茜は言葉は星人の心に深く響く  
すると星人は茜の首に噛み付く

「あっああ」

茜の体に少しづつ吸血鬼の血が流れていく

（ああ、美味しい）

星人はそう思いながら自分の血もいれていく  
すると星人は茜から離れる

「これで貴方は私の仲間よ」

星人は微笑みながら喋る

「さあ、どうやってここを出しましょうか」

星人の言葉に全員が反応する

「お前を倒さないと帰れないんだよ」

西はそう言いながら星人にXガンを向ける

「そう、なら」

星人は明里達に銃を向ける

「この子は2回死ねる、なら君達を殺して、この子を助ける」  
怖すぎる程の冷血な喋り方だが優しさが伝わる

星人は再度、銃を撃つ

銃弾は鋭い刃の様に明里達に飛ぶ

が銃弾は途中で止まる

ドサツと何かが倒れる音がする

全員が音がした所を見る

そこには胸と何から血を出している茜が倒れていた  
全員は直ぐに茜の元に駆け寄る

「ダメだよ、皆」

茜は掠れながらも喋る

「もう喋らないで茜ちゃん」

明里が涙を流しながら言う

「私が死ねば助かるの」

「ダメだよ」

茜は星人の言葉に何と反論する

「良いんだよ、君が助かるなら」

星人は茜の耳元で喋る

「泣いちゃだめだよ、男が泣いていい時は大切な人のためだけだよ」

茜は泣いていた

「守ってね」

その言葉と銃声だけが響き渡る

そうこれが茜が流した最後の涙だった

## 楽しい休日

僕は休日にもかかわらず、銃を撃っていた

まあ、拳銃をライフル替りに使っているだけなのだが、周りは驚いているばかりだ

1時間ぐらいやると流石に疲れて来たため

一度、銃を置いた

僕はヘッドホン型、耳当てを取る

ヘッドホンからは音楽が聞こえる為、集中力が持つ

「ふあああ」

僕は寝起きの様な間抜けな声を出しながら体を伸ばす  
周りの人が赤くなる人が多数いた

「茜ちゃん、どうだった」

僕は声のした、後ろを見る

そこには涼さんがいた

「涼さん、普通ですよ」

そう言いながら、僕は得点表を取る

僕は軽く見てから涼さんに渡す

「これは」

涼さんはがっかりしながら、得点表を落とす

僕は拾い、再度見る

そこにはこう記されていた

使用銃『ベレッタM92』フルオート

使用弾数、1000発

ライフル用エリア

Level、SSSランク

結果、100点

と書かれていたが僕からしたら、普通だった  
涼さんは啞然としながらも納得していた

ちなみに最低はCランクで、C、B、A、Sと上がっていきますよ

僕は10分間休み、刀を持ちながら訓練所に向かう  
涼さんもナイフを出している

そして僕は中心に移動する

中心からは多数の銃口が見える

ざっと数えただけでも5万はあるだろうか？

すると入り口に1mの防弾硝子+衝撃吸収材が加工されていた

確かに、あれなら大丈夫だろうな

そして僕は呼吸を落ち着け始める

呼吸の波は段々と一定数になる

僕はそれを確認しながら刀を構える

右足を後ろに引き、刀を持つ

さやは捨て僕は目を閉じ、刀にだけ集中する

すると銃声が響く

頭の中に一点の音がなると同時に目を開け刀を降る

刀は銃弾を切り裂く

カランッと銃弾が落ちた時には僕は次の体制に入っていた

空中には10弾程の銃弾がある

銃弾は僕が少しでも動けば当たる位置に飛んで来る

僕は字を書く様に刀を動かす

すると銃弾は綺麗に落ちる

だが次の瞬間、1000発以上の銃弾が僕に向かい飛んで来る

流石に面倒くさい

僕は全ての音を聞く

すると銃弾の位置がある程度予測が出来る

僕はナイフを左手で持ち歩く

その途端、銃弾が落ちる

そして訓練が終る

僕は待合室に立つと涼さんが話し掛けて来る

「すごかったわね、茜ちゃん」

「ありがとうございます」

涼さんはそうして訓練を始める

だが、僕はこの集中力を解く為に涼さんの訓練が見れなかった

涼さんの訓練が終わり、時刻は午後12時30分になろうとしていた

「茜ちゃん、一緒にお昼を食べましょ」

涼さんはお腹を空かせた感じで話し掛けて来る

「そうですね」

僕は笑顔で答える

すると涼さんも笑顔になり、食堂に向かう

食堂にはピーク時間の為か、かなりの人がいる

「食券、買いましょ」

涼さんは「そうね」と言い、僕達は食券を買いに移動する

僕はマナーを確認しながら列に並ぶ

100000円と表示されている

（今回は高いな）

そうしてると僕達の番になる

「私は和食定食にすりけど、茜ちゃんは何にするの」

「僕はドイツ定食にします」

軽く悩みながら決めた

そうして食券を買い、プレートを取る

ドイツ定食にはスコーン、ポトフ、シュニッツェル、サラダがある  
席に座り、食事を始める

涼さんのプレートには炊き込みご飯、味噌汁、塩ジャケ、おひたし  
がある

僕はスコーンを千切り食べる

スコーンは柔らかく食べやすい

そうして昼食を食べ終える

すると涼さんが思い出したかの様に喋り出す

「茜ちゃん、服って持ってる」

「ないですね」

僕は私服を着る機会がない為かすっかり忘れていた

「そうなんだ、じゃあ買いに行こ」

涼さんは可愛いらしく言うが何処か違和感を感じた

僕達はある程度、充実している服屋に来た

僕は女性物のジーンズを見ていた

何故、女性物かと言うと男性物を履くとぶかぶかになるからだ

「茜ちゃん」

涼さんの声が聞こえ僕は声の方を見る

そこにはスカートを持った涼さんがいた

「涼さん、それって」

涼さんは笑いながら僕に服を渡し着衣室に入れる

「りょくさん」

僕は疲れた感じに言う「と涼さんが返して来る

「何、着せて欲しいのぉ」

涼さんは悪戯な感じに返す

「もう、着ますよぉ」

僕は諦めてスカートを着る

そしてカーテンを開ける

ミニスカートは黒がメインで折り目に一本づつ白い線が入っており、黒いストッキングを履き、ラフなワイシャツを着ている

涼さんは赤くなっていた

「可愛い」

と周りから聞こえる

「足がすごくスースーしますよぉー」

僕は軽く涙目になる

「可愛いからいいの」

涼さんが僕に抱き付いて来る

多分、周りから見たら女子友に見えるのだろうか？

「これ？脱いでいいですか？」

僕はスカートを指差しながら言うが

「ダメだよ」

と一瞬にして心が折れる

僕は諦めて男性用の服も買い歩き出す

「あつ、私ジューズ買って来るね」

涼さんはそう言ってジューズを買いに行く

そうすると、まあナンパに会うわけで

僕は軽くナンパをあしらって涼さんと街をブラブラする



「どこ行こうかなあ」

「カラオケ行きましょ」

僕は素直に目の前にあったカラオケに行きたいと思った

そして二人でカラオケに行く

今日はレディースデーらしく、僕は違和感なく割引された

――17時――

二時間以上入っていた

まあ、わからなかったが

そして僕達は寮に戻る

「茜ちゃん？」

疑問系の声が聞こえ、僕は声の方を見る

そこには明里さんがいた

「可愛いー」

明里さんが抱き付いて来る

多分、僕はかなり赤くなっているだろう

直ぐに涼さんが明里さんを外そうとするが外れない

そして涼さんと明里さんと別れて自分の部屋に戻る

僕はベットに寝転がり眠る

だが、女装は恥ずかしかった

疲れ（前書き）

今回は少し短いです

## 疲れ

茜は今まで女装をしていた為か、疲れて寝ていた  
時刻MP10:50分になろうとしている

茜はだるそうに起き上がる

「ふあー」

腕を大きく上に伸ばし、締めまりがない声をあげる

そうして茜は直ぐに服を着替える

服は寝汗で濡れているが、茜は気にせずに服をベットのの上に投げ捨てる

そしていつもの服に着替える

すると着替えが終わると茜はストレッチを始める

バキバキと骨がきしむ

屈伸、しんきやくなどの基本的なストレッチを終わらせる  
すると頭から転送が始まる

ジワジワと

(眠い)

茜はそれだけを考えていた

そうして転送が終る

茜は周りを見る

そこには5人の人がいる

「眠たそうだね？茜ちゃん」

話し掛けて来たのは涼だった

「ええ」

茜はようやくエンジンが回って来た

周りにいた人は茜の姿を見て赤くなっている

「茜ちゃん、はいコレ」

「ヒヤ」

茜は頬に冷たい何かが感じる  
すぐに涼の方を見る

涼の手にはジューズ缶が二本あった

「何するんですか！」

「目覚めた」

茜は確かに目が覚めていた

「で改めて、はいコレ」

涼からジューズ缶をもらい飲み始める  
ちなみに味はオレンジ

そうして再度転送が始まる

茜達は体を真つ二つに消えていく

転送が完了する

茜は何故か涼に抱かれている

「涼さん離れて下さい」

「いや」

「でも、歩き辛いですし」

「ダメ」

涼は茜の言葉を一刀両断する

赤は覚った

（何を言っても離れてくれない）と

茜は諦め、頬は赤くしながらも歩き出す

すると道路の真ん中に一人の爺さんが立っている

茜達は直ぐ様に武器を持つ

すると爺さんがいきなり茜の腹に蹴りが飛び込んで来る

茜は体をバックさせて蹴りを交わす

爺さんの蹴りは近くにあった建物に当たり、壁は発砲スチロールの様に粉々になる

茜と涼は離れる

爺さんは立ち上がり再度、茜に蹴り飛ぶ

「茜ちゃん！」

茜は姿勢を低くして刀を構える

爺さんの蹴りが茜のギリギリまでくる

茜は低く姿勢を立たせるように刀を上には振り抜く

刀は唸りをあげながら、曲線を描き爺さんを真つ二つに切り裂く  
切り口から血が宙に吹き出される

だが次の瞬間、もう一人の爺さんが現れる

涼は直ぐに銃口を向ける

「茜ちゃんも」

涼は何もしてない茜を急かす

（殺す）

急に茜の目つきが怖くなり

茜は手で力いっぱい刀を握りしめながら構える

すると爺さんが持っていた杖を抜き、刀を出し茜に切りかかる

「遅い」

茜は体を反る様に交わす

爺さんの刀は茜の上を通貨する

「てい」

涼は爺さん目掛けて銃弾を撃ち放つ

銃声が鳴り響きながらも、爺さんは体をぬじらせて交わしながら茜を再度切ろうとする

茜は銃を左手に持ち爺さんに放つ

銃弾は爺さんをかすり爺さんの頬から血が流れる

「しつこいんだよ」

茜は爺さんの刀を銃で抑えて刀を降る

「雑魚の」

すると爺さんは自分の刀を滑らせ銃から抜けて茜の刀を抑える

茜は爺さん目掛けて直ぐに銃を撃ち出す

すると銃弾の刀が茜の頬を切る

銃弾はそのまま進み爺さんの頭を貫通し血が噴き出す

「ハアハア」

茜は肩で息をしながら涼の元に歩く

「茜ちゃん大丈夫」

茜の頬からは先程よりも血が多く出ている

「大丈夫ですよ涼さん」

茜の目つきが笑顔になる

すると涼が茜に抱き着く

「涼さん」

「何、茜ちゃん」

「痛いです」

すると涼が抑えてる茜の腕が悲鳴をあげる

「いたたたたた、涼さん！涼さん！痛いです！！」

「大丈夫だよ」

涼は可愛さ＋色気と言う

そうしているうちに転送が始まる

茜は転送が終わるまで悲鳴をあげていた

転送が終わり自由に動ける様になる

「で涼さん離して下さい」

茜はまだ涼に抱き付かれている

「一緒に寝よ」

茜は一瞬で赤くなり、舌を噛みまくりおかしい言葉を発する  
すると涼が茜を連れて寮に戻ろうとする

寮の廊下で明里に会う

「なにしてるの、涼さん」

明里は涼が茜に抱き付いているのに怒りながら言う

「今から一瞬に寝るからねえ」

涼の言葉と共に明里は茜を奪う

「私と一緒に寝よ？茜ちゃん」

明里は茜を見た時には、茜はすでに眠っていた  
すると二人が悪戯な笑顔を浮かべる

「ダメだな茜ちゃん、こんな所でねちゃ」

涼は獲物を見る目と言う

「そうだね、こんな茜ちゃんにはお仕置きが必要だよね」

明里の言葉と共に二人は茜を部屋に連れて行く

二人は茜をベットの真ん中に寝かせて抱き付きながら二人も眠る

次の日

「なんで二人がここにいるんですかー」

茜の声が朝の空と寮に響き渡る

僕に安息の地を！！

あの爺さんとの戦闘から2日が過ぎた  
今は学校で授業を受けている？

周りからはシャッター音が聞こえる  
何故、疑問系かと言うと1時間前に遡る

――1時間前――

「はい、それでは授業を始めるので席に着いて下さい」

明里さんの指示に従い全員着席する  
ちなみに今は2校事目です

「えー今日は急に授業変更があります」  
周りが少しざわめく

「ちなみにチームに分けて授業内容を変えるからね」  
周りのざわめきが激しくなるが明里さんはまだ想定内と言う感じの  
顔で離し続ける

「それじゃあチーム分けするからね」

明里さんはテキパキと分けていく  
すると不自然な振り分けになる

「何で！」

僕のチームには僕を除いて全員が女性だった

「明里さん、これはどう言う事ですか」

僕は怒りか怖さなのか解らないが声が震えている

「はいはい、一人の融通で全体は動かないからね」

明里さんはわがままを可愛くしかる姉見たいに言うが、まあスルー  
されている

「じゃあ授業内容を発表するわよ」

僕は諦めた



ここ最近なにを言ってもダメな気がしてきた

「Bチームは学校の写真撮影」

Bチームとは僕以外の男子がいるチームだ

「Aチームは」

僕は神経に聞く

「茜ちゃんの女性写真撮影だー」

女生徒の黄色悲鳴の中

僕は身の危険を感じ走り出す

すると僕は肩を抑えられる

恐る恐る僕は肩を見る

そこには笑顔を浮かべている涼さんがいた

「涼さん離して」

「イヤ」

僕は叫びながら走ろうとするが腹に痛みを感じる  
そのまま僕は意識を手放す

僕の目には屈折した光が見える

光は眩しく目に刺さり、僕は目を開ける

体を上げ僕は目をこする

すると凄惨な数のシャッター音が耳に入り込む

直ぐ様、僕は周りを見る

そこにはカメラを持った女生徒が沢山いた

僕が寝ていた所は扉が開いている棺桶だった

棺桶の中と周りには花が沢山ある

僕は足がスースーした、ため足を見る

何故かスカートがはかされている

上着も女物の服だった

僕が動くたびにシャッターが鳴り響く

「何なんですかコレ」

僕は顔を赤くしながら、何故か女性の様な仕草になりながら言う

「茜ちゃん立ってポーズ決めて」

明里さんが一人マイペースに言う

「恥ずかしいですよ」

僕は立ち上がる

するがスカートが上にあがり、僕は急いでスカートを抑える

何人かが鼻を抑え始める

急に涼さんが僕に抱き付いて来る

「私達とじゃイヤ」

涼さんは涙目で言う

「解りました、やりますよ」

すると涼さんは離れてポーズを要求して来る

最初は床に座り、右膝を上げて膝に抱き着きながら悪戯な笑顔を浮かべるだった

僕は言われたとつりにやってみる

すると無数のシャッターが切られる

「茜ちゃん次は」

そうして僕は午前中だけで50ぐらいポーズを取らされた

時刻は12:30分

一旦休憩を挟むそうだと

とゆいかまだ撮るのかよ

僕は疲れて休んでいた

すると涼さんと明里さんが話し掛けて来る

「一緒にお昼食べよ」

「私達、お弁当作って来たんだ」

二人は笑顔で言う

「はい」

僕は明里さんと涼さんが作って来てくれた弁当を食べる

という事はまた「アーン」が始まる

チャイムが鳴りAチームが全員集まる

「全員揃ったわね、じゃ始め」

そうしてまたポーズを要求される

今度はM字開脚をして色気のある笑顔だった

僕は難しく考えずにやる

するとシャッター音＋黄色い悲鳴が鳴り響く

今回はかなり長く寮に帰れたのはPM7:30だった

部屋にあるベットに倒れ込む様に寝る

「疲れた」

すると腹がなる

僕は夕食を食べる為に食堂に向かう

食堂はピーク時間をすこし過ぎていたがまだ人が大勢いる

僕は『カツ丼』の食券を買い、おばさんに渡す

すると5分ぐらいでカツ丼が来る

僕は適当な場所に座る

「いただきます」

そうしてカツ丼を食べ終え部屋に戻る

部屋には涼さんと明里さんがいた

「何してるんですか」

「一緒に遊ぼうと思って」

「マッサージをしてもらいに」

明里さん酷い

「解りました、マッサージをするのでどっちな寝て下さい」  
二人はジャンケンをする

「さいしょはグー ジャンケンポイ」

明里さんがチョキ、涼さんがパーを出した

明里さんは直ぐにベットに寝る

「じゃあ茜ちゃんよろしくお願いします」

「はい」

僕はそう言つと明里さんにマッサージをする  
最初は腰をやる

「あ、あっああ」

明里さんが変な声を出す

「変な声出さないで下さいよ」

僕はマッサージをやりながら言う

「しよんなこといったて」

僕はマッサージを肩に変える

明里さんさ肩が気持ちいらしく、僕はつよくやる

「むっムリー」

明里さんはよだれを出しながら気持ち良さそうに倒れている

「茜ちゃん早く」

涼が急かす様に言う

そうして明里さんが終り、涼さんになる

「優しくしてね」

涼さんは寝ながら言う

僕は先ず足からやる

「気持ちいい」

涼さんは気持ち良さそうになっている

続いて肩をやる

涼さんはさつきと同じ反応をする

そして腰をやる

「あっあ気持ちー」

涼さんも変な声を出す

僕は強くやる

「いっいくー」

涼さんもよだれを出しながらベットに寝る

僕は時間を見る

時刻はPM11:00だった

その途端、僕はベットに倒されて両腕に二人が抱き付いて来る

「一緒に寝よー」

すると一瞬で二人が寝る

僕は心の中で叫んだ

安息の地を！！

## 銃撃戦

昨日の女装事件から一日が経つ

茜も疲れていたせいか10分もしたら寝ていた

その為か茜は元気になっている

ちなみに時刻はPM7:12分

茜は食堂に来ていた

「腹減った」

食堂は美味しそうな匂いがプンプンしている

茜は先程まで刀の訓練をしていた為、匂いにも反応する

訓練をした為か茜の服装はワンサイズ大きいYシャツにショートパ  
ンツを着ている

茜は髪を真っ直ぐに伸ばしている

いつもはポニーテールにして可愛系だが今は黒く女王を象徴する様  
に長く綺麗なロングヘアーになっている

何故かと言うと、昨日の女装で失くしたらしい

そして茜は食券を買う為に例に並ぶ

すると茜を見た人が鼻血を吹き出す

それもそのはず茜のYシャツがショートパンツが隠している

その姿は寝ようとしている美少女のパジャマ姿になっている

茜は気にせずに食券を買う

『和風定食』を買う

すると直ぐに定食が来る

茜は適当な場所に座り食べる

定食を食べ終わるとウェポンショップに入る

ウェポンショップは火薬の匂いが茜の鼻に刺さる

茜は周りを見る

すると涼がいる

「ぶっー」

涼は茜を見た途端、血を吹き出し茜を隠す様に抱き着く

「茜ちゃん何やってるの」

涼は言葉では叱っていても声は明らかに獣になっている

「さっきまで訓練だったから」

「ちゃんとズボンを履きなさい」

すると茜はYシャツを上になげ様とする

周りからは悲鳴が聞こえる

茜は気にせずYシャツを上にあげる

Yシャツの下にはショートパンツがある

「ちゃんとズボンは履いてますよ」

涼はホッとしているが事実を知りたく無かった感じをしている

「そつえば茜ちゃん、何でショップに来たの？」

ふと思ひ出したかの様に聞いて来る

「新しい銃が欲しくて」

「そつ何だ」

涼が解った所で茜は銃を物色し始める

すると茜が一丁の銃を取る

それはフルオート式のハンドガンだった

総弾数は25発

「茜ちゃん流石にそれは反動が」

茜が選んだハンドガンは連射が出来るぶん反動がリボルバー並になっている

「大丈夫ですよ」

茜はハンドガンを買う

「思っんですけど銃って高いですよ、50000円って7万あつ

てよかつた」

「これが普通なのよ」

茜は愚痴りながらも財布をしまい、直ぐに銃を装備する

「じゃあ私はもう少し見てるから」

涼と別れて茜は寮の部屋に戻る

部屋に戻ると茜は先程買ったハンドガンに銃弾を込めていく

銃弾を入れる毎に鉄と鉄がこすれ合う音が鳴る

そうして茜は銃弾を込め終わると携帯を見始める

「はっ！何コレ」

茜はビックリして携帯をまじまじと見る

携帯には一つの画像がある

画像には黒い東京タワーがある

茜は軽く考え答えを出した

「めんどくさい」

もはや諦めていた

茜は目覚ましをPM10:00に合わせて寝る

茜の意識は糸を解くかの様に意識を手放していく

## 夢

夢とは自分が見た景色、物などを脳が処理をし始めて見られる物だがまれに明晰夢、白昼夢と呼ばれる夢がある

夢を夢と自覚し夢を操るなどの事を指示す

じゃあこの夢は何だ



少女が泣いている  
僕は自覚をしているのに操れない  
又、誰かを失うのか

すると茜は目を開ける

部屋には目覚まし時計の音が鳴り響いている  
茜は気にせずに膝を曲げ、右手で髪を抑える

「何なんだよ、あれは」

茜は疲れた声を出し時計の目覚ましをきる

「濡れてる」

茜の服にはかなりの寝汗が着いている

「シャワー入ろう」

茜はそう言う到着替えを用意してシャワーに入る  
シャワー室からは水が落ちる音が静かに聞こえる

茜は30分で出て来る

「気持ちよかった」

ゆったりとした感じで服を着る

茜の服装は闇をイメージしたであろう全てが漆黒だった  
黒いシャツの上に黒いマントを羽織っている

「マニアックだな」

茜は笑いながらも武装を始める

腰には銃を二丁装備しマントのポケットと腰には装填済みの弾倉が  
12個ある

刀も銃に当たらない様に腰に装備する

「準備OKかな」

茜は確認して大丈夫と判断して柔軟を始める

柔軟をしているうちに時刻はPM11:00になる

すると転送が始まる

頭からジワジワと消えていく

転送が終ると茜は閉じていた目を開ける

茜の目の前には涼と数人の人がいる

「茜ちゃん服変えたんだ」

「寝汗で濡れちゃったんで」

二人が話していると転送が始まる

全員、足からジワジワと消えていく

そうして転送が終る

茜が転送された場所は廃墟の街だった

「マジかよ」

すると茜は刀を出して体を捻じる様にして刀を降る

鉄と鉄が当たる音と銃声が精神な夜を壊す

茜は直ぐ刀をしまい銃を出して構える

「来る！！」

茜はそう発声するとマントを揺らしながら細かく蛇行して走り出す

銃声が鳴りながら銃弾が茜を追って来る

茜は銃弾を霧で隠れている所に放つ

すると銃弾が何かを貫通して、何かが降って来る

それはアメリカの自衛隊みたいな服装の死体だった

茜は死体などに見向きもしないで走り出す

すると無数の銃声と共に銃弾が茜に向かって飛んで来る

茜は無言で目を閉じる

（音を聞け、音だけを）

茜は頭の中で銃弾の場所を音だけでイメージする

茜は目を開け走り出す

左右を蛇行する様に動き回避する

銃弾が茜の横を通った時には茜は次の体制に入っている

姿勢を低くして銃を8発撃つ

銃声が8発分聞こえた瞬間に弾幕が消え死体が落ちて来る

茜は気にせずに再度走り出す

1kmぐらい進んだ所に二人の人がいる

「涼さん！！」

涼が1人の武装された男に掴まれていた

茜は銃を強く握りしめ男に向かって走り出す

男は茜に気づいたのか涼を投げ捨てる

「ぐはっ」

男は茜の方を向き持っている火炎放射器を発射する

茜は転がりながら炎を交わし銃弾を撃ち放つ

銃弾は曲線を描きながら男の両足を撃ち抜く

男は無言で火炎放射器を近づいて来た茜に向けて発射ボタンを押す

茜は近くにある壁に隠れて炎を交わす

男は発射を止めて爆発を投げる

「バカ」

茜は壁から飛び出す

すると男が茜に向かって火炎放射器を振りかざす

茜は銃で火炎放射器を抑える

「クズだな」

茜は逆の手に持っている銃で男の顔面を撃ち抜く

男は血を吹き出しながら倒れる

茜は返り血を浴びながら涼の所に向かう

「涼さん大丈夫ですか？」

「ええ」

茜の心配そうな声に元気に答える  
すると転送が始まる

二人は転送が終る

部屋には最初と同じく人数がいる  
そして解散する

茜は返り血を浴びたマントを揺らしながら部屋を出る

「茜ちゃん、さっきはありがとう」

部屋を出ると茜は涼にジュースを投げられる

茜はキャッチをする

「いいんですか？」

「うん」

茜は素直に開ける

味はちなみに『ドクターペパー』

茜はドクペを開けて飲む

「じゃあね」

涼と茜は別れる

茜は部屋に戻り服を脱ぎ捨てシャワー室に入り込む

茜は15分程度出て来てベットに倒れて眠りに着く  
深く安らかな眠りにつく

## 銃撃戦（後書き）

作中にドクターペッパーが出て来たのは  
作者が『シユタインズゲート』が好きなのと  
単純に飲みたいからです。  
また見てください。

## 身体測定（前書き）

祝アクセス数が10000人を超えました

## 身体測定

何故、何故 君は泣いているの？

僕は必死に彼女を追いかける

だけど届かない僕の声は

すると目の前から眩い光が僕達を襲う

僕は無力で彼女を守れなかった

僕がそう思った瞬間に世界が壊れ目を覚ます

部屋には目覚まし時計の音が響き渡っている

僕は体を起こし、膝を曲げる

「何なんだ彼女<sup>あいつ</sup>は」

僕は溜息を吐く様に言い、時計を止める

ベットから下りて体を伸ばす

「ふあああ」

締めりが無い声が漏れる

僕は気にせずにカーテンを開け、時刻を確認する

時計にはAM5:30分と記されている

「よっし、体を起こすか」

僕はベットから離れて柔軟を始める

これをやる事でちゃんと起きられるんですよ

そうして僕は屈伸やしんきやくと言った基本的な柔軟をやり終え再度時刻を確認する

AM6:00

「体も暖ったまっただし服着替えるか」

僕はパジャマから制服に着替える

着替えを終えて弁当を作り出す

唐揚げや卵焼きと言った定番のメニューを作り弁当に詰める

そして時刻がAM7:00になり、僕は朝食を食べる為に食堂に向かう

食堂に入ると僕の食欲をそそる匂いが充満している

食堂にはやはり多数の人がいる

僕は余り気にせずに食券を買いすぐに注文する

ちなみに買ったのは『日替わり定食』です

そして定食を受けとり椅子に座る

定食にはご飯、肉じゃが、豚汁、おひたしが乗っている

僕は両手を合わせる

「いただきます」

そして箸を持ち、まずは肉じゃがを食べる

口の中に肉とジャガイモの甘みと旨味、そして絶妙な加減な醤油の味が口いっぱい広がる

「美味しい」

僕は料理の味付けを考えながら美味しくいただく

そして定食を食べ終えたら

時刻はAM7:45分になっていた

僕は部屋に戻り、座禅を組み休憩をする

ちなみに8:00に鳴る様に時計をセットしました

座禅を組み、僕は全ての力を抜きながら周りの音、気配だけを感じる  
すると部屋で遊んでる人やまだ寝ている人などが手に取るように解る  
そうすると時計が鳴る

「はぁー」

僕は深く息を吐きながら立ち上がり教室に向かう



僕は教室の中に入る

教室には涼さん達がいる

「おはよ、茜ちゃん」

涼さんが可愛く話し掛けて来た

「おはようございます涼さん」

僕は笑顔で返す

すると周り赤くなり、鼻を抑えている者もいる

大丈夫かな皆

僕はその様な事を考えながら、涼さんと一緒に席に座り  
たわいもない話を続ける

すると扉が開く

「おはよー」

明里さんが入って来る

皆が席に着き、明里さんが再度喋り出す

「今日は授業が変わりました」

数人がざわつくが明里さんは直ぐ処理をして話を続ける

「今日やるのは身体測定よ」

すると割り当てを発表する

それによると僕は何故か女子と同じくにやる事になっている

「みんな解ったら行動開始」

明里さんは手を叩く

それと同時に席を立ち上がり、明里さんの元に向かう

「何で僕は女子と一緒になんですか！」

「いいからね」

僕は涼さんと明里さんに腕を捕まれる

そして更衣室に連れていかれる  
「たすけてー」

僕の声が静かに廊下に響き渡る

そうして僕は更衣室に連れて来られた

「さあ、茜ちゃん私が着替えさせてあげるからね」

「神功先生、何言ってるんですか私が着替えさせるんですよ」  
二人の息遣いが荒くなっていく

「二人とも怖いですよー」

すると二人が僕の制服に手をかける

「ちよっ、何遣ってるんですか」

僕は二人の手を制服から外そうとするが、二人の握力は強く  
そのまま倒される

「二人とも離してください」

「イヤ」

二人の声は見事にハモリ、

そして二人は僕を襲う

「キヤー」

僕の声はまたしても廊下に響き渡る  
着替え終るのに多分30分は掛かっただろう

そして僕は女装をさせられていた

白くふわりとしたミニスカートに黒いスパッツ

そして黒と白をあしらったベストを着せられていた

「なんですか！コレは！！」

僕はスカートの裾を抑えて軽く前に倒れながら泣目で言う  
「可愛い」

またしても二人の声がハモる

そうして僕は女装のまま身体測定を受ける事になった

僕達は保健室に移動する

「怖かった」

皆の目が獣だったよお

「茜ちゃんは可愛いからね」

「そうそう、じゃあ茜ちゃん体重計に乗ってね」

僕は明里さんの指示に従って体重計に乗る  
すると38kgと表示される

「これは」

「神は、神は性別を間違った」

二人は落ち込みながらもちゃんと記入していた  
次に身長を測る

147cmと表示される

もう諦めよう

「じゃあウエスト測るね」

僕は手を上げウエストを測る

「ちよつ、これ」

明里さんの言葉に涼さんも僕のウエストを見る  
僕のウエストはモデル並みにくびれている

「59cm」

また二人が落ち込む

そして身体測定が終わり普通の授業に戻った

昼食

僕は弁当を涼さん達と交換をした  
そして授業は終わり

また夜に向かう

## 再開

夜になり茜はグラウンドに来ていた  
グラウンドは茜以外はいなく刀を振り下ろし空中を切り裂く  
すると空気の振動音が茜の耳に入り込む

その様な事をしていて

太陽が沈み、ライトが照らされる

ライトは茜をクロスする様に照らしながらも茜の動きに合わせて動く  
「時間か」

グラウンド使用はPM6：50分までとなっている

茜は音を出しながら刀を振り下ろし、鞘にしまう

すると茜の腹の虫が鳴り響け

「腹へったな」

茜は食堂に向かい歩いていく

食堂に着くと美味しそうな匂いが茜を包み込む

茜はうどんの食券を買い、うどんを頼み、ふと周りを見る

見てみると席がほとんど満席になり掛けていた

（大丈夫かな？）

茜がそう思っていると

うどんが完成し茜はうどんを受け取り、茜は一つ空いていた椅子に  
座る

どうやら茜が座った席で満席らしく立ち食いを始める人が出始めた

茜は気にせず、うどんを食べ始める

口の中には醤油の味が口いっぱい広がる

「うん、美味しい」

そして茜はうどんを食べ終え  
部屋に戻る

茜は汗をかいた服をベットに投げ捨てるとシャワーに入る  
シャワー室からは水を打ち付ける音が鳴り響く

15分ぐらいで茜はシャワーを出る

茜はパンツを履こうとする

「茜ちゃん」

「ちょっと待ってください」

茜の言葉は届かずに扉が開き涼が入って来る

「キヤーー」

「あっ、ハアハア」

涼の息遣いが急に荒くなる

「茜ちゃん、そんな格好じゃ、かぜ引いちゃうよ」

「だから今着替え様と」

「じゃあ私が着替えさせてあげるね」

涼の息遣いが獣になる

「イヤー」

涼は茜を襲う様に着替えさられる

15分で茜は着替えさせられた

「何するんですか」

茜は涙目＋胸元、足、腰の肌露出で本人にはわからない攻撃をして  
いた

涼の鼻からは思わず甘い息がこぼれる

「涼さん」

「きゃっ」

涼は茜に見とれていた為周りが見れてなかった

「きゃっはこっちですよ」

「あはははは」

「もう出てってください」

涼は茜に従い出ていった

「疲れた」

茜は肌露出をしたままベットに横たわり眠りに着く

暗闇

暗闇の中に泣いていた少女が僕を見ている

「君は誰？」

少女には僕の声は届かない  
すると少女が口を開け話す

「もうすぐ会えるから」

「えっ」

そこで茜の夢はまたしても時計によって目を覚ます

「目覚まし辞めようかな」

茜はそう思いながら、この前と同じ黒い服を着る

髪を真っ直ぐに伸ばし武装をした後に柔軟をする

屈指をするたびに髪は茜を包み込む様に揺れる

その光景は10人いれば10とも振り向く様に美しさだった

「さあ、そろそろかな」

茜が喋ると転送が始まる

足からジワジワと消えていく

「涼さんこんばんわ」

茜は転送して最初に目をした涼にムツとした感じに言う

「茜ちゃんまだ怒ってるの？」

「いいえ」

涼の言葉に怖すぎる笑顔で返す

「そう言えば涼さん、今回は僕達だけなんですネ」

「そうね」

涼は早く茜の笑顔から逃げたくなっている  
すると再度転送が始まる

「じゃああっちでね」

涼の方が5秒程早く転送がされた

茜の転送が終ると茜は周りを眺める

そこはかつて茜が戦った事がある地下鉄だった

「何でまたここに」

「茜ちゃん」

涼が隣の車両から涼が来る

だが前の様に人はいなく茜と涼だけがその場にいた



「涼さんどう思いますか？」

「変？よね」

涼はすこし困惑しながら答える

「取りあわず全車両探しますよ」

そうして二人は前方の車両を探し始め様とする

すると前後の車両から吸血鬼星人の様な人が二人現れる

「やりますよ」

茜達は頷き吸血鬼星人の方を見る

すると吸血鬼星人は刀を出し茜達を襲う

茜は刀を上には振り上げ吸血鬼星人の刀を抑える

すると涼は体を反りながら交わし銃口を吸血鬼星人に向ける

「終わりよ」

だが吸血鬼星人は一瞬のスキを着き二人から逃げ出す

すると天上が割る音と共に一人の女性が現れる

それは茜が夢で見た少女であり、過去に茜を好いた吸血鬼星人だった

女性は長く美しい黒髪を靡かせながら、持っていた刀を振り抜き吸血鬼星人を切り裂く

吸血鬼星人が倒れると同時に女性は茜に抱き着く

「久しぶりだね」

透き通る様な綺麗な声で茜に喋る

「何でいるの？」

茜は困惑しながらも要件を述べる

「君に会いたかったから、ねえ名前教えて」

「神田 茜です、あなたは？」

「私の名前は咲<sup>さき</sup>よ」

「咲さん」

「咲お姉ちゃん」

咲が言い直しを求めてくる

「咲お姉ちゃん」

茜は恥じらいながら言う

いい終わるとボフと音をたてる

「可愛い」

咲は更に強く抱き締める

すると涼がいきなり茜と咲を離そうとする

「なんなんですか貴方」

「それはこっちの台詞よ、私と茜の愛に邪魔しないで」

咲は逆ギレの様に言い放つ

「そうだ、えーと咲お姉ちゃん」

茜はまだ恥ずかしそうに言う

「何、茜」

「どうしてここにいるの」

そうすると咲が説明を始める

「えーと、何かわかんないけど茜と夢で会えて気づいたら」

すると咲がふと思い出した様に茜の首筋に顔を近づける

「力覚醒させないとね」

咲が茜の首筋を噛む

茜に痛みはなく、そのまま意識を手放す

6時間後

「何で咲お姉ちゃんがいるの」

茜はパジャマに着替えさせられていて、その上、咲が茜を包み込む  
様に寝ていた

「何で？」

茜は最後まで理解ができなかった

転校生はお姉ちゃん 前編（前書き）

今回はかなり遅れました。  
ごめんなさい

編集をしたのでよかったですら見てください。

## 転校生はお姉ちゃん 前編

「であればどう言う事なの」

僕達は正座で明里さんの説教を受けていた

何故説教を受けていたのかと言うとだいたい8分ぐらい前の事だ

――――8分前――――

僕は理解に苦しんでいた

それは2点ある

まず1点は咲お姉ちゃんが僕のベットにいる

2点目は何故か僕はパジャマを着ていた

寝た時は多分、戦闘服を来ていたはずだし

僕が困惑していると扉が開き明里さんが入って来る

「なっとな何やってるのー」

明里さんの声が廊下と部屋いっばいに響き渡る

「明里さん五月蠅いですよ」

僕は寝起き+意味が解らない為少しだけムツとしていた

「あっごめんね」

明里さんは手を合わせ可愛いく言う

すると咲お姉ちゃんが起き上がる

「茜」

咲お姉ちゃんは寝起きの声で僕に抱きついて来る

僕はベットにまた倒れる

「咲お姉ちゃん離してー」

僕は手に力を入れるが全く咲お姉ちゃんは動かなかった

「そこに直りなさい」

明里さんの声が響き、

僕達は身の危険を感じた

すぐさま正座に移る

「であればどう言う事なの」

ジャスト8分

まあ、それはいいとして、明里さんは咲お姉ちゃんを指差しながら言う

「えーとなんて言うか、その〜」

僕は咲お姉ちゃんの方に目を泳がせる

咲お姉ちゃんが口を開けた

「学生だよ」

「何処の」

「ここ」

「嘘でしょ」

「違うよ」

明里さんの叫びに冷静に対応する咲お姉ちゃんがいた  
と言うか凄い

僕がそんな事を考えていると明里さんが決定打を求める

「じゃあ、生徒手帳を見せなさい」

生徒手帳とは僕なら携帯、他の人は普通に手帳らしい？

「解ったわよ」

咲お姉ちゃんが立ち上がり、僕の制服に近づき、制服に手をかける  
「咲お姉ちゃん何してるの？」

僕は咲お姉ちゃんの行動が理解出来なく聞いてしまう  
明里さんも同様に？を浮かべている

「ここにね」

咲お姉ちゃんが制服から僕の知らない手帳を取り出す

「はいコレ」

明里さんに手帳を渡す

すると明里さんが手帳を返し、直ぐに部屋を飛び出す

「なにがあつたの？」

僕はまたしても理解不能になる

「じゃあ茜、続きをしましょうか」

咲お姉ちゃんはベットを叩きながら言う

「なんのー!!」

「そんな事 女に言わせないで」

咲お姉ちゃんは頬を赤くする

「て言うか自分の部屋に戻れー」

「ここよ、私の部屋は」

「な訳あるか」

「な訳あるのよ」

僕はその言葉と共に咲お姉ちゃんが僕に乗る様にベットに倒される  
「咲お姉ちゃん退いて」

「スースー」

「はや」

時刻はAM2:00

充分に眠れる時間だ

僕は諦めて眠りに着く

時刻はAM6:30

4時間半、僕は寝ていた

何時の間にか咲お姉ちゃんは僕の上から移動していた  
だが更に大変な事になっている  
それは僕の右腕が咲お姉ちゃんの腕枕になっていた  
「咲お姉ちゃん退いて」

「イヤよ」

しかも咲お姉ちゃんは目を覚ましている

「もう腕が限界だよ」

実際 僕の右腕はマヒっている

ああ感覚が無い

「咲お姉ちゃんもうダメ」

僕は腕を振り上げる

「キャ」

だが次の瞬間 僕は

「キャーーーーー」

腕枕をしていた腕に痛みが走る

そうして僕はゆっくりと腕を直し、制服に着替えて食堂に向かう

「咲お姉ちゃんのバカ」



「ごめん ごめん」

腕を直している時に何回か突つかれた

「すごく痛かった」

「じゃあ私が舐めた上げる」

咲お姉ちゃんが僕の右腕の裾に手を掛ける

「許すからやめてー」

僕は右腕を咲お姉ちゃんからふり離すと体を隠す様にする

「可愛い」

咲お姉ちゃんは僕に抱き着く

「もうどうでもいい」

僕は咲お姉ちゃんを引きずりながら食堂に入る

食堂にはいつも通り沢山のひとと美味しそうな匂いが充満している

「人多いねー」

咲お姉ちゃんは珍しい物を見る様に言う

「全寮制だしね」

そうして僕達は食券を買う

僕は日替わり定食

咲お姉ちゃんも同じのを選んだ

そうして朝食を食べ終える

「結構な時間だね」

「そうね」

時刻はAM7:55分

咲お姉ちゃんは転校生として僕のクラスに入って来るらしい  
そうして僕は教室、咲お姉ちゃんは職員室に向かう

教室に入る

「茜ちゃん」

涼さんが抱き着いて来る

僕はバランスを崩し倒れそうになるが何とか止める

「危ないですよ涼さん」

「あつごめんね茜ちゃん」

涼さんは一旦離れて謝るとまた抱き着いて来る

「昨日の女の人だねなの」

「お姉ちゃんかな？」

僕は悩みながらあいまいな感じに返す

「嘘、姉ならあんな事言わないもん」

「そう言われても」

すると明里さんが入って来る

「天草さん座りなさい」

「神功先生！！」

涼さんは驚きながら喋り出す

「昨日茜ちゃんに」

「その事だったら知ってるわ」

「えっ、どう言う事ですか」

「そうだ茜ちゃんおはよ」

「おはようございます明里さん」

そうして僕は涼さんを引きずりながら席に座る

すると明里さんがホームルームホームルームを始める

「今日から転校生が来ます」

明里さんの言葉に周りが動揺するが明里さんは気にせずに進める

「じゃあ入って来て」

すると扉が開き、長いロングヘアの黒髪を揺らしながら咲お姉ちゃんが入って来る

「じゃあ自己紹介して」

明里さんの言葉と共に自己紹介を始める

「咲です。ちなみに茜は私の物なのでちょっかいは出さないで下さいね」

その言葉が出た瞬間にざわめきが激しくなる

ざわめきの中に二人の女性から黒いオーラが出ていた

転校生はお姉ちゃん 後編（前書き）

今回は文化の日を使ったおかげでかなり長くできました。

転校生はお姉ちゃん 後編

「咲です。ちなみに茜は私の物なのでちょっかいは出さないで下さいね」

その言葉が出た瞬間にざわめきが激しくなる  
ざわめきの中に二人の女性から黒いオーラが出ていた

すると咲お姉ちゃんが僕にウインクをして来る

ウインクと同時に僕に殺気と黒いオーラが痛いくらいに向けられる  
「ヒヤッ！」

僕は殺気が強すぎる余り、変な声が出る  
怖すぎる、星人なんか目じゃないよー

「ふふ、茜はなんて声を出してるのかしら」  
僕は声が聞こえた方向を見る

そこにはさっきまで自己紹介をしていた咲お姉ちゃんがいた  
「なんでいるの？」

「そんな事よりあんな声出したら、私が襲っちゃんじゃない」  
その言葉と共に咲お姉ちゃんが抱きついて来る  
しかも僕の首をペロペロと舐め始める

「だー」

明里さんと涼さんが僕に向かって走って来る

「あんた！なにやってるのよ。」

「ここは学校なのよ！」

「そうよ！ここは学校なのよ、一教師として見過ごせないわー！」  
二人の正論に咲お姉ちゃんは質問で返す

「私は茜に話掛けるの！それに学校とか関係ないんです。それに

「あなた達は茜のなんなんですか！」

二人は悩みながら一つの答えを出す

「彼女よ」

二人の言葉に咲お姉ちゃんは呆れる

「はあー、なに行ってるんですか？貴方はまだ解りますけど、貴方は先生じゃないですか！あり得ません！！」

咲お姉ちゃんは明里さんは先生だからと否定する

「くっでも」

「違いよ咲お姉ちゃん」

僕は明里さんが喋ってる途中に割込む

「えっでも茜」

「みんな大事な人だよ。明里さんも涼さんも、もちろん咲お姉ちゃんも」

「ありがとう」

三人の声がハモリ、泣きながら一斉に抱きついて来る

三人を泣き止ませて、授業をH R再開する

ホームルーム

「えーとじゃあ咲<sup>せんじょうせい</sup>さんは」

「もちろん茜の席か、隣ですよね」

咲お姉ちゃん、僕の席は無理だし、隣の席も、もう人がいるから無理だよ

「無理だからあそこね」

明里さんは窓側の二番目に後ろの席を刺す

「なんで私があんな教室で一番寝やすい場所なのよ！」

そう明里さんが刺した席は冬でもちゃんと太陽が当たりポカポカとなって一番寝やすい席なのだ

て言うかほとんどの人が彼処が良いのに。もったいないな  
「決定よ」

咲お姉ちゃんはブツブツ言いながらも席に座る

「じゃあ授業やるわよー」

そうして全員が授業の準備を始める

ちなみに授業は体育だ

教室から人が流れる様に出ていく

僕はいつも通りあの教室に入り鍵を掛け替え始める

戦闘用の黒い服に着替え、ポニーテールにしていた髪をストレートにする

そうして刀と銃を装備してグランドに向かって歩きだす

グランドに着くと、先ず二人の女性が目に入る

それは涼さんと咲お姉ちゃんだった

涼さんは何時も戦闘で着ている、戦闘用制服を着ている

戦闘用制服とは防弾制服とは違い軽量化されており、なおかつ防弾制服と同じ強度を持っている

涼さんは銃とナイフを装備している

咲お姉ちゃんは黒い修道院のローブを羽織り、刀を装備している

「茜」「ちゃん」

二人はハモリながら近づいて来る

僕も同様に二人に近づく

「二人共早いですね」

僕はいつも柔軟をやる為に早めに着ている

その為、ほとんどの人がいない

「早く茜に会いたかったら」

その言葉と共に咲お姉ちゃんが抱きついて来る

「離して咲お姉ちゃん」

「どうして？ 恥ずかしいの？ それとも」

何かもうどうでもいいよお

ここ最近、いじられキャラが定着してきたよ  
僕は心の中でため息を吐く様に思う

「茜ちゃんは私が」

涼さんも張り合う様に抱きついて来る

「あんたは離しなさいよ！ 茜は私の物なのよ」

「あなたが離しなさいよ！」

そうして口論をしていると人が沢山来て体育が始まる

僕と咲お姉ちゃんは最初に道場に入る

ちなみに道場の他にも訓練所がいくつかありますよ

道場内は一階が剣道用のフロア

二階はフェイシング用フロア

三階は真剣用フロアが設備されてる

僕達は真剣用フロアに向かう

「茜、勝負しない」

ここは二人で来た場合はその二人で勝負する事になる  
「いいよ」

「じゃあ罰ゲームありね」

「咲お姉ちゃん何させるつもり」



「勝った人が負けた人になんでも言う事をやらせられるで」

「いいでしょう」

そうして僕はフィールドに上がる

フィールドとは周りからは一切謝絶されており、周りには何も無い空間である

僕は一定の距離を取り刀を構える

咲お姉ちゃんは刀をただ持っただけの様にも見える

僕は体を低くして、刀を下に向ける

するとスタートの合図が鳴り響く

僕達は一斉に互いに向かって飛び出す

僕は低くした体を起こす様に、体を上げながら刀を上振り抜く

咲お姉ちゃんは体を回して刀に威力を付けて、最小限の力で僕の刀を抑える

「くっ」

僕が咲お姉ちゃんから距離を取ろうとした時、身体中に神経を伝った様に何かが走る

それは痛みとは違う何かだった

僕は距離を取りながら再度 刀を構える

今度は刀を持った手を首の近くに持って来て、刃を上から斜めに下ろす様に構える

すると咲お姉ちゃんが刀を流す様にしながら僕に向かって走り出して来る

僕も構えた刀を振り抜きながら走り出す  
すると身体中に何かが走ると同時に身体能力が以上なまでに上がっ  
ていた

「茜、それが私達と同じ力よ」

「吸血鬼星人と同じ力」

咲お姉ちゃんは直ぐに僕に向かう刀を振り上げる  
すると身体中の痛みが目に集中される

「くっ」

僕は目を抑えながら咲お姉ちゃんの刀をゆっくりと横に動き交わし  
ながら次の体制に動く  
すると目の痛みは段々と消えていく

僕は直ぐに右足で円を描きながら後ろに引き刀を振り上げる  
すると咲お姉ちゃんは本気を出したのか僕の何十倍のスピードで刀  
を振り抜き、刀ごと僕を吹き飛ばす

「ぐはっ」

僕は地面に足を付けて、足の力を集中させて前に飛び出す

「え、えーーーー」

僕は吸血鬼星人の力が働いたのか？ガンツスーツを着用した時の様  
に空中を移動できた

「理解して分析して力にすればいい」

そう、単にバカ強い力は上手く使えばかなりいい戦力だが、活用出  
来なかったら威力を使い過ぎて殺られてしまう  
だからまずは理解と分析が必要される

僕はそのまま空中を飛ぶ威力を刀に入れる

すると刀には先ほどの咲お姉ちゃんと同じくらいの力になる

「茜は凄いなあ、じゃあ私も本気だよ」

「えっ」

その瞬間に咲お姉ちゃんは消えて、僕の意識が消えていく

次に目を覚ました時

最初に目に入ってきたのは罰ゲームの内容を事細かく書いた紙を持つちながら満面の笑顔で僕を見ている咲お姉ちゃんだった

多分、僕の部屋かな？

「咲お姉ちゃん」

僕は寝ている体を起こしながら、小さな声で言う

「可愛い」

咲お姉ちゃんは何が可愛かったのか僕はベッドに倒される

その光景は眠っていて動けない本気を、咲お姉ちゃんが襲っているだろうか

「咲お姉ちゃん退いて」

咲お姉ちゃんは素直に退いてくれた

「じゃあはいコレ」

咲お姉ちゃんは笑顔でさっき見えた罰ゲームの内容を書いたであろう紙を渡す

僕は軽く見ようとするが無理であった

紙には事細かく書いてある、と言うか一枚の紙に1万文字は書いてあるだろう

咲お姉ちゃん流石に1時間ぐらいかかるよ

「罰ゲームは明日やるからね」

咲お姉ちゃんはそう言うと言つと扉の方に歩いて行く  
すると扉の前で止まり、僕の方を見る

「茜」

「なに？咲お姉ちゃん？」

「吸血鬼星人の力は使い方を間違つたら危ないから気を付けてね」

咲お姉ちゃんは真剣な表情で言い部屋を出る

だけと出る時は笑顔である事を言う

「罰ゲーム忘れないでね」

そうして咲お姉ちゃんは部屋から出て行く

「はあ」

僕はため息を吐きながら罰ゲームの内容が書かれた紙を見る

『茜の一日、咲お姉ちゃんのメイドになろう』

開始は明日AM6:00～翌日AM6:00まで

「なにコレ」

僕は頭が真っ白になりながらも紙を見る

その内容はメイドとして絶海咲お姉ちゃんの命令を聞くと言つ物だ  
つた

て言うかどんだけ細かく契約書なんだよ！

僕はそう思いながらベッドから立ち上がり紙の内容をちゃんと見始める

そうしてゐる段々と夜になっていく。

## 吸血鬼の力（前書き）

サブタイトルには余り意味はないです。

## 吸血鬼の力

茜は罰ゲームの内容を全て把握するのに1時間ぐらいが掛かった

「疲れたー」

肩を伸ばしながら茜はだらしない声で言う

茜は時刻を確認する為に携帯を出して画面を開き、右斜め上を見る

19:11

と表示されている

「夕食、食べないとな」

茜は疲れた体に力を入れ、立ち上がり食堂に向かって歩きだす

食堂に向かう途中で明里に会う

「茜ちゃん大丈夫だった？」

「大丈夫ですよ」

明里の心配そうな声に茜は笑顔で返す

すると明里はホッとしたのか軽く肩を下ろして再度食堂に向かって歩きだす

「茜ちゃん？」

「何ですか明里さん」

「何で咲さくらさんの事、お姉ちゃんって呼んでるの？」

「何でって、お姉ちゃんって呼んでって頼まれたからですよ」

「ふーん」

（じゃあ私も）

明里は少し考えると口を開ける

「じゃあ私も明里お姉ちゃんって呼んで」

「はい解りました」

明里の不安そうな言葉に茜はあつさりと返す

「じゃあ敬語も二人だけの時はなしね」

「はい」

「今はプライベートだからはいじゃなくて」

「うん解ったよ、明里お姉ちゃん」

茜は可愛いすぎる弟＋天使の笑顔で明里の心を撃ち抜く  
（可愛いー）

明里は頬を赤くしながら、可愛い物を見る目で茜を見る

そうして茜達は食堂に着く

食堂はいつも通り美味しそうな匂いと無数の生徒が漂う

「何時もながら混んでるね」

「そうねー」

二人は不満を抱きながら、食券を買う為に大量の人が並んだ列に並ぶ

列は茜達を入れて100人近くが並んでいるだろう

「そうだ茜ちゃん」



「なに？明里お姉ちゃん？」

（ああ、やっぱりお姉ちゃんはいい、ってそうじゃなかった」

「茜ちゃんって勉強どうしてるの？」

「一応、教科書をちゃんと覚えてるから」

「それって大変じゃない」

「大丈夫だよ」

茜は明里の心配そうな声に笑顔で返す  
すると明里は頬を赤くしながら話を続ける

10分が経ち、やっと茜達は食券を買える様になる

「なにするの明里お姉ちゃん？」

明里はお姉ちゃんと呼ばれる度にキョンキョンしている

「そうねー、私はオムライスかな」

明里はそう言いながら『オムライス』の食券を買う

「茜ちゃんは何にするの？」

「僕はコレ」

茜は『ラーメン』の食券を買い交換を起こなう

5分もすると頼んだ物が来る

茜達はプレートに乗せられた料理を貰い、席に座ろうとするが二人で座れる席は無く、二人は離れて座る

茜は大人しく食べるが、ちよくちよく明里が茜を見て何かを求める

目をする

そうして二人は食べ終わると茜の部屋に行く

部屋に着くと茜はある事を言う

「明里お姉ちゃん」

「何？茜ちゃん？」

「そう言えば僕、仮眠を取らなくちゃいけないんだけど」  
茜は申し訳なさそうに言う

「じゃあ私も一緒に寝る」

「えっでも」

「寝るの」

茜は明里の押しに負け、素直に一緒に寝ようとする

「じゃあ何時に時計掛けるの？」

「10時ですよ」

すると茜は時計を取り、目覚ましをPM10:00に掛ける

そうして二人はベッドに入り寝る

「茜ちゃん」

「何、明里お姉ちゃん」

「抱きついて」

「えっ！」

茜はその言葉と共に、2秒程動作を停止する

「ねえ抱きついて」

「えーと何で」

「何となく」

「拒否権は」

「ないよ」

茜は赤くなりながら喋る

「じゃあ後ろ向いて」

「うん」

明里は茜に背を向ける

「うつつ」

茜はゆつくりと腕を動かして明里を抱き締める

（キャッ、抱き締めて貰ったー）

「お姉ちゃん寝るね」

「うんお休みなさい、茜ちゃん」

茜は疲れた体から意識を離し眠りに着く

「可愛い」

茜は直ぐに寝た為、明里は直ぐに茜の方を向き、たっぷりと茜の寝顔を楽しんだ

茜が寝てから2時間17分が経とうとした頃、目指しが部屋に鳴り響く

「茜ちゃん起きて」

明里は茜の体を軽くたたきながら言う

明里はずっと起きて茜の顔を楽しんでいた

「んんん」

茜はおかしな声を出しながら、明里の首に手を回し、明里の顔に顔を近づける

明里は一瞬で顔を赤くしながら変な声を上げる  
(なんなの、何でこんなにも)

すると茜は腕を首から外し、ベッドに落ちながら目を開け、目を擦る

「明里お姉ちゃん、おはよ」

その行動を見て、明里はキュンキュンしていた

「うん、おはよ茜ちゃん」

すると明里は茜の見る

茜の服は寝汗に寄りTシャツやパジャマのズボンは透け、体のラインが浮かび上がる

(可愛いと言うかエロいよ茜ちゃん)

明里は鼻に手を当てながらそんな事を思う

「明里お姉ちゃん」

「あつ、何」

「寝汗かいたしシャワー入って来るね」

そうして茜は着替えを持ってシャワー室に入る

茜がシャワー室に入るのを見ると明里は茜が寝ていたベッドの所を見る

「いいよね」

そう言っていると明里は茜が寝ていた所に倒れる

（キャッ、やちゃった、これが茜ちゃんの匂い）

明里はベッドの匂いを嗅ぎながらそんな事を思う

するとシャワー室から戦闘用の黒い服を着た茜が出て来る

ちなみに明里はベッドの匂いを嗅ぐのに25分が掛かった

「明里お姉ちゃん何やってるの？」

「あわわわわわ、そ、その、えーと」

明里は急いでベッドから顔を上げ、慌てながら言う

「まあいいけど、じゃあ今から準備始めるから」

「あつ、解ったじゃあねー」

明里は逃げる様に部屋を出ていく

「武器の準備するか」

茜は全ての武器を武装する

そうして茜は武装が終わると何時もの様に柔軟をはじめ髪が揺れながらも茜はやる

そうして時刻がPM11:00になろうとしている

すると転送が始まる

右手の指先からジワジワと

「始まりか」

そうして転送が終わる

部屋には涼と咲、それに茜は知らない人が5人いる

「咲お姉ちゃん、涼さんこんばんは」

「こんばんは茜」「ちゃん」

茜は二人の方に歩き出す

「茜」

咲は急に茜に向かって抱き着く

「ちよつ、咲お姉ちゃん何するの」

茜は咲から放れる為に暴れるが、咲の力は強く全く放れない  
すると涼も茜に抱き着く

「ちよつと茜から放れなさいよ」

「放れるのはあなたでしょ」

「二人共放れてよー」

茜の声は虚しく、二人の口論に掻き消される

そうしてると再度転送が始まる

先程と同じ場所から

転送が終わわり、茜の目は鋭く、獲物を殺す目で周りを見る

そこは竹やぶだった

風が吹く度に竹が揺れ音になり、周りの音が余り聞こえなくなる

すると銃声が竹やぶに駆け抜ける

「涼さんかな？」

茜は銃声がした方向に走る

一方、涼と咲は同じ場所に転送された

涼は銃弾を空に撃ちながら歩いている

「茜何処だろ」

「茜ちゃん大丈夫かな」

二人が茜を探しながら歩いていると二人の前に6人の男が現れる

男達は全員同じような黒い服を履き、顔には眼だけが出るようになっている布を付けている

その姿は忍者と呼ぶべき姿だった

すると男達が刀を出して二人はに向かって降り抜く

咲は直ぐに刀を出して防ぎながら蹴りを入れる

涼は銃を出して顔面を撃ち抜く

二人は呼吸を乱さずに忍者を圧倒する

（銃声が変わった）

茜はさつきよりも本気で走る

すると二人が見つかる

「二人共、大丈夫」

茜は刀を抜き構える

「大丈夫だよ」

「茜ちゃんは」

「僕は大丈夫」

すると忍者達は本気を出したのか二人を襲った時よりも速く刀を振り抜く

（覚醒させる吸血鬼の力を）

すると茜以外のその場に全員が茜を見失う

見失うと言うよりも吸血鬼星人の力を使い一瞬で忍者を切り殺すその証拠に茜の刀には血が付き、茜の顔には血が付いている

すると地面が割れる音と共に一人の男が現れる

さっきの忍者とは違い顔は隠さず、刀だけを持っている

「死ねやー」

男は茜に向かって降り抜く

男の刀はさっきいた忍者とは桁違いに早く鋭い

「死ぬのはお前だよ」

茜は笑ながらそう言い、刀を忍者の刀に向かって降る

普通なら鉄がぶつかる音がするはずだが、音は鳴らずに忍者から血が吹き出る音だけが響き渡る

（僕は死なない、大切な人達を守り抜くために）

すると二人が抱き付く

「ちよっ」

茜はバランスを崩して倒れる

「茜、怪我は」



「ないけど」

「じゃあ頭打ったとかは」

「ないけど、どうしたの二人共」

「えっと茜「ちゃん」が急に怖くなったから」

「大丈夫だよ、僕はただ吸血鬼星人の力を試しただけだし」  
二人は安心したのか疲れた様な顔をする

すると転送が始まる

そうして転送が終わり解散する

茜は部屋に着くと目覚ましをAM5:00に設定する

「明日は大変かな」

するとノックが聞こえる

茜が扉を開けるとそこには咲がいた

「どうしたの？咲お姉ちゃん？」

「明日の罰ゲームのコレ」

茜は咲からメイド服を貰う

「じゃあ、おやすみ茜」

そうして咲は帰る

「これか」

茜はメイド服を壁に掛けるとベッドに倒れ込み、直ぐに眠りに着く

## 吸血鬼の力（後書き）

気づいたら3600文字も書いていました。  
もう少し『空の境界』とかも読んでクオリティを上げて行きます。

君が主で僕がメイド！？

朝、僕は目覚ましの音により目覚ます

耳と部屋には目覚ましの耳が鳴り響き、僕はゆっくりと体を起こしながら5：05と表示された目覚ましを切る

「んんん」

僕は両腕を上げながら、締めまりがない声が出る

「5時か」

僕は時刻を確認すると服を持ってシャワー室に入る

脱衣場にはカゴが2個置いてある

僕は持っている服をカゴに入れ、服を脱ぎ捨てもう一個のカゴに入れる

服を脱ぎ終わるとシャワーを浴びる

僕の耳には水が打ち付けられる音が響く

そうして15分くらいでシャワーから上がり、壁に掛けられたメイド服を見て溜め息を吐く

「はぁー、コレを着ないといけないのかー」

僕はそう言いながらもメイド服に手を掛ける

メイド服をベッドの上に置き、服を脱ぎ始める

先ずは上着からそしてズボンを

そうして下着だけになるとメイド服を着る

メイド服は基本的な黒のミニスカートタイプの上に白いエプロンを着る

「服は可愛いけど」

僕は恥ずかしくなりながらも、髪をストレートにすると二つのカチューシャを取る

一つはメイドなら絶対付ける、白いカチューシャ  
先ずは一つ目のカチューシャを付ける

もう一つのカチューシャは猫耳のカチューシャだった

「なんかマニアックだよー」

僕は頬を赤きしながら、猫耳を付ける

そして時計を見て、時間を確認する

時刻は5:55分

なんでこんなに時間が経ってるかと言うとメイド服の着方が解らなかったから

「間に合うかな？」

僕は罰ゲームの内容が書かれた紙と携帯をエプロンのポケットに入れて、廊下に出ると急いで咲お姉ちゃんの部屋に向かう

廊下はまだ朝の為、人はいなく静かだった

その為か簡単に咲お姉ちゃんの部屋の前まで着いた

僕は携帯と紙を出して、時刻と最初の事を確認する

携帯には5:58と表示されている

携帯を出しながら紙を見る

紙の三行目に朝の事が書いてある

『朝は最初に私を起こす事、その後の事は部屋に着いたら私が教えます』

と書かれている

そんな事をしていると1分が経ち5：59分になる

僕は紙をエプロンにしまうと携帯で秒数を見る

(9、8、7、6)

僕は携帯を見ながらカウントダウンをする

(5、4、3、2、1)

そして部屋の扉を開ける

(0)

咲お姉ちゃんの部屋は僕と同じ個室で目に入ってくるのは僕と同じ間取りだ

だけど流石女性なのか服をしまうタンスが沢山ある

そしてある一つの部屋に咲お姉ちゃんが寝ていた

ながい黒髪は波を打つ様に綺麗にベッドにある

僕は歩きながら咲お姉ちゃんに近づき、ライトのスイッチを入れる  
ライトからは部屋の恥まで照らす光が出る

ではスタートだよ

「咲お嬢様、朝ですよ」

へんじがない。ただのしかばねのようだ。

そんな事はいいとして口調はメイドらしくしました  
ではもう一度

「咲お嬢様、朝ですよ」

へんじがない。ただのしかばねのようだ。

ああ、これでは永遠ループになってしまう

僕は咲お嬢様の肩を掴みながら揺らす

「咲お嬢様、朝ですよ」

すると咲お嬢様は眠たそうな声を出す

「んんん」

そんな声を出したと思いきや、直ぐに布団に隠れてしまう

眩しかったのでしょうか？

しょうがないですね

僕は咲お嬢様が隠れた布団を取り、咲お嬢様の顔に顔を近づける

「咲お嬢様、朝ですよ」

すると咲お嬢様はゆっくりと目を開けて僕を見る

「おはようございます。咲お嬢様」

僕は笑顔で挨拶をする

「えっ、キヤーー」

咲お嬢様は僕から距離を取る様にベッドから体を起こす

「どうしました？咲お嬢様」

「なんで茜がいるの！」

「なんでと言われましても『罰ゲーム』ですから」

「罰ゲームね」

咲お嬢様は思いだした様に繰り返す

「罰ゲーム、罰ゲームね、じゃあ」

すると咲お嬢様の目が輝く

「じゃあ着替えさして」

「えっ」

僕は咲お嬢様の言葉により固まる

「メイドなんだから出来るわよね」

咲お嬢様はイタズラな笑顔を浮かべる

「はい」

「じゃあそのタンスから服出して」

僕は咲お嬢様が指差したタンスから1セットになっている服を取り出す

「じゃあそこに置いて、脱がせて」

僕は取り出した服をベッドの上に置き、咲お嬢様の服を正面から脱がせる

恥ずかしくて僕は目を反らす

「ダメよ目を反らしちゃ」

「はい」

僕は何とか咲お嬢様が着替えを終わらせられた

「じゃあ、茜」

「はい」

「朝食を作って」

「解りました。咲お嬢様」

僕は咲お嬢様の部屋から出て、キッチンに向かい  
すると後ろから声が聞こえる

「材料は冷蔵庫にあるの使っているいから」

「解りました」

僕はキッチンの隣に冷蔵庫の中を見る

中には卵、豚肉、野菜、牛乳、パンと言った材料が揃っている

僕は卵と牛乳、野菜を取り出してキッチンに立つ

キッチンはある程度片付いており使いやすそうに見える

僕はボールを取り出し、卵と牛乳を入れて掻き混ぜる

それと同時に皿に盛った野菜にラップを掛け、電子レンジでチンをする

食パンをトースターにセットして、フライパンに油をひく

そうして掻き混ぜ終わった卵と牛乳を油をひいたフライパンに注ぎ込みゆっくりと回す

そうして2分が経ち、朝食ができる

僕が作ったのはオムレット、トースト、サラダだ

全てを皿に色どりよく並べて咲お嬢様を呼ぶ

「咲お嬢様、朝食が出来ました」

すると咲お嬢様が部屋から出て来てリビングにあるイスに座る

「コレ！茜が作ったの？」

「はい、そうですよ咲お嬢様」

咲お嬢様はビックリしながらもオムレットを食べる

「柔らかくて美味しい」



「ありがとうございます」

そうして咲お嬢様は朝食を食べ終わるとマッサージをたのまれる  
「解りました。咲お嬢様」

咲お嬢様はベッドの上につつ伏せて横になる

「じゃあお願い、茜」

「はい」

僕はマッサージを始める

最初は腰の辺りをやる

「気持ちいいー」

咲お嬢様は腕と足を伸ばしながら気持ち良さそうにする

次は足、その次に腕をやる

どちらも気持ちよさそうになる

「咲お嬢様、次は肩をやります」

「うん」

僕は咲お嬢様の肩のマッサージをする

「あつ、ああ」

咲お嬢様は肩がこっていたらしく気持ちよくなっていた

そうしてマッサージが終わると咲お嬢様がある事を言い出す

「今から茜に色んな服を着てポーズを取ってもらいます。そして私  
をが言った台詞を言って貰うからね」

「はい」

僕は嫌だが罰ゲームなのでやる

「じゃあ最初は両手を首の知覚で丸めて『にゃー』って言って」

僕は恥ずかしくなりながらも、咲お嬢様の言ったポーズになる

「にゃー」

「ぷっは」

咲お嬢様の鼻から変な声が出ると同時にシャッター音が聞こえる

「咲お嬢様、今のは」

「いいから、いいから」

すると咲お嬢様は台詞だけを要求してくる

僕はせの台詞を聴いて赤くなりながら言う

「咲お嬢様、大好きです、結婚して下さい」

咲お嬢様はまた鼻から変な声を出しながら、今度はボイスレコーダーで僕の声だけを録音する

「じゃあ次は」

そうして僕はチャイナ服、レーススクリーン、女子の制服、体操着などを着た

「さーて撮影会も終わったけどもう8時ね」

そう撮影が終わったのは20:00になっている

咲お嬢様いわく今日はリアルはないらしい？

「茜」

「何ですか」

「服を脱ぎなさい」

「何言ってるんですか。咲お嬢様！」

「主である私がシャワーに入るんだから。それに今日はメイド何だからね」

「うう、卑怯です。咲お嬢様」

そうして僕は咲お嬢様に服を脱がされてシャワーに入った

シャワーから上がると僕はクタクタになった

「何時もより早いけど寝ましようか」

「解りました。咲お嬢様」

咲お嬢様はベッドに入る

すると次の瞬間僕に衝撃が走る

「じゃあ一緒に寝ましようか」

「咲お嬢様、それに拒否権は」

「ないわよ」

僕はメイド服のままベッドに入る

「じゃあ茜、最後の命令です」

「はい、咲お嬢様」

「私を抱き締めながら寝なさい」

僕は完全にデジャブを感じながらゆっくりと咲お嬢様に手を掛ける

すると咲お嬢様が僕の方を見る

僕の腕は止まる

「早く」

僕は顔を赤くしながらまたゆっくりと腕を咲お嬢様に掛ける  
そして軽く抱き締める

「もっと強く」

「でも」

「強くしないと明日も罰ゲームして貰おうかな？」

咲お嬢様はイタズラな笑顔で僕に言う

そうして僕はゆっくりと腕に力を入れ抱き締める

僕は一瞬で赤くなり気絶をする様に眠りにつく

次の日

僕が最初に目にしたのは咲お嬢様だった

君が主で僕がメイド！？（後書き）

次の話は咲目線の話にします。

## 茜がメイドで私が主（前書き）

まさか1日で2章投稿できるとは思いませんでした。

## 茜がメイドで私が主

私はさつき茜にメイド服を渡して来た

「もう寝よ」

私はパジャマを着てベッドに入る

「茜に明日なにさせようかな？」

すると頭の中に沢山やらせたい事が浮かぶ

「女装した茜にアーンしてもいいし、あつでもあれもいいしな」

そうして私は沢山考えた結果、明日の気分で決める事にした

「そうだ、今何時だろ」

私は結構な時間考えていた為、時計を見る

そこには2：30分と表示されている

あつ

「あーーーーー」

私は思っていた事が口に出た

「どうしよ、しょうがない寝るか」

私はベッドに入る

だけど寝るのに1時間ぐらいが掛かった

夢

「咲お嬢様、朝ですよ」

そんな茜の声が耳に響く

「咲お嬢様、朝ですよ」

また同じく台詞

するとまたしの肩が揺らされる

「んんー」

私はそんな声を出したと思いきや、直ぐに布団に隠れる様な動作を取る

すると布団は取られる

「咲お嬢様、朝ですよ」

私はもう目を開けようと思ひ、ゆっくりと目を開ける

すると目の前に不思議な光景が入って来る

それは猫耳メイドになった茜

「おはようございます。咲お嬢様」

茜は笑顔で挨拶をする

茜って

「えっ、キヤーー」

私は茜から距離を取る為、直ぐに体を起こしてベッドのハジに移動する

「どうしました？咲お嬢様」

どうしましたって、でも可愛いじゃなくて

「なんで茜がいるの！」

「なんでと言われましても『罰ゲーム』ですから」

「罰ゲームね」

あっ、そうだ茜にメイド服を着せていっぱいご奉仕して貰うんだった



「罰ゲーム、罰ゲームね、じゃあ」

私は確認の為繰り返す

「じゃあ着替えさせて」

「えっ」

茜たつら恥ずかしくて固まってる

可愛いー

私が笑顔を浮かべて喋る

「メイドなんだから出来るわよね」

「はい」

うん、うん、メイドの茜をものすごくいじりたい

「じゃあそのタンスから服出して」

私は服が1セットになって締まってあるタンスを指差す

茜は指を差したタンスから服を出す

「じゃあそこに置いて、脱がせて」

茜はベッドの上に服を置くと私の正面に来て、服を脱がせ始める

だけど茜は恥ずかしいのか赤くなりながら目を反らす

茜のメイド

しかも今、私の服を脱がして貰ってる。幸せでも

「ダメよ目を反らしちゃ」

「はい」

すると茜は私を見て、赤くなりながら服を着替えさせてもらう

「じゃあ、茜」

「はい」

「朝食を作って」

「解りました。咲お嬢様」

咲お嬢様、いい響きだわ

茜は部屋から出て、キッチンに向かう

「あっそうだ」

私は声を茜に聞こえるくらいまで上げる

「材料は冷蔵庫にあるの使っていいから」

「解りました」

茜の声が聞こえて1分ぐらいするといい匂いがする

それからもう2分が経つ

「咲お嬢様、朝食が出来ました」

私は部屋から出てリビングにあるイスに座る

テーブルには全て美味しそうに作られ、綺麗に盛り沿われたオムレツ、トースト、サラダがある

「コレ！茜が作ったの？」

「はい、そうですよ咲お嬢様」

私はナイフでオムレツを切り、フォークで刺して口に運ぶ  
すると卵の甘みが口いっぱいに広がる

「柔らかくて美味しい」

「ありがとうございます」

そうして茜が作った朝食を美味しく頂く

「そうだ茜」

「何ですか？咲お嬢様」

「マッサージして」

「解りました。咲お嬢様」

私はベッドにうつ伏せになる

「じゃあお願い、茜」

「はい」

するとマッサージが始まる

最初は腰の辺りをやられる

「気持ちいいー」

私は腕と足を伸ばす

そして腕をやってもらう

腕もすごく気持ちよくなる

茜は何処で覚えたんだろ

「咲お嬢様、次は肩をやります」

「うん」

茜は私の肩をマッサージする

「あつ、ああ」

私は肩が凝ってたのか変な声が出る

そうしてマッサージを終えて、少し休むとある事が思いつく

「今から茜に色んな服を着てポーズを取ってもらいます。そして私をが言った台詞を言って貰うからね」

「はい」

先ず私は猫耳を生かした台詞を考える

「じゃあ最初は両手を首の知覚で丸めて『にゃー』って言うて」

茜は恥ずかしく顔を赤くしながらポーズを取る

「にゃー」

「ぷっは」

私の鼻から愛が零れる

私はそれと同時にカメラのシャッターを切る

「咲お嬢様、今のは」

「いいから、いいから」

次に私はボイスレコーダーを用意して台詞を要求する

茜は赤くなりながら言う

「咲お嬢様、大好きです、結婚して下さい」

ボイスレコーダーで録音をした為、鼻から愛が零れるのを我慢した

そうして私は思い付いた、チャイナ服、レースクイーン、女子の制服、体操着などを茜に着せた

「さーて撮影会も終わったけどもう8時ね」

そう撮影が終わったのは20:00になっている  
今日はリアルはないし夜まで出来る

「茜」

「何ですか」

「服を脱ぎなさい」

（言っちゃった）

「何言ってるんですか。咲お嬢様！」

「主である私がシャワーに入るんだから。それに今日はメイド何だからね」

「うう、卑怯です。咲お嬢様」

茜は可愛い顔をする

そうして二人でシャワーに入る

シャワーから上がると茜は少しだけ疲れていた

「何時もより早いけど寝ましようか」

「解りました。咲お嬢様」

私がベッドに入る

「じゃあ一緒に寝ましようか」

「咲お嬢様、それに拒否権は」

そんなの

「ないわよ」

すると茜はメイド服のままベッドに入ってくる

「じゃあ茜、最後の命令です」

「はい、咲お嬢様」

「私を抱き締めながら寝なさい」  
言っちゃった

すると茜はゆつくりと私に腕を近づける  
私は茜の方を見る  
すると茜の腕が止まる

「早く」

可愛いよー

茜は私の事を軽く抱き締める

「もつと強く」

「でも」

「強くしないと明日も罰ゲームして貰おうかな？」

私の言葉に茜は戸惑う

そんな茜も可愛い

するとゆつくりと茜の腕に力が入っていく

その瞬間、茜は赤くなつて眠りに着く

「今日はありがとね」

私は茜の頬にキスをして眠りに着く

茜がメイドで私が主（後書き）

連動して書くのかこんなに難しとは

## 遊園地（前書き）

休みがないと三日ぐらいがかかるとね。



## 遊園地

時刻は10時

今、僕はある場所に着ていた

周りからは「キャー」と楽しみなのか怖さの悲鳴がおり混ざる

そう此処は遊園地だ

何故、僕がここに来たかと言うと約2時間前に遡る

――――2時間前――――

僕は座禅を組んでいた

何も考えずにただ呼吸をして脱力を

すると扉が開いたのかガチャリと音がして3人の女性が入って来る  
殺気を感じられないから僕は無視をした

すると背中と言うか、両腕と背中に抱きつかれる  
僕は直ぐに目を開け、抱きついて来た相手を見る

それは涼さん、明里お姉ちゃん、咲お姉ちゃんだった

「何してるんですか？」

僕は露骨に飽きた感じに言う

「茜ちゃん、何怒ってるの」

明里お姉ちゃん、心配してくれるのは嬉しいけど、お姉ちゃん達の  
せいだからね

「それより茜暇だよー」

子供かよ、咲お姉ちゃん

「そうだ、茜ちゃん」

涼さんも、もういいです

「何ですか？」

「遊園地いこ」

「はっ」

僕は頭で状況を整理する

状況処理NG

「はぁーーーーー」

すると僕はみんなに着替えさせられる（襲われる）

「ちよっ、はなつて何処触ってるの」

そうして僕は女装させられた

はたから見たらコスプレだろう、僕は白をベースにしたウエイトレスの様な服を着ている

「はぁー」

僕は深くため息を吐く

するとみんなに連れられて遊園地に向かう

学校から近くにある遊園地はこの辺では有名ならしい

そして僕は遊園地の前まで来る

すると目の前にすごい物が入って来る

入り口には15m程の巨大なゲートがある

「デカイですね」

「そうね茜ちゃん」

だけど、ここまで来るのはたいへんだったよ  
僕はここに来るまでに10回もナンパにあった

それを一回一回、みんなが五月蠅く怒る為キツかった  
と言うか周りの視線が痛かった

そうしてフリーパスを買い、中に入る  
すると周りからは「キャー」と楽しみなのか怖さの悲鳴がおり混ざる

僕はまた深くため息を吐く

「はぁ」

「茜早く行こ」

「そうだよ。茜ちゃん」

「早く、ね」

みんな酷いよ

そうして僕達は楽しく？遊園地を周り始める

先ず最初に僕達は定番中の定番、お化け屋敷に入る事になる

お化け屋敷の中は薄暗く、在り来たりな光景が続く

おかしな物だよ。僕が前に住んでいた世界ではこんなお化け屋敷は  
普通なのに、ここではコレが日本一並らしい？

僕は一回だけ日本一怖いと言われていたお化け屋敷に行った事があるが、ゴールに辿り着くのに2時間は掛かった

しかも特殊メイクを使っていたらしく星人が沢山いた  
僕はガンツに参加前に行っていたから気絶しかけた

どう言った事でここまで変わるのか知りたいよ

すると横からハモった悲鳴が聞こえる

「キヤー」

僕は横を見るとみんなが天上から落ちて来た、人形に怯えてる

すると僕にみんなが抱きついて来る

「何してるんですか」

僕の飽きた言葉にみんなが喋り始める

「だつて茜ちゃん」

涼さんは涙目で僕の腕を引っ張る

「怖いもん」

明里お姉ちゃんも涙目で僕の腕を引っ張って来る

「はぁ」

僕はため息を吐き、すこし考える

あれ、咲お姉ちゃんは僕と同じ

「茜」

すると咲お姉ちゃんが僕の体に抱きついて来る

「咲お姉ちゃんは怖くないでしょ！」

そうだ、咲お姉ちゃんは吸血鬼だし僕と同じ世界の人だし

「てへ」

咲お姉ちゃんは舌を出して言いながら逃げる様に走り出す

「まっ」

僕は喋り、走り出そうすると止まる

それは二人が僕の手を強く握っている為、僕は走れなかった  
「あはははは」

そうして僕はここを出るのに4時間掛かった

日本一の倍掛かったよ

僕達はお化け屋敷から出ると、直ぐに昼食を食べる為に遊園地内にあるレストランに行く

レストランは普通だからかホッとしたのとガツカリ感があつた

そうして昼食を済ませると僕達はこれまた定番中の定番のジェットコースターに乗る

だがジェットコースターの前に来て見て解つた、ここは異常だ

そこには35mはあろうコースが上に向かって上がっている

そして頂上から一気落下してグルグルと5回転をする様になっている

「何あれ？」

「何って、茜ちゃんジェットコースターだよ」

何で普通にしてくれるの明里お姉ちゃん！！

「茜ちゃん何、あり得ない物を見た目になってるのよ」  
涼さん貴方もですか

僕は自分が正しいか知る為に咲お姉ちゃんを見る

そこには僕と同じ様にあり得ない物を見た様な目をして、ガクガクと震えている咲お姉ちゃんがいる

「じゃあ茜ちゃん行こう」

涼さんが手を握り、僕をジェットコースターに連れて行こうとする

言おう、絶対死んじやうよ

「涼さん」

「何、茜ちゃん」

涼さんは自分の誕生日が待ちきれない子供の様な笑顔で僕を見る

言えない！ムリだなんて

あっそうだ、咲お姉ちゃんは！

僕は助けを求める為に再度咲お姉ちゃんを見つめる

そこには明里お姉ちゃんにジェットコースターの席に座らせられた咲お姉ちゃんがいた

死んだ、僕は

「何でもない」

僕は涼さんに連れられてジェットコースターに乗る

するとジェットコースターの安全バーが僕達を抑える

そうしてゆっくりと進みながら上がり始める

斜面は直角になり、僕の血の気が全て引く

死ぬよ、絶海死ぬよ、何これあり得ないよ

そうして一番前の滑車が頂上に着く

ああ、死ぬかな

すると一番前の滑車が時速100キロぐらいの速さで落ちる

僕の滑車も連鎖をする様に落ちる

僕の目には地面に落ちる様な光景が視界に入ってくる

しかも体は落ちる寄りも速く落ちているのか、僕の体は空中に浮いている

て言うか

「キャーーーーー」

僕の悲鳴はその場に木霊する

そうして僕はジェットコースターから降りる、僕と咲お姉ちゃんは近くにあったベンチに座り込む

「茜ちゃん達大丈夫？」

「明里お姉ちゃんありがとう。でも明里お姉ちゃん達はすごいね」

「当たり前って言うか、普通じゃない」

「もういいです」

僕は一瞬で諦めた

そうして夕方になり、僕達は最後に観覧車に乗る事になった

だが一つの観覧車に乗れる数が2人の為にみんながジャンケンを始めめる

「最初はグー、ジャンケン、ポイ」

明里お姉ちゃんはパー、咲お姉ちゃんもパー、そして涼さんはチョキ

「じゃあ茜ちゃん行こ」

僕は涼さんに連れられて観覧車に乗り込む

そうしてだんだんと上にあがっていく

「茜ちゃん、キスして」

「えっ、ききき、キス」

僕は驚きの余り、呂律がまわらなくなる

「そう、早く」

「えっでも」

「いいから、恋人なんだし」

「うん」



僕はゆっくりと体を涼さんに近づけキスをする

すると沈黙がその場に走り、僕達は観覧車を降りても話が出来なかった

そうして時刻はPM6:00となり、僕達は寮に戻る

僕は自分の部屋のベットに寝転がる

「今日は楽しかったな」

そうして僕はゆっくりと眠りに着く

## 死を覚悟する（前書き）

祝アクセス数15000人を超えました。

## 死を覚悟する

### 夢

茜の目の前には1時間前までいた遊園地の光景が流れている

楽しく、そしてこの世界に来て初めての遊園地だったから、茜の印象が強く、茜は夢でも見ていた

するとその光景はゆっくりと光に包まれて消えていく

茜はゆっくりと目を開きながら周りを見る

そこは茜の寮部屋と共に、茜が寝ていた、ベットの真横には時計が置いてある

茜は時計を見る

時刻はPM8:00

「寝過ぎちゃった」

茜はPM7:00に起きようと思っていたが1時間も寝過ぎた

「ねむい」

茜はそう言いながらも、重そうな足を上げながら食堂に向かう

「流石に今の時間は空いてるんだ」

食堂は何時かは混んでいるが、ピーク時はPM7:00の為か食堂にはお菓子を食べている女子が数人いるだけの状態になっている

すると茜は『和食定食』の食券を買い、注文をする

「あんだ、いまから夕食かい？」

「ええ、ちよつと寝過ごしてしまつたもんで」

「そうかい、そうかい、まあ頑張りなさい、じゃっはいこれ和食定食だよ」

「どうも」

そんな会話をして茜は和食定食を貰うと茜は適当な場所に座る

「いただきます」

そうして茜は1時間遅い夕食を食べ始める

「うん、美味しい」

和食定食はいつも通りに美味しい茜は食すと食器を片付けるて部屋に戻る

「はっ」

部屋の扉を開けた茜の視界に入つて来たのは自分の服を抱き締めている咲だつた

「何してるんですか!」

茜は驚きと怒つた感情がまじつて変な気持ちの声が出る

「茜、何怒つてるのよ」

「咲お姉ちゃんのせいですよ」

「私が何をした?」

咲は全く知らない様に喋る

「それは僕のセリフだよー」

茜は疲れて、ため息を吐く様に喋り、部屋の中に入り扉を閉じる  
「じゃあ、私とシャワー入りましょ」

すると茜は飲んでいたスポーツドリンクを吹き出しそうになる  
「なに言ってるの」

「でも顔赤いよ」

茜はその言葉と共に布団に潜る様に隠れる

「う、うう」

「かわいい」

すると咲は茜から布団を取りあげると茜の服を脱がせようとする

「はーなーしーてー」

茜は咲から離れる為、腕に力を入れて咲を押すが、咲は全く動かない

「シャワーはダメなら、女装してね」

すると咲は茜の服を全て脱がせるとチアガールを来せ始める

「はなってキャーーーーー」

10分が経ち茜はチアガールになった

髪はツインテールにさせられ、両手には黄色いポンポンを持たされている

「何なの、この格好」

「何なのってチアガールだよ」

咲は楽しそうに、そして茜の足を見て「ハアハア」言い出す

「咲お姉ちゃん、チアガールなのは解るよ!!、それよりハアハア言って怖いよ」

「ハアハアそんな事ないよハア」

「嘘だ!!」

茜は叫ぶとその場から逃げようと、するが咲に抱きつかれて動けなくなる

「それじゃあ、やりましょうか」

「何を、それにマイペース過ぎるよ」

「何をつて、だから女性に言わせないでよね」

咲はやはりマイペースに言う

「咲お姉ちゃん、もういいから離して」

「ダメ」

そうして茜は約1時間、咲にいじられてクタクタになった

時刻はPM10時になるうとしている

茜は何時なら、この時間にシャワーに入るのだが、咲にいじられている時に強制的に入れられた為入る意味がない

「服変えよ」

茜はチアガールの衣装を脱ぐと戦闘用の黒い服を着る

ツインテールの髪はストレートにして、武装をする

そうして戦闘準備を終わらせるとゆつくりと柔軟を始める

柔軟は基本的な物で全身をほぐす

すると長い黒髪は他人を魅力する様に揺れる

そうして時刻がPM11時になろうとした時、転送が始まる

腰から真つ二つに割る様に、ジワジワと消えていく

「始まる」

そして転送が終わり、茜はまた何時の部屋に転送された  
部屋には咲や涼と言った変わりばえのないメンバーが茜を迎える

「茜ちゃん、こんばんわ」

「こんばんわ涼さん」

「茜」

その声と共に咲が茜に抱きつこうとする、が茜は体を回す様にして  
涼に抱きつき、咲を交わす

「キャッ、茜ちゃんいきなりはダメ」

「あつ、すみません」

茜の謝りに涼はマイペースかつ欲望むき出しで言う

「茜ちゃんは押し倒す方が好きなの？」

茜はもはや沈黙しか出来なかった

すると再度転送が始まる

また同じ様に腰から消えていく

そうして転送が終わると茜は周りを見る

そこには多くのビルが立てならんだ、市街地であろう

「街かな？」

茜その言葉を言った瞬間にサーベルが茜に向かって飛んで来る

茜は右腕で飛んで来たサーベルを手に取り、左足を後ろに引きながらサーベルを構える

するとサーベルを持った執事とメイド二人が現れる

「貴方に恨みはありませんがお嬢様の命により貴方を殺します」

執事は持っているサーベルを茜に向かって振り下ろす

「っ」

茜は執事のサーベルのじくを狙いサーベルを振り上げた

執事のサーベルは砕け、茜のサーベルが執事の首を吹き飛ばす

それと同時に女性の声と共にさっきのメイド達が、気絶しながら茜に向かって飛んでくる

「キャ」

茜は飛んで来たメイド達を交わしながら、メイド達が飛んで来た場所を見る

そこには咲と涼が武器を構えて立っていた



「茜「ちゃん」

そんな声と同時に二人が茜に抱きつく

「ちよっ」

茜はバランスを失い、倒れそうになるが何とか倒れずにすむ

「二人共、急に抱きついて来たら危ないですよ」

二人は茜の言葉で思い出した様に謝るとまた歩き始める

100mぐらい歩いた所で茜達は武装の確認をしていた

何故かと言うと、戦闘を一切した事のない者でも解るだろう殺気がその場に漂っていた

三人はかなりの戦闘を積んでいる為か、ある程度の殺気を察知する事が出来る

三人の武装が完了した、瞬間に近くにあったビルが爆発する  
ビルからは土ぼこりが舞い壁を隠す

だが三人は悟った。壁を破壊した者が殺気の正体だと

三人は有無を言わずに武装を展開している

するとだんだんと土ぼこりが消えてビルがちゃんと見える

ビルの壁には巨大な穴が飽いている

穴からは先ほどと同じ執事服を着た、男とこれも先ほどと同じメイド服を着た女性が立っている

そして二人の真ん中に立つ様に一人の女が立っている  
すると女は口を開け、喋り出す

「貴方達を殺します。では二人共行きなさい！」  
女の言葉と共に執事とメイドが茜達に向かって飛んでくる

「茜はあの執事をお願い。涼はメイド。私はあいつに行くわ」  
茜達は咲の指示に従って闘い始める

茜は刀を出して円を描く様に振り上げる  
執事はサーベルで刀を抑えて、茜に回し蹴りを入れようとする

（壊す）

茜は吸血鬼星人の力を発動させる  
すると茜の目は鋭くなり、茜は執事の回し蹴りに合わせて、回し蹴りを放つ

「ぐっは」

茜の回し蹴りにより執事は吹き飛ぶ

「ガンツスーツに力を入れる様に」

そう言う茜は足に力を入れて執事に向かって飛ぶ

「はぁー」

茜は刀を空中で抜きながら、振り上げて執事を切り裂く  
「終わった」

茜は涼を見える

そけには銃をメイドの頭に撃ち込んでいる涼がいた  
「茜ちゃん終わったの」

「はい」

すると執事達がいたビルからまた大きな音がする

茜と涼はビルを見てみる

そこには刀を持った、咲と互角に渡り合うお嬢様がいる

「はあ」

茜は足に力を入れて、咲の元にジャンプしようとする

「茜ちゃん、流石にダメだよ」

（だよね）

そうして茜の体は浮く

「えーーーーー」

茜の足は地面をえぐる様に沈み、咲に向かって飛び出す

「くっそー」

茜は空中で刀を出して構える

「茜、なんで!?!」

咲が戸惑っていると、お嬢様がサーベルを咲の視覚から振り抜く

「咲お姉ちゃん!!」

茜の叫び声と共に、茜の頭が急にクリーンになる

（あれ、見えるし動ける。それに聞こえる）

茜は体のバネに圧力を掛け、その反動を利用して、強烈な勢いで体を回す様に刀を振り抜く

刀はお嬢様を捉え、首を吹き飛ばす

「茜、なにやってるのよ？」

だが茜にはその言葉は届かず、茜は揺れ始める

（あれ、咲お姉ちゃんが何か言ってる）

「茜」

その途端、茜は壁に空いてある穴から空中に落ちる

（あれ、僕、落ちてるのかな？）

「涼、茜をたすけて！」

涼は直ぐに茜を抱きとめようとするが、涼達は転送が始まる

「くそー」

そうして咲と涼は、茜よりも早く転送が完了する

（だんだん地面が近づいて来るよ）

そうして転送と共に地面に向かい落ちていく

「死ぬのかな」

その言葉を言い終わった瞬間にその場から完全に転送が完了する

「茜「ちゃん」

涼と咲の目の前に茜が転送された

二人は茜に駆け寄ると直ぐに茜の安否を確認する  
茜の体には傷はなく、茜はただ眠っていた

そうして二人は茜を部屋のベッドに眠らせると、ある事を考える

「今なら何してもバレないよね」

涼はジュルリとつばを飲んで茜に近づく

すると咲が涼の腕を抑える

「離して、茜ちゃんに」

「私だって茜に」

「じゃあ」

「ジャンケン！」

二人はハモリながらジャンケンを始める

「最初はグー、ジャンケン、ポイ」

二人共、パーを出す

「あいこで、ポイ」

二人はチヨキを出す

「あいこで」

そうして二人はあいこを続け、日が登り始める。

## 鬼ごっこ

今、僕は沢山の生徒おにから逃げていた

沢山の人をくぐり抜けながら、廊下を全力疾走する

だけど一向に生徒の数は減らずに、むしろ増えていく  
しかも全員が僕を捕まえようと本気を出している

すると麻醉銃を使う人まで現れた  
まあ、もちろん全部交わすけど

何故、僕がこんな事になってるかと言うと朝に遡る

――朝――

僕はつい1秒前まで眠っていた体を動かそうとする  
だが体は動かずに、横から変な声がする  
「うにゅ」

なにこのアニメのキャラ  
じゃなくて何で声がするの？

僕はゆっくりと目を開き、声がした方向を見る

僕の目の前には下着姿の涼最初がいた  
「えっ」

僕はそのあり得ない光景にビックリして声がでる

すると涼さんの両腕が動き、僕の右腕を抱きしめる

「にゃっ」

僕は変な声と共に後ろにバックする

だがバックをすると同時に何かが僕の背中につつかる

僕はすぐに後ろを見る

そこにはまた下着姿の咲お姉ちゃんがいる

しかも目を開け、僕を見ている

「茜はやっぱ押し倒されるより、押し倒すほうが好きなんだ」

僕は身の危険を感じてすぐに体を起こそうとする

すると咲お姉ちゃんが僕の首に手を回して、顔を近づけてくる

「ごめんね、私は押し倒すほうが好きなんだ」

すると咲お姉ちゃんが押し倒す様に、僕の体をベットに倒しながらキスをする

僕は理解が出来ずに体が固まる

すると咲お姉ちゃんはキスを終わると、僕の体は仰向けになって、完全にベットに倒れる

「じゃあやろ」

そう言つと咲お姉ちゃんは僕に馬乗りをする

そしてゆっくりと僕の服のボタンに手をかけ、外していく

「キヤーーーーー」

僕は全身に力を入れ様とするが、体は動かない

「なんで！」

僕はさらに力を入れると痛みが全身に走る

「っ」

「あつそうだ、そうだ茜昨日、吸血鬼の力100%使ったんだよ」

「それと体が動かないのは関係ないでしょ！」

僕は更に力を入れて行くと、一瞬意識が遠のく

「茜ダメだよ。疲れた体に朝から本気の力を入れちゃあ。じゃあ続きよ」

咲お姉ちゃんはまた、服のボタンを外し始める

「イヤーーーーー」

そうして僕の体はまた一つ汚された

1時間後、僕はやっと咲お姉ちゃんから開放された

さつき体が動かなくなったのは、昨日の掛かっていたリミッターが全て外れて、筋肉にチカラが余り入らなくなっただけらしい

そうして二人は部屋に戻ると、僕は服装を確認する

僕は咲お姉ちゃんに服を脱がされ、何故か女性物の下着を着せられた

うっ、しかも何枚か写真取られたよ



そうして僕はすぐに服を制服に着替え始める

制服に着替え終わると時間を確認する為に携帯を見る

携帯には時刻は7:00と表示されている

「朝食、食べるかな」

そうして僕は食堂に向かって歩き出す

廊下にはパジャマで眠たそうに

している女子や、朝からジョギングをして来たであろう男子が沢山いる

僕はその様な光景を見ながら、歩いていると食堂に着く

食堂に入ると美味しそうな匂いと共に、沢山の生徒が眼に入ってくる

ていうか

「はぁ、やっぱり多いよ」

そうして僕は食券を買う為に列に並ぶが前には沢山の人がいる

時間足りるかな？

そんな事を考えながら昨日の事を思い出す

昨日、僕は吸血鬼星人の力が全部つかえたんだよね？

でも何で？

僕はゆっくりと昨日の感覚を思い出そうとする

頭をクリーンにして、ただ一つに集中する

僕は右腕に全神経を集中させる

すると右腕に痛みと共に未知の何かが走る

「っ」

やっぱ力入れちゃ、まだダメかな？

そうしてると僕の番になり、僕は食券を買い、流れ動作でおばちゃんに食券を渡す

ちなみに僕は『モーニング』と言う洋風の朝食らしい

そうしてるとモーニングを受け取り、席に座るとすぐに食べ始めた

プレートにはトースト、コーヒー、サラダ、オムレツがある

僕はトーストをかじりながらオムレツを食べる

すると口の中にトーストの香ばしさと、卵の美味しさ広がる

「美味しい」

そうして僕は全て食べ終わると携帯を開き、時間を確認する

携帯には7:30と表示されている

時間余ってるし、部屋に戻って座禅組むかな

そうして僕は食器を片付けて部屋に戻る

僕は時計のアラームを掛けて座禅を組みながら全神経を体の中心に集中させる

そして神経以外の力を抜く

するとクリーンを通り越してクリアされる  
その途端、体がいつも通りに動く様になる

それと共に体の中が変わっていくのを感じる

「っ」

僕の右腕が完全に変わったであろう時に耳にアラームの音が響く

「えっ、あ」

僕は少しだけビックリしながら、アラームを切る

そして立ち上がり右手を握り締める

「変わってない？よね」

僕の右手には力が入るが、それは神経を集中させたせいだろと思い、僕は学校に向かう

そして教室に入り、席に座る

「茜「ちゃん」

その言葉と共に両腕に誰かが抱きついて来る

僕は両腕に抱きついて来た、相手を見る  
そこには涼さんと咲お姉ちゃんがいた

「なにしてるの？」

「抱きついてるだけだよ。茜」

それで片付けられるのは咲お姉ちゃんだけだよ

「そうそう、茜ちゃんは『私』の物なんだからね」

涼さんがそう言い終わると、咲お姉ちゃんが立ち、それと同時に扉が開き、明里お姉ちゃんが入って来る

そしてお姉ちゃん達は涼さんに近づき喋り出す

「涼、茜は私の『物』よ！」

咲お姉ちゃん違うよ！

すると咲お姉ちゃんは僕の腕に抱きついて来る

「貴方達離れなさい。私のなんだから」

だから違うよ！

明里お姉ちゃんは僕から、涼さんと咲お姉ちゃんを離す

すると三人が口論を始める

僕は無視してカバンを閉まって、机の中に腕を入れると、腕に何か  
がぶつかる

んっ

僕は机の中からその何かを出す  
それは手紙だった

しかも1年前まではほぼ毎日の様に見たピンクの可愛い手紙だった

僕が手紙を開けて中を見ようとすると三人が僕を見る

「茜ちゃん、その手紙渡して」

明里お姉ちゃんが少しだけ殺気を出して言う

「えーと何で？」

「それは茜にラブレターが着たんだから」  
咲お姉ちゃんが笑顔なのに怖い

「えっでも」

僕は怖くて声が小さくなる

「私で、ね」

ダメだよね。だって昔と違うし

僕は重くなった口をゆっくりと開ける

「貰ったんだから、ちゃんと返事を返さない」と

すると三人から何かが出る

「じゃあ茜ちゃん、ゲームしよっか」

「ゲーム？」

僕は明里お姉ちゃんの言葉を不思議に思っ  
て聞き返す

「そうゲームよ。ルールは簡単な鬼ごっこで茜ちゃん  
が捕まったら、そのラブレター渡して」

「拒否権は」

「「「ないわよ」「」」

三人がハモる  
ってやっぱりねー

「でも授業は？」

「それは大丈夫よ」

すると三人が教室から出っ  
ていく

「大丈夫かな？僕」

僕は手紙を制服のポケットにしまい、軽く休む

そうして8：45分になり、三人が教室に戻っ  
て来る

三人が前に立ち、喋り出す

「えーと今日は授業変更があります」

明里お姉ちゃんの言葉にクラスはざわつくが三人は授業内容を話  
し出す

「今日やるのは『茜をつかまえる』だー」

咲お姉ちゃんが一人で滑る

「じゃあルール発表するわよ」

涼さんが修正する

「簡単に説明すれば茜を捕まえる鬼ごっこよ。しかも麻酔銃ぐらいなら使用OKよ」

すると咲お姉ちゃんが学園のマップを出す

マップには大体100km四方の学園の敷地内が細かく表示されている

「学園内だったら茜ちゃんは何処に逃げてもOKよ」

すると大きな音がスピーカーから流れる

「これは茜ちゃんが逃げていい合図よ。もう一回鳴ったら私達も移動するわよ。それじゃあ茜ちゃん、いってらしゃい。ちなみに終わりの合図は放送だからね」

マジかよ

僕はそんな事を思いながら教室を出てグラウンドに向かう

グラウンドに行くために通る廊下を歩いているとスピーカーから音が出る

廊下にその音が響き渡る

それと同時に各教室から生徒が僕に向かって走ってくる

はあ、たいへんだよ

僕は廊下にある窓に腰をかけと、一人の男子生徒が僕の制服を掴もうとしてくる

「神田打ち取ったりー」

「バツカじゃねーの」

僕は本気を出し、口調が少しだけ変わっていた

まあ、それはいいとして、僕は窓から背中を落とす様に落ちる

すると周りの生徒が悲鳴をあげる

僕は無視しながら落ちる

もう力入れていいよね

体の全神経を足に集中させる

そして足が地面に着いたと同時にグランドに向かって走り出す

走る事によって、足に掛かる負担が最小限に抑えられて、楽に走り出す事が出来た

ちなみに落ちたと言っても、まだ廊下だ

すると麻醉銃を持った生徒が現れて僕に向かって撃ち出す



しかも周りには生徒が多いよ

僕はある一定の力を出しながら、麻酔弾を全て交わしながらグラウンドに着く

そけにはお姉ちゃん達がいた

「茜「ちゃん」かくごー」

お姉ちゃん達が僕を捕まえようとしてくる

「つて、キャーーーー」

お姉ちゃん達の攻撃が全て僕の服に当たり、肌が露出される

「ハアハア」

しかも息が荒くなってるよ

「イヤーーーーーーー」

そうして大体5時間が経ち、僕は何とか生き残っていた

するとスピーカーから音が鳴り響く

「じゃあ、開けますよ」

お姉ちゃん達は半泣きになるが、僕は気にせずに手紙を開けて、手紙を読む

「『神田 茜様

是非、わが剣道部に来てください。

同府されている食券は使って下さい。』って「

僕達は固まり、僕は部屋に戻る

そして剣道部が潰れたらしい

## 鬼ごっこ（後書き）

感想、アドバイスをお願いします。

## トレーニング（前書き）

今回は咲目線です。

あと文字数が少ないです。

## トレーニング

今、私は茜の部屋に来ていた

茜の部屋は殺風景なくらいに何もなかった

でも私の目の前には輝かしい、私の『物』があるわよ

そう、それは茜よ

それで私は茜が寝ている、ベッドの横に立っています

茜は鬼ごっこの疲れが残っていたのか、制服のまま寝ている  
しかも制服のボタンは全て外れて白い肌が露出している

これはもう襲えって言ってるのよね  
それに何でこんなに色っぽいのよ！

私の息が徐々に荒くなっていく

「まあ、いつか一緒に寝て、起きたらトレーニングしてあげたら」  
私の理性が勝った

私は服を脱ぎ、下着になって茜が寝ているベッドに入る

「じゃあ、お休み茜」

私はゆっくりと茜の頬にキスをして眠りに着く

そうして大体1時間ぐらいが経った頃、私は目を覚ました

「あと5分で起きないとね」

私は茜の顔を覗きながら、頭を撫でて楽しんでた

そうして私が楽しんでいると、茜の携帯からアラームが鳴り響く

茜はゆっくりと目を開けながら、私に抱きついて来る

可愛い

「茜だったら、そんなに私の事が好きなの？」

私がそんな事を喋ると、茜が完全に目を覚まして私から離れる

「どうしたの？茜」

「どうしたの？じゃないよ！咲お姉ちゃん！！」

そんなに恥じらいを持ってやられたら

私の胸はかなりドキドキしていく

「じゃあ続ける」

「なんの！？」

「だから女性にそんな事、言わせちゃダメよ」

私は茜を軽く怒る様に言う

「で何でいるの？」

おっ、茜が確信をついて来た

「茜にトレーニングしようと思って」

「そうなの？ありがとお姉ちゃん」  
茜が笑顔で言う

ああ、溶けちゃうよ

そうして私は茜をいじりながら、着替えてグラウンドに移動する

「あつ、そうだ咲お姉ちゃん」

「何？茜」

「なんで僕がこんな服着てるの？」

茜は自分の服を摘みながら言う

茜の服は、女子のミニスカ制服を着ている

可愛いよー

「私が見たかったから」

「そんな理由なの！」

茜は軽く怒りながら言う

可愛いからもつといじっちゃお

「そうだよ。あとそんなに動いたらパンツ見えちゃうよ」

すると茜は顔を赤くしながら、スカートの端を持って足の方を隠す

「うっー」

可愛いー

そうしてグランドに到着する

グランドには一切人がいない

まあ、茜を追いかけたあとだしね

「じゃあ茜、行きましょうか」

そうして私達はガードがしっかりとっている場所に入る

「咲お姉ちゃん」

「なに？茜」

「僕、何をしたらいいの」

茜は少しだけ小さくなって言う  
女装効果かな

「そんなに焦らない」

「でも」

「じゃあ、まずは吸血鬼星人の力について教えてあげる」  
私は茜の言葉の途中で喋る

「力ってただ集中したら使えるんじゃないの？」

「ちょっとだけ違うかな。集中じゃなくて、茜の場合は細胞を進化させる段階かな？」



「進化ってどうさせるの？」

だよ

「簡単に言えば、茜が吸血鬼の力を使った時の感覚を思い出してみ  
て」

すると茜がゆつくりと目をつぶって、肩を下ろしている

「体の神経を解放して」

茜、がんばれ

私がそう思った、瞬間に茜から黒いオーラが出る

そう、このオーラこそ吸血鬼の力の象徴

「そうよ、それが吸血鬼の力」

すると、茜から出たオーラが茜を渦巻く

「はぁー」

「そのまま、止まってね。最後にちゃんとやってあげるから」

そうして私は茜の首に顔を近づけ、首筋を噛む

私の歯は、茜の首に刺さり、私の口には茜の美味しい味が広がる

そして私は茜の体内に黒いオーラの源を作る、ウイルスを入れる

「茜終わったよ」

私が茜の顔を見てみると、茜の顔は疲れた感じをしついる

「茜ー大丈夫？」

「うん、ちょっと眠いけど」

「あと一時間もしたら大丈夫になるからね」

私は茜を部屋に連れていき、寝かすと自分の部屋に戻って来た

「私も疲れたし寝よ」

そうして私はゆっくりと目を閉じて、意識を手放す

## 悪夢への序奏

今、僕はグラウンドから帰って来た所だ

咲お姉ちゃんの肩を借りたおかげで、かなり楽に部屋に戻ってこれた

咲お姉ちゃんは自分の部屋に戻っていった

僕は眠たい体をベットに倒す

「あの時、なんかリミッターが外れたのかな？」  
手を握りながら考え始める

力を使う、じゃなくて体から呼び出す感じだったかな？

僕が右腕にさっきの感じを呼び起こす

「っ」

その途端に右腕に衝動が走り、黒いオーラが右腕をまとう

「抑えろ！」

僕は黒いオーラを操りながら消してゆく

「ハアハア、大変かな？これは」

そうして僕はゆっくりと意識を手放し、眠りに着く

夢

僕の周りには暖かな人がいる

でも、それはあいつらによって壊された

もう、壊されたくない

僕はもう誰も失いたくない

その途端に僕は目を覚ます

「いま、何時？」

僕は横になっている体を、ゆっくりと起こして携帯を開く

携帯には18:00と表示されている

「もう6時か」

そして体をベットから立ち上がらせて、体を伸ばす

腕や肩からポキポキつと骨が軋む音と共に、僕は体に異変を感じる

それは体が以上なまでに軽い

「これが力なのかな？」

僕は昔見た、吸血鬼星人がやっていた様に、右手に黒いオーラをためる

すると黒いオーラが右腕全体を包み込む

それと同時に右腕全体の力が上がっていくのを感じる

「確か？銃を出す様に」

僕は右腕に纏ったオーラに銃を思い浮かべる

するとオーラから銃が現れる

僕は銃を握りながらぼやく

「これ出せるからって役にたつのかな？」

そうして僕は黒いオーラの応用を探し始める

「先ずはこのオーラの事かな？」

そして僕は黒いオーラの事を汁為に咲お姉ちゃんの部屋に向かう

廊下には全く一人はいない  
なんでだろ？

そうして僕は咲お姉ちゃんの部屋の前に着く

「咲お姉ちゃんー」

僕は扉をノックする

だが返事がない

「咲お姉ちゃんー」

僕は再度ノックをする

だが返事はない

「咲お姉ちゃん、入るよ」

僕は返事がないため、部屋に入る

部屋は薄暗く、誰もいない感じだった

「寝室いつてみよ」

僕は咲お姉ちゃんの寝室に入る

寝室には咲お姉ちゃんが一人ベットで寝ていた

僕は咲お姉ちゃんに近づき、顔を見る

「大人しかつたら可愛いのにー。そうじゃなかった。これじゃあ教えて貰うのは無理だよな」

僕は顔を咲お姉ちゃんに近づけてほっぺにキスをする

何時の仕返しだよ。咲お姉ちゃん

そうして僕は咲お姉ちゃんから顔を離すと、部屋を出ようとする

その瞬間、僕は誰かに腰を抱きつかれた  
ってまさか、ないよね

僕はゆっくりと、顔を腰に向ける

そこには考えていたがビックリする人がいた

「咲お姉ちゃん！」

僕はビックリした余り、少し大きな声になる

なんで！？、ってさっきのキス

僕は恥ずかしさの余り、顔じゅうが暑くなる

「茜、ありがとう」

「へっ」

僕はビックリした余り、変な声が出る  
じゃなくて

「なんで！？」

「だって可愛いって、それぬキスまでして来れて」

その途端、頭の中が真っ白になる

「茜ー、大丈夫ー」

咲お姉ちゃんがなんか言ってる

「茜ー」

あつ、読んでるんだ

「なに？」

「大丈夫？」

「いちよう」

つか顔を通り越して、体が暑い

「で、なんで茜が部屋に来たの？」

「それは「えっ、なに私を襲いに来てくれたの！ダメよ茜、私の心の準備がまだ」

咲お姉ちゃんが僕の声をかき消して喋る

「じゃなくて、吸血鬼星人の力の使い方を教えて欲しいの！」

「使い方って」

やっに戻った

「黒いオーラの応用の仕方とか」

「それならいっぱいあるわよ」

すると咲お姉ちゃんが右手を僕の前に出す

「じゃあ見ててね」

その言葉と共に咲お姉ちゃんの右手に黒いオーラが纏う

「茜だったら、このオーラで武器出せるのは知ってるでしょ」

「うん」

「じゃあ、このオーラは『作る』だけの物なの？」

そう言われてみたら、そうだな。

でも、纏った時は力を強くしてくれた

すると、ある一点の原理が浮き出る

「たしかに、このオーラは『作る』だけの物だよね。でも『作る』って事は体の細胞や刀の刃も強化出来るって事だよね？」

「そう、それが正しい使い方かな？」

僕は咲お姉ちゃんの言葉に引っかかる

「かな？つてなに」

「それは私の場合は少し使い方が違うからよ」

「じゃあ咲お姉ちゃんはどうやって使ってるの？」

すると咲お姉ちゃんがさつき出した黒いオーラの形を変えていく

黒いオーラは形を変えて刀になる



それは黒いオーラとしか言えない様に正確な形は無く、ただ切れる物体の様に見える

だが斬れ味はすごいだろう

それだけは見ているだけでもわかる

「咲お姉ちゃん、それはなに？」

「これは見ての通り、オーラの塊なんだけど、やり方教えようか」

「いいの」

僕は咲お姉ちゃんの顔に近付く

「ええ」

「ありがとう、咲お姉ちゃん」

僕は嬉しさの余り、咲お姉ちゃんに抱きつく

すると咲お姉ちゃんの顔が少しだけ赤くなる

風かな？

そうして僕は咲お姉ちゃんに黒いオーラの操り形を教えて貰う

「じゃあ茜、手出して」

僕は言われるままに手を咲お姉ちゃんの前に出すと咲お姉ちゃんが僕の手を添える

「見ててね」

咲お姉ちゃんが僕の手ごとオーラを纏う

そして纏ったオーラを僕の手の平に黒いオーラのボールを作る

「これが出来ればさっきの刀は簡単かな、じゃあ離すよ」

咲お姉ちゃんが離れた瞬間にボールが不安定になる

「うっわ」

するとボールは消える

「はは、がんばれ茜、じゃあ私は寝るから襲うなら今よ」

「襲わないから!」

そうして僕は咲お姉ちゃんの部屋から出て、自分の部屋に戻る

「それじゃあやるか」

僕は手の平を上に向けながら、オーラをため始める

だがそう安安と上手く行くはずはなく、オーラは直ぐに消える

「感覚を掴めば」

そうして僕は時間を気にせずにトレーニングをやり続けた

そうして約2時間が経ち、時刻はPM8:00になる

「夕食 食べよ」

そして僕は食堂に向かう

「腹減ったー」

時間が時間の為か、食券にはスイーツを食べてる女子しかいない  
まあ、これも何時も通り

そうして僕は『蕎麦』の食券を買って、おばちゃんに渡す

そしておばちゃんから蕎麦を貰うと適当な場所に座って食事始める  
蕎麦からは醤油のいい匂いが漂っている

そして僕は蕎麦を食べる

すると口の中に醤油と鳥肉の出汁が広がる

「美味しい」

そうして食事を済ませると部屋に戻り、トレーニングの続きをやる  
ある程度のオーラをボールにする事は出来たが、咲お姉ちゃんみたいに大きくは作れない

「すうー」

僕は息を吐き、また手の平にオーラをため始める

そうして時刻がPM10:45分になる

「着替えよ」

僕はいつも通りに先頭用の服に着替える

よっし、柔軟やる

屈伸や背伸びと言った基本的な柔軟を行う

そうして時刻がPM11:00になる頃、転送が始まる

すると体に寒気が走る

全てを凍らせ、破壊する様な物が

「なんだ今のは？」

そうして転送が終わり、いつもの部屋に転送さるた

周りには咲お姉ちゃん、明里お姉ちゃん、涼さんがいる

「こんばんわ」

## 悪夢への序奏（後書き）

なんと！あと次回の章を含めて5章で終わりになります。

次回の章で詳しく説明を入れたいと思います。

## 茜VS神様星人

「こんばんわ」

茜はいつもの様に転送をさるた

周りには咲、涼と言ったいつも通りのメンバーがいる

「こんばんわ、茜ちゃん」

涼が笑顔で茜に喋りかける

「茜ーどうだった」

「えっ」

茜がそんな事を言った瞬間に、咲が茜の首に手を回す様に抱きつく

「何が？」

茜は抱きついて来た事には触れずに話す

「オーラの事よ」

すると茜は微妙な顔になる

「微妙かな？」

「そう」

すると涼が口を挟む

「なんの事？茜ちゃん」

「なんでもありませんよ。涼さん」

茜は笑顔で涼に返す

（なんなの、この笑顔は！）

すると涼の顔が赤くなり、涼が動かなくなる

「どうしたの？涼さん」

茜は涼が止まった事を不思議に思い、心配そうな顔をする

その瞬間に涼からジューと音がすると共に、涼から煙がたつ

「涼さーん」

茜は直ぐに自動販売機からジュースを買って涼の首筋につける

「ヒヤッ」

ジュースが首筋に着いたと同時に、涼が変な声を出す

そして涼を正常に戻す

すると転送が始まる

腰からえぐる様に体を、真っ二つにされながらを転送される

茜は目を閉じて、息を深く吐く

「ふうーーーーー」

そうして転送が終わり、茜は目を開ける

そこは見たことがある駐車場だった

「なんで？なんでだ」

茜は理解出来ずに混乱する

すると茜の後ろから音がする

音は駐車を連鎖する様に響き茜に伝わる

茜は無表情で刀を抜き、後ろに向ける  
だが、そこには涼達が立っているだけだった

「なんだ二人だったんだ」  
茜は軽く笑顔になって喋る

「なんだじゃないわよ！茜ー」

「そつよ！茜ちゃん」

「ごめんなさい」

茜が素直に謝ると二人が同様する

「いっつや、その茜、そんなに畏まらなくていいから」

「そつそつだゆ。茜ちゃん」

二人の心に罪悪感が芽生えた

その途端に体に重圧がかかる

（これは）

茜はこの重圧を2回感じた事がある

二回目は今日、そして一回目は茜の人生が終わった時

「これはあいつか」

「茜」

茜は無視して無言で歩き出す

（もうキレてるのかな？）

茜は自分の感情を理解しきれずにいた



「茜ちゃん、どうしたの？」

「二人とっ」

茜が喋ってる途中に爆発が起こる

爆発は茜の周りを削る様に爆発される

「っ」

茜は刀を構えて、重圧の中心部に向かって走り出す

「ちよっ、茜待ってー」

「待ってー」

二人も茜を追う様に走り出す

すると茜の目の前に一人の老人が現れる

老人はヒゲがながく、何処かには絶対にいるおじいさんだった

「やっぱりお前か。神様星人」

茜は目付きを変え、鋭く怖く、獲物を狩る、獣の様な目になる

そして茜は刀を構えながら、神様星人に突進する

「青いのー」

神様星人は手を前に出す

それと同時に茜は空中を吹き飛ばされる

「ぐっは」

茜は近くにあった車にぶつかる

車のバンパーは凹み、フロントガラスは粉々に碎ける

「くっそ」

茜は立ち上がろうとすると、目の前に涼達が立つ

「二人共逃げて」

「無理よ」

「そうだよ、茜ちゃん」

「でも」

すると神様星人は右手を涼達に向ける

それと同時に咲は手を前に伸ばし、手には黒いオーラが纏ってある

そして黒いオーラを弾く様に爆発がおこる

「なんで」

茜は神様星人の強さをしっている

そしてその強さに自分が死んだ事も

だからこそ、こんな事があり得るとは思わない

「茜は知らなかったのかな？このオーラを使えば神様<sup>あいつ</sup>星人の攻撃くらいいなら弾けるよ」

「青いのー」

「えっ」

その途端、二人が吹き飛ばされる

（オーラを操って、包み込む）

茜は両腕から黒いオーラを出して、二人を包み込む

二人は黒いオーラによって衝撃を抑えられる

「青いのー、わしの攻撃を抑えるならもつと強くやらんかい」

だが茜は神様星人の声は耳に入らずに立ち上る

「はぁー」

茜は息を深く吐く

すると茜の体を黒いオーラが包み込む

「殺す」

茜は刀にも黒いオーラを纏わせて、神様星人に斬りかかる

刀は円を書く様に振り下ろされる

「まだ青いのー」

茜が放った刀は神様星人を通り抜ける様に振り抜かれる

「なら」

茜は更にオーラの密度を高くする

すると刀にヒビが入る

「はぁ」

茜は刀にヒビが入ろうが無視して刀を振り上げる

「青いのじゃよ」

刀は神様星人に触れた瞬間に刀は碎ける

「はぁ あぁ あぁ あぁ」

茜は体の衝撃のままに黒いオーラから体を二本出す  
そして出した刀をまた同じ様に円を描きながら振り上げる

「はああああ」

刀は神様星人に触れると同時に、一瞬にして砕け散る

「なら！」

茜は刀を捨て、グローブにオーラを纏わせる

それと同時に茜の中に何かが走る

それは茜を駆り立てる様に、そして茜の記憶を呼び覚ます様に

すると茜の頭の中に一つの言葉が出る

「作る、か」

茜はつい声に出る

すると茜はグローブに纏わせたオーラを体全体に移動させる

「体を作る」

茜は細胞の一つ一つを破壊し、黒いオーラで再生、強化をする

「あとは」

黒いオーラから日本刀を一本出す

「これに」

茜は体から大量の黒いオーラを出して日本刀に纏わせる

そして黒いオーラの密度をこくして一本の刀とする

「ハアハア」

茜は体を構える

すると神様星人が茜に手をかざす

「はぁーーーーー」

茜は右足で踏み出しながら、刀を神様星人に振り抜く  
刀は円を描きながら神様星人の右腕を切り裂く

「まだまだ青いのー」

「えっ」

その途端に刀は砕け、茜ごと吹き飛ぶ

「茜ー」

「茜ちゃん」

涼と咲の声がハモリながら茜に響く

「みんなを」

茜は足に黒いオーラをためて神様星人に向かって飛び出す  
「守る」

茜は右手に黒いオーラのボールを作り、神様星人の顔面に当てる

それと同時に、神様星人の顔は吹き飛び、茜は吹き飛ばされる

茜は気絶すると共に身体中から切り傷ができ、血を流す

それと同時に転送が始まり、涼達は茜に近づく

「茜ー!!」

「茜ちゃん!!」

二人は茜の肩を揺らす、全く反応がない

「あか」

二人が言い終える前に完全に転送が完了する

「二人共、大丈夫かな?でも転送終わったし大丈夫だね」

茜は笑顔になりながら、また意識を失い完全に転送が完了する

「茜ちゃん」

「茜」

転送が終わった茜を二人は直ぐに医務室に運ぶ

「茜は大丈夫なんですか！」

「いえ、それはまだ」

「どうなんですか！」

「だからまだ」

「二人共、大丈夫だから」

茜が一瞬そう呟くと先制が直ぐに手当をする

—————  
一週間後—————

今、茜は寝ている

白く薬品の匂いがプンプンするベットの上で

（ここは何処？私は誰？、フフ、そんな事はないけど意識は飛んでるよ。あれから何日たったんだね？目、開けよ」

茜はゆっくりと目を開け、周りを眺める

「医務室かな？」

茜は曖昧な言葉で黄昏ていると扉が開き、涼達が入ってくる

「茜ちゃん」

三人はハモリながら茜に抱きつき、泣き始める

「茜のバカ。心配させるんじゃないわよ！」

「そうだよ！茜ちゃん」

「私達がどれだけ心配したと思ってるの！」

「ごめんね」

茜は笑顔で三人を泣き止ませると自分がどうなったかを知った

そうして茜は明日に向かって走り出す

## 茜VS神様星人（後書き）

あと4章になりました。

では次章からの説明です。

### 33章

明里との恋愛ストーリーです。

### 34章

これは涼との恋愛ストーリーです。

### 35章

咲との恋愛ストーリーです。

### 36章

これは何と！ハーレムエンドです。

全ての章でルートエンドを作りたいと思っています。  
では



恋人達の行方 (明里バージョン) (前書き)

気づいたら文字数が6600超えになっていました。

## 恋人達の行方（明里バージョン）

僕は今、明里お姉ちゃんとプールに来ていた

プールはTVなんかで見る様な大きな大きなプールだ

だけどプールには300人はいらるだろうか

その為かプールは微妙に動き憎い？

で言い忘れたんだけど今、僕はピンチ？です

なんで疑問系かと言うと、それは僕の前にあります  
そう、それは明里お姉ちゃん僕に抱きついています  
僕の耳には明里お姉ちゃんの吐息が僕の耳を刺激する

僕は耳に吐息が当たるだけでビクビクと体が動く  
何故僕がこんな事になったかと言うと朝に遡る

――朝――

眩い光、それと目覚まし時計のジリリリと言う音の中にある甘い声  
の中で僕は目覚ました

朝、しかも寝起きの僕にしたら全てが悠つな物だ  
しかも声の主は僕の肩を揺らしている

まあ、それはさておき、僕はまた音を聞く

「茜ちゃん起きて、ねえ起きてよお」

僕はゆっくりと目を開き声の主を見る

「明里お姉ちゃん、なんでいるの  
寝起きのせいか、僕は無表情で言いながら目覚まし時計を切る

「茜ちゃん怖いよー」

「当たり前でしょ！今何時だと思ってるんですか！」  
そう今は朝の7：00時だ

何時の僕なら6：30分には絶対起きているのだが、僕は寝る前に  
座禅を組んで集中をしていた

そのせいで時間の感覚がなくなり、寝たのは今日の3：00時だ  
今日は日曜日で休みの為、別によかったのだが違ったらしい

「で、なんで明里お姉ちゃんがいるの？」  
僕は開き直り、明里お姉ちゃんに聞き返す

「あつ、そうだそうだ、茜ちゃんプール行かない？」

「えっ、プール？」

「うん、プールだよ」

「でも僕、水着ないし」  
そう、僕は水着なんか着る機会もないし、肌をそんなに露出するのは好まない

「じゃあ、私と一緒に買いにいこ」

明里お姉ちゃんは笑顔で僕に言う

明里お姉ちゃん、そんな笑顔で言われても

「僕、水着苦手なの」

「大丈夫だつて」

すると明里お姉ちゃんが手を掴み、強引に連れて行くところとする

てか手痛い

「わかった、わかったよ。行くから手離して」

「ありがとう」

明里お姉ちゃんは僕の手を離す

「じゃあ行こ」

「まだ、お店開いてないでしょ」

「あつ、そうだよね」

気づかないで来たんだ

僕は飽きれながらベツトから立ち上がる

すると着ていたワイシャツの下からパンツが見えそうになる

直ぐにワイシャツで足を隠す

「明里お姉ちゃん、着替えるから出てって」

「じゃあ、私が着替えさせる」

明里お姉ちゃんが手を動かして息を荒くしながら言う

「怖いよー、明里お姉ちゃん」

僕は明里お姉ちゃんから距離を取りながら動く

「逃げちゃダメだよ。茜ちゃん」

その声と共に明里お姉ちゃんが僕に抱きつく

僕はバランスを崩して床に倒れる

「ハアハア茜ちゃんの着替え」

明里お姉ちゃんがワイシャツのボタンに手を掛ける

「やつやめ、あ、か、ね、お姉ちゃん」

明里お姉ちゃんはワイシャツのボタンを外すと同時に、僕が気持ちよくなる蕾を押している

そのせいで力が入らなくなる

「ふふ、可愛いよー、茜ちゃんは」

「イヤーーーーー」

僕の叫び声は虚しく、誰の耳にも入らなかった

約15分が経ち、僕は私服に着替えさせられた

黒いショートパンツにワイシャツを着ている。

更にワイシャツの上にはこれまた黒いジャケットを着ている

「茜ちゃん、可愛いわよ」

「これ一様メンズなんだけど」

僕は頬を膨らませながら言う

すると明里お姉ちゃんの目が輝く

「茜ちゃんはやっぱ可愛いー」

また明里お姉ちゃんが抱きついて来る

「離して明里お姉ちゃん！」

僕達はその様なたわいもない話をしながら、食堂に向かって歩き出す

廊下は日曜日だから人がまったくいない

まあ、多分食堂にはいるのだろうが

すると廊下にある窓の外から声が聞こえる

「一、二、三、四、一、二、三、四」

これを繰り返している男女がいるのか？

僕は窓の外をしてみる

そこには軽ジャージ姿の汗をかいた男女15人ほどがランニングをしている

朝からご苦労様です

「茜ちゃん行くわよ」

気づいたら明里お姉ちゃんが結構前にいた

「あつ、待つてー」

僕は小走りになりながら明里お姉ちゃんに近づく

そうしてる内に食堂に着く

食堂に入ると同時に美味しそうな匂いが僕達を包み込む

そして、まあ予想どおり沢山の人が食堂にいた  
これが普通になったんだから恐ろしいよ。慣れは

僕達は食券を買い、おばちゃんに手渡す

おばちゃんは手際良く、受け取った食券を千切り、直ぐに料理を盛り付ける

ちなみに僕は『親子丼』で明里お姉ちゃんが『サンドイッチ』です

すると盛り付けが終わった様で、僕達はプレートを受け取ると適当な場所に座り食事を始める

「いただきます」

「いただきます」

僕に続いて明里お姉ちゃんが言い、僕は箸を握り、親子丼を口に入れる

すると口の中に卵と出し汁、鶏肉の美味しさが広がる

やっぱり、おいしー

「茜ちゃんアーン」

明里お姉ちゃんがそんな事を言い、僕は声がした方向を見る

そこには一口サイズになったサンドイッチを僕の口に向けている明里お姉ちゃんがいた

てっ、えっ

「茜ちゃん早くー」

早くってあれだよな。あねアーンだよな

「はーやーくー」

その声と同時に僕は良い事が頭に浮かぶ

「アーン」

「あっアーン」

明里お姉ちゃんがゆっくりと僕の口の中にサンドイッチを入れる  
そして僕は少しづつ口を閉める

すると明里お姉ちゃんの指が僕の口に挟まり、僕の舌に指が当たる  
「ふふ」

明里お姉ちゃんはやっくりと指を僕の口から抜き出し、自分の口に入れ舐める

「茜ちゃんたつら私の指まで食べて。美味しかった」  
明里お姉ちゃんは悪戯な笑顔で僕に言う

「うっう」

僕は恥ずかしくなり、体が暑くなる

「お返し」

小さな声で呟く

「えっなに茜ちゃん」

「お返し」

僕は箸に親子丼を掴み、明里お姉ちゃんの口の前まで運ぶ

「明里お姉ちゃんアーン」

「えっでも」

明里お姉ちゃんは動揺している



「アーン」

「うっ、アーン」

明里お姉ちゃんは赤くなりながらも親子丼を食べる

すると明里お姉ちゃんの口が止まり、箸が挟まった状況になる  
僕はゆつくりと箸を抜き、親子丼を食べる

あれ、これってかんせ

「キャッ」

僕は一瞬で身体の間々まで暑くなり気絶しかける

「茜ちゃんーん」

その声と共に僕は意識を手放す

なわけないよ

僕は直ぐに意識を完全にして明里お姉ちゃんを見様とするが見えない

体は動くのに顔が向かないよ

そうして僕達は食堂を出るまで、固まりながら9：30に学園の正  
門前に集合すると約束して僕は自分の部屋に戻る

するとそこには涼さんと咲お姉ちゃんがいた

「なんで？二人共いるんですか？」

「茜ちゃんにコレ渡したくて」

すると涼さんが、なんかのジュース缶を渡して来る

僕はジュース缶を受け取る

ジュース缶は冷たく、僕の手をジワジワと冷やす

「茜それ飲んでみて」

咲お姉ちゃんが藪から棒に言って来る

てか味くらい確認させてよ

僕はジュース缶の表を見ようとした時、二人が慌ててジュース缶を隠す

「味は見ちゃダメ」

「なんでですか？涼さん」

「いいから、茜」

その言葉と共に、咲お姉ちゃんがジュース缶のプルトップを開ける  
プルトップがジュース缶の口を開き、プチと音がした

「じゃあ茜飲んで」

僕は咲お姉ちゃんからジュース缶を貰い、諦めて飲む

ジュース缶が唇に当たる

それと同時に、ジュース缶から冷たさが唇に伝わり、口にジュースが入って来る

「んっ」

ジュースはしょっぱくもあり、酸っぱくもあり、甘かった  
ってなにコレ

僕は急いでジュース缶を口から外すと台所にあるコップで水を飲む

だが口の中にはまだあの奇妙な味が残っている  
「なにコレ!？」

すると涼さん達が笑ながら説明して来れる

「あはははは、茜、これは、その」

「醤油&砂糖+レモン味なんだ」

その言葉を聞いた時には僕はもう固まっていた

「あはははははは」

二人はゆっくりと部屋を出て行こうとする

「なに飲ませるのー」

僕は両腕を上げながら、怒る様に叫ぶ

二人は直ぐに扉を開けて部屋を出て行く

二人が出ていったと共に扉は軽く軋みながら閉まる

「なんだったんだよ!」

僕はそう言つとベットに倒れる様に横になると携帯を開いて時刻を確認する

「8：00時か」

時刻を確認すると携帯をしまい、目覚ましを9：15分に掛けて、ベットの上で座禅を組み始める

「じゃあ1時間ぐらいやるか」

そして僕は意識を手放す様に頭の中をクリアにする

それと共に周りの音や声が僕の耳に入って来る

だが音には反応せずにただ、ただ集中する

そうして僕は頭を無にしていると全身が軽くなつて来る

集中のしすぎでリミッターが外れたのだろうか

丁度その時、耳に目覚まし時計の音が入って来る

本はゆっくりと目を開けて目覚ましを切ると立ち上がり、体を伸ばす

するとぼきぼきと骨や関節が鳴るが僕は気に留める事もなく、部屋を出る

廊下は先程とはうって変わって五月蠅い程に沢山の人がいる

そうして僕は正門前に向かい歩き出す

廊下を歩いていると窓から部活をやっている人や、遊びでなのかコスプレをしている人もいる

僕は気づいていたが無視をしながら歩いていると正門前に着く

「明里お姉ちゃん」

正門前にはオシャレをした明里お姉ちゃんがいた

明里お姉ちゃんは赤をベースにスカート、ジャケットを着て、その中に白いワイシャツを着ている

服は明里お姉ちゃんにマッチしていて、まるで見るもの全てを魅力

する様だった

そして僕は明里お姉ちゃんに近づく

「茜ちゃん行こっか」

明里お姉ちゃんは笑顔で僕に手を差し出す

「うん」

僕は明里お姉ちゃんの手を握り、水着ショップへ向かう

水着ショップは僕達が行くプールの真横にあるらしい

僕は行った事がない為、くわしい場所までは把握出来てはいない

それにしても明里お姉ちゃんはよっぽど嬉しいのか、僕を引きずる様に歩いている

そうして水着ショップに着く

ショップ内は女性客が四分の三を閉めている

「茜ちゃん、私を選ぶから試着して」

「えっ！」

明里お姉ちゃんの急な発言にビックリして言葉を失う

「じゃあ、はいコレ」

明里お姉ちゃんはもう着ぐらい持って来ている

しかも全部女性物だった

「マジで」

「マジだよ」

「はい」

僕は明里お姉ちゃんの満面の笑みに立ち向かう事が出来なかった

明里お姉ちゃんから水着を受け取り、試着室に入りカーテンを閉める

試着室は1mぐらいの密室かんがある小さな部屋にカゴが置いてある

僕は服を脱ぎ、カゴに入れると一つの水着を試着する

「茜ちゃん、開けていい」

「いいですよ」

するとカーテンが開く

「可愛いー」

「そうですか？」

僕は水色のワンピースタイプの水着を着ている

しかも髪はストレートにしたせいか物凄く変な気分だった

「可愛いよー」

すると明里お姉ちゃんが僕の首に腕をまわす様に抱きついて来る

「ちよっ、はなし」

「じゃあ、新しいの着て」

「うん」

そして僕はビキニ、タンキニ、ホルターネックそしてスクール水着を着た

「うーんどれも可愛いんだくどなんかピンとこないんだよね。茜ちゃんは何がいい」

「そうだなー」

僕は自分が可愛いと思った水着を着てみる

「茜ちゃん、それが一番いい」

僕は水色と白の波打つ様な模様の入ったパレオ着た

「じゃあコレにします」

僕はもう一度試着室に入って服に着替えて水着を買う

「明里お姉ちゃん終わったよ」

「うん、じゃあ私の水着選んで」

「むっムリだよ。だって僕わからないし」

「いいから、いいから茜ちゃんが私に選んでくれるのが一番なんだから」

「うん」

そうして僕は明里お姉ちゃんの水着を選び方始める

うーんなにがいいかな？

僕は店内を物色する

すると一つの水着が僕の目に飛び込んで来る

それは明里お姉ちゃんと同じ赤いビキニを選んだ

「わかった、じゃあプール行こっか」

「うん」

そうして僕達はプールに入る

「チケットですか、それとも現金ですか？」

受け付けの人が笑顔で聞いて来る

すると明里お姉ちゃんは学園の教師手帳を出す

「わかりました。えーとお連れの可愛い方は」

可愛いって僕泣けて来るよ

「茜ちゃん、生徒手帳出して」

「はい」

僕は生徒手帳に携帯を出して、生徒手帳のアプリを開く

「はい、では右手にあります女子更衣室に向かって下さい」

「ちなみに僕はオトコです」

「なにを言ってるんですか」

僕は髪をストレートにするのはダメだと知った

そうして僕は僕みたいな人が入る更衣室に入りパレオに着替えてプールに出る

プールはTVなんかで見る様な大きな目のプールだ

そうして僕は明里お姉ちゃんを探し始める



すると二人ぐらゐの男に話掛けられている明里お姉ちゃんがいた  
「明里お姉ちゃん」

「おつ、君も可愛いね」

一人の男が僕の腕を掴んで来る

うざい

「離して下さい」

「そんな声も可愛いね」

するともう一人の男が投げ飛ばされる

「ぐっは」

「なにするだ！このアマ」

そして僕に掴んでいた男が明里お姉ちゃんを殴ろうとする

「っ」

僕は一瞬で男を地面に叩きつける

「な、なにが」

男は状況が理解出来ないのか固まっている

「僕の大切な明里お姉ちゃんに手を上げるな！」

僕は本気を出している訳ではない、勿論、怒る、キレると言った感情はない

ただ、明里お姉ちゃんが誰かに触られたり、誰かの物になるのが嫌だった

「あつ、てめえ」

男は懲りずに明里お姉ちゃんを殴ろうとする

「聞き分けがないんだな」

僕は一瞬だけ黒いオーラを纏わせる

すると男は腰を抜かして、その場に倒れる

「明里お姉ちゃんは僕のだ。お前なんか触れていい物ではない。消えろ！」

「ひっ」

男はその場から逃げる様に走っていく

「明里お姉ちゃん、大丈夫？」

「あつ、うん、大丈夫」

明里お姉ちゃんが頬を赤くしながらそう言う

「大丈夫だよね」

「うん、じゃあ入ろう」

そうして僕達はプールに入る

それと同時にプールに入っている人数が増える

300人ぐらいであろうか

その為か、僕達は余り動けなくなり抱きつく様な形になる

「ねえ、茜ちゃん」

「なんですか」

「さっきの言葉ってほんと」

明里お姉ちゃんが今にも消えそうな、か細い声で囁く

「少なくとも、明里お姉ちゃんは大切な人だよ」

「いいのかな」

「えっ」

なんで

「だって私はなにも出来なくて。それなのに茜の物だなんて」

「だからいいんだよ」

「えっ」

明里お姉ちゃんは予想してなかったのか困惑する

「だって何も出来ないから教えたいんだよ。それにだから僕は明里お姉ちゃんを守りたいと思えたんだよ」

「じゃあ証拠を見せて」

「うん」

僕はゆっくりと明里お姉ちゃんの口にキスをする

それは一瞬だった。が僕は明里お姉ちゃんの事がなんとなく解った気がした

「ありがとう」

明里お姉ちゃん、僕は僕の胸に抱きつきながら泣く

「僕こそ、ありがとう」

そうして明里お姉ちゃんを泣き止ませる

「じゃ、遊ば茜ちゃん」

「待つてよ」

そうして僕達はお互いの事を深く知った

恋人達の行方 (明里バージョン) (後書き)

だんだんと終わりに近づいて来ましたね。  
あと3章も本気でやっていきたいとおもっています。

## 恋人達の行方（涼バージョン）

神様星人との戦いから1週間が経った、ある日

つい、この前のようだが、そんな事はどうでもいい様な世間話だ

ちなみに季節は夏

普通ならば燦燦と太陽の光が、僕の肌に突き刺さり、肌の細胞を破壊するのだが、今ここは夏とは思えない

それはこの会話を聞けば解ると思うよ

「涼お姉ちゃん、待ってよー」

僕の前をゆっくりと綺麗なフォームで滑りながら、僕に優しく、そして丁寧に教えて来れる、涼お姉ちゃんがいる

「ほら、ちゃんと足で蹴る」

そう今、僕達はスケート場に来ていた

リンクに張ってある氷は、スケート靴に付けられたブレードと呼ばれる刃で、多少傷ついきながらも、光を反射している

その氷を溶かさないう様にする為なねか？クーラーが入っている

クーラーからの当たり前の様に冷たい空気が流れている

その冷たい空気は、僕の体をジワジワと冷たくする  
もはや冬と呼べるかな？

もう一度言つよ、季節は夏だ

そう夏なんだよ

スケート場<sup>こ</sup>じゃ、『夏』だなんて解らないよ

そして、まあ僕がスケートのプロを目指しているのであれば全くおかしくないのだが、僕はプロは遙か、スケート靴を履くのですら今日が初めてだ

すると

「ほら」

涼お姉ちゃんが僕に手を出して来た

「はいー」

僕は疲れきった声を出しながら、涼お姉ちゃんの手を脱ぎ

涼お姉ちゃんの手は暖かく、僕の手を癒して来れる

でも涼お姉ちゃんの教え方は解りやすいのだが、それを実践するのは難しいよ

これを当たり前の様に滑る、スケート選手はあり得ない

僕がそんな事よりも、もう一つ感があることがある

それは………何故、僕がスケート場に来ているかと言う事だ！

それを説明するには、朝からになるだれうか

――――朝――――

目覚まし時計のジリリリリと言う鉄と鉄が、ぶつかり合う音が僕の耳に響いて来る

それとは違い、僕を呼ぶ甘い声がある

何故だろうか？

一瞬で普通の朝では亡くなった気がする

すると耳に誰かの吐息が混じった様な、声が聞こえて来る

「茜ちゃん」

僕は目に力を入れ、ゆっくりと開く

すると眩すぎる光が目に飛び込んで来る

「茜ちゃん、おはよ」

それと僕の横に涼さんが

「なんで涼さんがいるんですか？」

流石に僕はもう動じる事すら亡くなっていた

それが不満なのか涼さんが頬を膨らませる

「茜ちゃん面白くないよー」

てっ本人は怒ってるつもりだろうけど、僕から見たら可愛いだけだよ

「えい」

その途端、涼さんが自分も羽織ってた布団を上投げて、その場から布団を亡くす

「何するんですかって、えっ」

一瞬、僕は頭がクリアになり、そして言葉を失う



そこには白い下着を付けた涼さんがいた  
その姿は僕を魅力し、そして一段と輝いていた  
ってそうじゃなくて

「なんて格好してるんですか」  
僕は顔を隠す様に横に向ける

「ハアハアそれは茜ちゃんよ」  
涼さんの息遣いが荒くなっていた  
「涼さん、怖いですよ」

「ハアハア茜ちゃんがイケナイのよ。ハアハアそんなワイシャツ一枚で」

僕は自分の格好を確認する

僕の確認はワイシャツ一枚にパンツを履いているだけだった  
その途端、僕の体の血流が早くなるのが解ると同時に、体がすごく熱くなる

「キャッ」  
僕は甲高い悲鳴を上げると、足を閉じてワイシャツで足を隠す様に下げる

「可愛いー」  
その声と共に、涼さんが僕の横から肩を腕で包む様に抱きついて来る  
「離して下さいよ」  
僕の肩にふつくらとした何かが当たる  
それと同時に、僕は一瞬でさっきの倍以上に熱くなる

「イヤ」

それと同時に涼さんが、僕のワイシャツに手を掛けてボタンを外し始める

「キャーーーーー」

そうして僕は涼さんにワイシャツを脱がされ、涼さんの服に着替えさせられた

「可愛いよー」

涼さんは僕を可愛いと言うが、流石にこの格好は恥ずかしいよ

僕の格好は黒の生地に白いラインをあしらったミニスカート、それに胸元と腰を露出したトップスを着せられた

「いやですよ」

「可愛いからいいじゃん」

すると涼さんのお腹からグウーと音がする

「あははは、お腹空いちやたから食堂行こ」

涼さんが僕の手を握りながら言う

「いいですけど、この格好のままでですか？」

僕はスカートの端を摘み、軽く上げながら言う

「当たり前だよ」

「マジですか？」

「マジだよ」

涼さんは笑顔を浮かべながら、僕に言う

「・・・・・・・・・・・・・・・・はい」

僕は涼さんの眩すぎる、満面の笑みに負けてしまった

「じゃっ行こ」

すると涼さんが僕の手を握る

僕の手には涼さんの温かさが優しく伝わって来る

「ちょっ」

僕は恥ずかしくなり、涼さんを止める

「なに？ 茜ちゃん」

「いや、あの手が」

僕はただどしくなりながらも言う

「ダメだった」

涼さんの顔が笑顔から、悲しそうな顔になる

それと同時に、僕の中に罪悪感が生まれる

そんな顔しないでよ

「ううん大丈夫だよ。いこ」

「うん」

僕は涼さんと一緒に部屋を出る

廊下は窓から照り当たる陽光が廊下いっぱい広がっている

そんな廊下には誰一人といない

しかも土、日はコレが当たり前なんだから恐ろしい

「茜ちゃん、なに考えてるの」

「いやー、見事にいないもんですから」

「そうねー」

僕達はシミジミそう思った

そうして僕達は誰もいない廊下を二人で歩いた

「茜ちゃん、さーなんで皆の事、お姉ちゃんって読んでのの？」

「一回、明里お姉ちゃんにも聞かれたんですが、読んでって言われたから」

すると涼さんの口が止まる

って呆れてる？のかな？

「そんなシンプルな理由とは」

ビンゴだったんだ

「そうですよ」

「なら、私も「いいですよ」」

僕は涼さんが言い終わる前に言う

「じゃあ」

「はい、涼お姉ちゃん」

そう言うとき涼お姉ちゃんの顔が、崩れた笑顔になる

「涼お姉ちゃん大丈夫？」

「あっうん、行こ」

そうすると僕は食堂の扉の前に着いた

だが扉の前にいるだけで解る程、静かすぎる  
と言うか誰もいない

「入る茜ちゃん」

「うん」

僕は食堂に入る

予想してたどおり、食堂には誰もいない  
だが何時の様に美味しそうな匂いが僕達を包み込んでいる

「食券買お」

僕は食券を買い始める

「僕は『和食定食』にします、けど涼お姉ちゃんは何にするんですか？」

「私は『日替わり定食』にするわ。あとそれと敬語直してよ」  
涼お姉ちゃんは僕の口に指先を当て、少しだけ色づく言う

すると僕の体にドキッと衝動が走る

それは嬉しいのか恥ずかしいのか解らない感情だった

「うん、涼お姉ちゃん」

そうして僕は嬉しさを止めながら、笑顔で食券を買い、おばちゃんに渡す

「おや、今日はそっちの可愛い子かい？あんたは彼女が多いね」  
おばちゃんは涼お姉ちゃんの事を彼女？と思っているのかな

僕からしたら涼お姉ちゃんは彼女と言うより………なんだ  
る？

「はい」

って涼お姉ちゃんは、すぐに返事してるし

まっいつか

「どうも」

僕達はプレートを受け取って、適当な場所に座る

「では、いただきます」

僕達はハモリながら、手の平と平を付けて頭を下げる

そうして僕は箸を持ち、味噌汁を飲む

すると口の中いっぱい、味噌の旨味と香ばしさが広がる

「やっぱ美味しい」

「アーン」

すると涼お姉ちゃんが箸で、一口サイズに分けた生姜焼きを持って、  
僕の口に向けて来る

「えっ」

「いいからアーン」

涼お姉ちゃんは眩しすぎる笑顔で微笑みながら、もう一度僕の口に  
生姜焼きを近づけて来る

「うう、ア、アーン」

僕は小さく口を開けて、涼お姉ちゃんが入れて来れるのを待つ

「アーン」

涼お姉ちゃんは焦らしているのかゆっくり、箸を僕の口に入れていく

恥ずかしいよー

すると顔が燃える、とは違う様に蒸し熱くなっていく

「茜ちゃん、口閉じて」

僕はゆっくりと口を閉じて、箸ごと生姜焼きを食べる

すると口の中に生姜焼きの美味しさが広がっているはずだが、恥ずかしさの余り、味を感じる事が出来なかった

「可愛いよ、茜ちゃん」

恥ずかしいすぎるよ

僕がそう思っていると、涼お姉ちゃんが僕が加えた箸を抜いていく  
すると唇に軽く摩擦が掛かりながらも、唾液が箸と唇の間に入り摩擦を無くし、スーと抜けていく

「そんなに真剣になってる茜ちゃんも可愛いよ」

悪戯そんな笑顔を浮かべながら涼お姉ちゃんは僕を見ている

「恥ずかしいよー」

僕は小さな声で恥ずかしそうに言う

すると涼お姉ちゃんは、その感じも可愛かったのか更に悪戯そうな笑顔になる

「あむ」

涼お姉ちゃんがそんな声をあげると僕が加えた箸を自分の口に入れる

えっ、なんで？

僕がそんな事を思っていると、涼お姉ちゃんの口から更にすごい音が聞こえる

「くちゅ、くちゅ、ちゅっぱ」

涼お姉ちゃんは箸を舌で舐め回し、口から外す

すると涼お姉ちゃんの口と箸に糸が張っている

だが僕はそんな事に気づく間もなく、頭からポプッと音がする

そんな変な音がしたと共に、僕の体は蒸された様に熱くなり、意識が遠のいていく

なんだろ。前の僕だったら熱くなるだけだったのに僕はうつすらとした意識の中、そんな事を浮かべた

あつダメかな

すると僕の意識は完全に吹き飛ぶ

血管が体全てを駆け抜ける様に血を巡らせ、体を蒸す様、そして意識を戻し、また遠のける様に血が循環させられている

こんなにも体が熱くなるのは始めてだ  
だけど、もう目を

僕は意識がある内に目を開く様に力を入れる  
すると目の中に眩い光とは違う何かが入って来る

それは優しく、暖かく僕を見ていた

「涼お姉ちゃん」



僕はゆつくりと口を開け言った

「大丈夫？ 茜ちゃん

そう、そこは部屋で、そして涼お姉ちゃんがいた

「うん」

すると涼お姉ちゃんは笑顔で僕を抱きしめて来れた

「大丈夫だよ。涼お姉ちゃん」

「よかったー」

そうして僕はベットを立ち上がろうとする

だが足は動くものの床に付いた瞬間に足は纏れ、涼お姉ちゃんに抱きつき様に倒れる

「茜ちゃん、大丈夫？ だよね」

涼お姉ちゃんは倒れた僕を抱きしめながら言う

「うん、多分立ちくらみだろうし」

僕は涼お姉ちゃんから離れ、立ち上がろうとするが動かない

「涼お姉ちゃん離して」

「あと5分だけお願い」

涼お姉ちゃんはまるで大事にしている物が壊れない様に、寂しさを隠す様に

「うん」

僕は涼お姉ちゃんに抱きつかれるのは不思議と嬉しかった

すると涼お姉ちゃんが僕を更に強く抱きしめる

僕は不思議な安心感に包まれた

そうして5分が経ち、涼お姉ちゃんは僕から離れて、あるチラシを

見せて来た

チラシには『スケート』と書かれている

まあ、僕には一切関係ないと言える言葉だった

「で、スケートが何？」

僕は思った事を素直に言う

「行くの」

えーと

「何処に？」

「スケートに」

「

「私と茜ちゃんが」

「.....マジ」

僕は一瞬言葉が詰まる

「本気だよ、レッツゴー」<sup>マジ</sup>

涼お姉ちゃんは僕の手を握り、部屋を出様とする

「涼お姉ちゃん、僕スケートなんかやった事ないよ」

涼お姉ちゃんは僕の言葉に軽く悩むが直ぐに答えが出た様だ

「うーん、じゃあ私が教えてあげるから」

「なら」

僕は一瞬心が揺らぐが行く事に決めた

「じゃあレッツゴー」

そして涼お姉ちゃんに連れられてスケート場に移動する

スケート場はホール型の建物で50mぐらいの大きさだった  
入り口はTVやアニメなんかで見た事がある様な、普通と言えるだ  
ろう、入り口だった

「茜ちゃん入る」

「うん」

涼お姉ちゃんが僕の手を握り、僕は涼お姉ちゃんに連れられて、ス  
ケート場の中に入る

スケート場の中に入ると、先ず受け付けが見える

受け付けすらも、よくTVなんなどで見る様な感じるに作られている

「じゃあ私受け付けやって来るね」

「うん」

涼お姉ちゃんは受け付けの前に行って話を始める

涼お姉ちゃんが生徒手帳を出す

多分、身分を証明する為かな？

すると受け付けをやっている人が驚きながら声を出す

「えっ！あつすみません。ではコレでレンタルが出来ます」

受け付けの人は涼お姉ちゃんにチケットを2枚渡す

「茜ちゃん入る」

涼お姉ちゃんはスケート場にはいる為の扉を開け様とする

「涼お姉ちゃん待つてよー」

僕は急いで涼お姉ちゃんを追ってスケート場に入る

するとスケートリンクとそれを囲む様に硝子張りの壁が抑えている

そして体をジワジワと襲う様に冷気がクーラーから流れている

「茜ちゃんスケート靴何cmにするの？」

涼お姉ちゃんがレンタルコーナーで僕に聞いて来る

「24だよ」

僕は足にちゃんとフィットする為1cm小さく言う

すると涼お姉ちゃんがチケットを使ってスケート靴を借りて来てくれた

靴の底には靴と同じ長さの、ブレードと呼ばれる刃が付いている  
これがフィギュアスケート様の靴だろうか？

僕は余り解らないまま靴を履く

すると向こうずねぐらいまでに締め付けがある

「立ちづらいよぉー」

靴にブレードが付いている為、僕は立てないし多分歩けないだろう

「茜ちゃん、はい」

涼お姉ちゃんはブレードで上手く立ちながら、立ちにくそうな僕に  
手を出してくれた

「ありがとう」

僕は涼お姉ちゃんの手を握る

すると僕の手で涼お姉ちゃんの暖かさが伝わって来る

そのまま僕はバランスを取りながら、涼お姉ちゃんに引っ張られて  
立ち上がる

すると靴の底に食い込む様にブレードが押し、足に微妙な痛みがある  
「茜ちゃんリンク入ろう」

「うん」

そんな事は気にしないでリンクに入る

リンクには多少傷付いているが、ライトから出された光を反射している

だがそんな事を考えている暇すらなく、僕は転びそうになる

それはスケートリンクで立っているには壁を掴むか、滑る以外は絶対に初心者である僕には無理だ

そして僕は滑れる訳でもなく、涼お姉ちゃんに抱きつく様に転ぶ  
「うつわ」

「キャッ」

僕は涼お姉ちゃんを壁に押し付ける様に倒れ、顔は涼お姉ちゃんの顔のそばにある

「ごめんなさい」

僕の心拍数は解るぐらいに上昇する

僕はすぐに離れ様とするが、涼お姉ちゃんに抱き締められて動けない

「涼お姉ちゃん」

「茜ちゃん」

僕達は目が合う

次の瞬間、僕達は理性、衝動の赴くままにキスをする

唇には涼お姉ちゃんの味、熱さが広がる

一回・・・・・・・・二回と

だけど不思議と心が安心する

なんだろう？この気持ち

すると、ある気持ちが溢れ出す様に心に溜まる

ああ、そっか解った。僕は涼お姉ちゃんを誰にも渡したくないんだ

そう僕は涼お姉ちゃんを欲していた

「涼お姉ちゃん」

僕はゆっくりと

「茜ちゃん」

そして心のままに伝える

「僕、涼お姉ちゃんの事が好きみたい」

「私もだよ」

そして僕は唇を重ねる

さつきより深く、さつきよりも強く

そうして僕はゆっくりと唇を離す

すると唇と唇を結ぶ様に糸が貼る

「ふふ、ありがとう」

僕は気づかない内に笑顔になっていた

「茜ちゃんじゃあ教えわよ」

涼お姉ちゃんリンクを美しく、そして綺麗に滑りながら僕に言った

「待ってよおー」

そうして僕達の恋は始まった

## 恋人達の行方（涼バージョン）（後書き）

いやー、気付けばあと2章で終わりですね。  
取り合えず頑張ります。

## 恋人達の行方（咲バージョン）

事は咲お姉ちゃんのこんな一言から始まった

「茜！デートしよ」

咲お姉ちゃんは思いつき？なのか僕をからかう為の遊びなのか、まあ同とでも考えられた

「なんで急にデートなの？」

僕の疑問じみた発言に咲お姉ちゃんは、自信満々に口を開き喋り出す

「なんでってデートしたいからよ」

咲お姉ちゃん、そんな理由でなんだ

僕は何故、咲お姉ちゃんがこんな事を言い出したか考えた  
するとほんの、ほんのと言っても2時間前ぐらいに遡る

ちなみに今はAM8:00時

つまり2時間前はまだ眠っていた

—————2時間前—————

僕は大気中に漂っているジメジメとした暑さにより目覚め様としていた

なにも考えないで、僕は転がるよりに寝返りをうつ  
すると普通なら当たるはずのない空間で誰かに当たる

「うにゃ」

ん、誰？

僕はその誰かに向かって手を伸ばし、そして握る



手には湿った様で、少しだけ暖かさを感じる  
暖かさは僕の手を包む様に伝わる

すると誰から変な声が出る

「あつ、いいや」

そんな変な声に、僕の脳は痛みが走る様に完全に起動する

誰？誰！誰

僕の頭の中は、その言葉でいっぱいになり、僕はゆっくりと頭を落ち着かせる

そうだ！コレは僕の夢なんだ

僕は『夢』と言う単語に任せ、ゆっくりと目を開ける

そこには咲お姉ちゃんがいた

「あつ」

僕は軽く後悔した

なんで、あの時寝返りうつちゃたんだろー

僕の後悔の理由、それはコレだ

僕の手、つまり寝返りをした時に僕が伸ばした手は、咲お姉ちゃんの胸を触り握っていた

「あはははは、これは、その」

僕は笑うしかない様な状況になり果てていた

「茜ったら私が欲しいの？」

咲お姉ちゃんは悪戯な笑みを浮かべながら喋り出す

「ハアハア私にもっと、ハアもっと刺激をちょうだい」

咲お姉ちゃんが言葉を言い終わると身体中が血、激しく僕の血管を駆け抜け、僕の体を熱くする

「茜、顔赤いわよ」

すると咲お姉ちゃんが僕の頬を舌を出して、少し色っぽく舐める  
咲お姉ちゃんの舌は生暖かく、ザラザラとした感触が頬に伝わる  
「ヒヤッ」

僕は咲お姉ちゃんの舌が当たると共に甲高い声を出しながら、咲お姉ちゃんの胸を握っていた手を離して、体をベットの奥に移動させようとする

だが体は動くが手は動かない

しかも更に強く、手に咲お姉ちゃんの胸の湿った感じと、暖かさが伝わって来る

それは僕の心拍数を解るぐらいに大きく上げる

僕は直ぐに手の方向を見る

そこには僕の手を掴み、自分の胸に強く押し当ててる咲お姉ちゃんがいる

すると咲お姉ちゃんが優しく、色っぽく、そして少し嬉しそうに言う

「いいよ。茜なら触っても」

そんな言葉に、僕の心拍数が僕を締め付けるぐらいまで上がる

その締め付けは痛い様で嬉しい様に僕を締め付ける

なんだろ？この感じ

僕は気づく事なく固まる

「茜、ふふ」

そんな事を言うと、咲お姉ちゃんは僕の顔に近づいて来る  
咲お姉ちゃんが近づく度に、心拍数が僕を壊す様に上がり続ける

「いただきます」

「えっ！」

顔に近づいて来た咲お姉ちゃんが僕の耳に甘噛みをする様に噛み付く  
「ちょっ」

僕の耳には暖かい様で、咲お姉ちゃんの歯が耳に少し刺さり、嬉しい様な痛みを感じる

そして僕の口からは言葉ですらない声が出て、心拍数が体を動かなくする程に締め付け、身体中の血管が張り裂けるぐらいに血を循環させて、僕の意識は遠のいていく

目は霞、体には力すら入らない

って、ダメーーーーー

僕はなんとか意識を止める

「ハアハア、何とか生還」

「大丈夫だった？茜」

咲お姉ちゃんは僕を心拍してるのだろうが、顔はまだ悪戯な笑顔だよでも、その笑顔が僕を魅力していく

「大丈夫だけど、なんで咲お姉ちゃんが此処にいるの？」

「茜が食べたかったから」

咲お姉ちゃんの言葉に僕の思考回路がおかしくなる

えっ、何なの、食べるってはっ

「食べるって何!？」

僕は咲お姉ちゃんの言葉によつて僕は状況が理解出来なくなる

「食べるって、茜の全部をだよ」

たっ食べるって、しかも全部

すると咲お姉ちゃんが僕の耳から離れる

「あっ、ああん」

僕は咲お姉ちゃんが耳から離れる事によつて、変な声が口から漏れる

「可愛い」

咲お姉ちゃんは僕で遊ぶ様に、次はアゴの下から首筋にかけて指で優しくなぞる

すると不思議と気持ち良くなる

これは、これでいいかも

僕の体は一時的だがストップして、この気持ち良さを味わう

つてそうじゃなくて！

「やめてよ！咲お姉ちゃん！」

僕は咲お姉ちゃんの指を離そうとするが、やはり離れない

「こんなに気持ち良くなってるのに？」

「だからってダメ！」

「じゃあ、私にもご奉仕してよ」

僕は咲お姉ちゃんの言葉にまた固まる

ご奉仕つて

「ななななな、何したらいいの？」

固まっているが、僕はもう諦めていた

「そうねー」

咲お姉ちゃん是指を何回も、僕のアゴの下と首筋を指でゆっくりとなぞりながら考え出す

「じゃあ、食堂で口移しして」

「口移し？」

僕は『口移し』と言う単語を知らずに、疑問系で返してしまう  
すると咲お姉ちゃんの顔から、またしても悪戯な笑みが浮かぶ

「食堂に着いたら教えてあげるからレッツゴー」そう言つと

咲お姉ちゃんは僕の手を握る

すると手には咲お姉ちゃんの暖かさが伝わって来る

そして僕は手を握れたまま、食堂に向かって歩き出す

「茜つて私がない時は何してるの？」

咲お姉ちゃんが唐突に聞いて来る

僕は窓に手を当てて、外を見ながら考える

「えっと座禅組んだり、筋トレしたりだよ」

「そーなんだ」

すると窓から見える所に恋人らしき二人の男女が歩いていた

「茜、あれって恋人かな？」

「多分そうだね。デートに行くんじゃないかな？」  
すると咲お姉ちゃんが少しだけ黙り込む

「咲お姉ちゃん？」

咲お姉ちゃんは僕の言葉に反応する事なく、約5分間、黙り込んでまた歩き出した

今思えばこの一言から始まったのかもしれない

そうして僕は食堂の前に着いた

そこからでも解るぐらいに美味しそうな匂いが流れている

そして食堂に入ると、美味しそうな匂いが僕達を包み込む

そうして僕達は食券を買って、流れ作業の様におばちゃんに食券を渡して、受け取る

ちなみに僕は『サンドイッチ』で咲お姉ちゃんが『ケーキ』  
そして僕達は適当な場所に座り、朝食を食べ始める

「いただきます」

すると僕の頭にある言葉が浮かび上がる  
そう、それは『口移し』だ

「でっ、咲お姉ちゃん『口移し』つつ何？」

咲お姉ちゃんは悪戯を超えて、優しく、楽しそうな笑顔になる

「じゃあ、私がお手本やるから、やってね」

「うん」

すると咲お姉ちゃんが、一つのサンドイッチを手にとって、自分の口に入れる

「えっ」

咲お姉ちゃんがサンドイッチを口に入れたまま、僕の口にキスをしてくる

咲お姉ちゃんの唇は柔らかく、そして優しく僕の唇を包んでくれた

「んう」

すると咲お姉ちゃんの口から、僕の口にサンドイッチを入れてくる

サンドイッチは咲お姉ちゃんの唾液で軽く濡れ、咲お姉ちゃんの味？がした

僕はサンドイッチを軽く噛んで、味わいながら食べる

咲お姉ちゃんが僕の口から、口を外す

すると咲お姉ちゃんの唇と僕の口を繋ぐ様に白い唾液が糸を張る

「なに？コレ」

僕は状況を理解出来ずに頭の中がパンクしそうになる

なに、なに！、なに？

そんな言葉が僕の頭を支配する

「これが『口移し』だよ」

咲お姉ちゃんは笑いながら、唇に張った糸を指で巻いて、口に指ごと入れる

「チュッパ、じゃあ茜もやって」

「無理、ムリ、むりだよ」

僕は状況の理解は辞めて、咲お姉ちゃんとの会話に集中する  
「なんで？」

僕の否定に咲お姉ちゃんは不思議そうに聞いて来る  
だが顔は先ほどと同じ笑顔だ

多分、解ってたな

「じゃあ私がやってあげる」

咲お姉ちゃんはまたサンドイッチをかじろうとする

「ダメ！」

僕は咲お姉ちゃんからサンドイッチを取って、自分の手に持つ

「ダメだよ」

「私がダメなら茜がやって」

咲お姉ちゃんが僕の体に近づいて、涙目で僕に言うて来る

卑怯だよ

「あむ」

僕はサンドイッチをかじる

すると口の中にパンのほんのりとしたバターの味と、挟まっている  
ハムとマヨネーズの味が広がる

「次は2回ぐらい噛んで」

咲お姉ちゃんが僕に注文してくる

僕は咲お姉ちゃんに従って2回噛む

「じゃあ来て」

咲お姉ちゃんが目を粒って、僕の方を見る

「うん」

僕はゆっくりと頷くて咲お姉ちゃんの唇に優しく触れる



すると咲お姉ちゃんが僕を力いっぱい抱き締める

咲お姉ちゃんが抱き締めている所は痛い。僕は無視してサンドイッチを咲お姉ちゃんの口に入れる

すると僕の中が嬉しさと咲お姉ちゃん。でいっぱいになった

そうして僕達は朝食を済ませると部屋に戻る

部屋に戻った時には時刻はAM7:50分に差し掛かろうとしていた

「茜、私どうだった？」

僕はビクと体が飛び跳ねる

「どうだったって」

「私、美味しかった？」

「美味しかったかな？」

僕は流石に疑問系になる

「そうなんだ。嬉しい」

すると咲お姉ちゃんが僕の腰に腕を回す様に抱きつく

「そう言えば、さっきの恋人いいな」

「なにが？」

僕は咲お姉ちゃんの急な話の転換に着いていけなくなってくる

「なにがって」

すると咲お姉ちゃんが少しだけ黙り込む

「そっだ！茜！デートしよ」

咲お姉ちゃんは思いつき？なのか僕をからかう為の遊びなのか、まあ同とでも考えられた

「なんで急にデートなの？」

僕の疑問じみた発言に咲お姉ちゃんは、自信満々に口を開き喋り出す

「なんでってデートしたいからよ」

咲お姉ちゃん、そんな理由でなんだ

「でも、何処いくの？」

僕は反乱すらしないで話を進める

「そんなの決まってるじゃない、買い物よ」

「それは服と言う事でいいの？」

「さっしが早いわね。じゃあ行こ」

咲お姉ちゃんが僕の手を握って、また部屋を出ようとす

「まだお店開いてないでしょ」

「あつ、そうだったー」

よく思うんだけど、お姉ちゃん達って「それ以上はダメだよ」

咲お姉ちゃんが僕の唇に指を当てながら喋る

咲お姉ちゃんの指は僕の唇に軽く埋まり、少しずらすば口の中に入る所にある

「じゃあ、少しだけ遊ぼ」

すると咲お姉ちゃんはチエスを出して来た

「チエスやるの？」

「そうよ、私得意なのよね」

そうして僕は駒を準備して始める

――――20分後――――

「僕の勝ちだね」

僕は軽くにやつきながら駒を指で握りながらいじる

「うう、もう一回」

「こんな事あり得ないって目してるね。咲お姉ちゃん  
僕はもう一度盤面を見る

そこには白い駒がなく、黒い駒だけが存在していた

ちなみに僕は黒を使っていた

「早く」

すると咲お姉ちゃんが盤面を崩して直ぐに駒をセットする  
そうしてもう一度試合を開始する

1回、2回と続けてやる事、20回  
だが全ての試合で僕はパーフェクトゲームを収めた

咲お姉ちゃんはパーフェクトゲームで負け続けたせいか「もうチエ  
スなんか、やらない」

と言っていた

僕は携帯を開いて時刻を確認する  
携帯にはAM9:50と表示されている

「咲お姉ちゃん、買い物もう行けるよ」

僕は落ち込んでいる咲お姉ちゃんの肩をさすりながら言う

「行こ！」

咲お姉ちゃんはチェスをその場に置いたまま、服屋に向かって歩き出す

多分、チェスはもう一瞬やらないつもりだろう

そうして僕はバス停まで来た

何故、バス停に来たかと言うと、僕達が向かっている服屋は学園とは1kmぐらい離れている為、バスに乗らないと絶対に、と言う訳ではないがバスに乗った方が早い

するとバスが来る

「茜来たわよ」

咲お姉ちゃんは妙に楽しそうに言っ て来る

「わかるよ」

そんな会話をしているとバスが止まり、扉が開く  
前扉からは2人程の人が出る

そうして僕はバスの中に乗り込む

バスの中は椅子は全て埋まっているものの、立つスペースは充分にある

僕はつり革に捕まる

するとバスの扉な閉まり、バスがゆっくりと進め始める

「茜って筋トレ以外に興味ないの？」

「唐突だね。咲お姉ちゃん」

僕は現状をそのまま返す

すると咲お姉ちゃんが微妙に考え始める

そうして咲お姉ちゃんは思い付いた様に喋り出す

「そうね。で趣味ないの？」

咲お姉ちゃん、どれだけ自己中なんだよ

「一樣、料理かな」

僕の言葉に咲お姉ちゃんは「だから美味しいんだ」と納得していた

すると次のバス停に着き、扉が開き沢山の人が入ってくる  
って多いよ！

すると沢山の人の余り、僕は咲お姉ちゃんを壁に押し倒す様な形になる

周りから見たら、咲お姉ちゃんを追いやつて、腕で進路をさいぎっている様に見えるだろう

そんな僕達を無視する様にバスは進み出す

「茜、ダメよ。ここはバスの中なんだから」

咲お姉ちゃんは頬を赤くしながら僕に言ってくる

咲お姉ちゃん、顔は可愛いけど言ってる事はめちゃくちゃだよ

「なに言ってるね。咲お姉ちゃん」

僕は咲お姉ちゃんの話に、冷静に返す

「冷たいよおー。よしなら」

咲お姉ちゃんは僕には検討の付かない発言をしてくる

「えっ、ちよっ」

すると咲お姉ちゃんが急に僕の胸に向かって指をなぞらせて来る  
僕は動けない為、咲お姉ちゃんを止める事が出来ない

「ちよつ、やつやめて」

「可愛いー、でも大きな声出したら皆にバレちゃうよ」

咲お姉ちゃんは悪戯な笑みを浮かべながら言う

「ハアハア、咲お姉ちゃんのひつ、卑怯者ハアハア」

僕は息を荒くしながら、咲お姉ちゃんに何とか反論する

「そんな事言つてると、もっとやつちゃうよ」

僕は咲お姉ちゃんの攻撃を耐えながら、やっと目的のバス停に着いた

そうして僕達はバスから降りる

「ハアハア」

僕はバス停にある椅子に、倒れる様に座り込む

「茜、大丈夫？」

咲お姉ちゃんが心配そうに聞いて来る

「そう思ふなら、あんなことお遣らないでよね」

「いいじゃん」

咲お姉ちゃん、酷すぎるよ

「はい」

すると咲お姉ちゃんが座ってる僕に向かって、手を差し出して来た

「えっ」

「えっ、じゃないわよ」

「あっ、うん」

僕はタジタジになりながら、咲お姉ちゃんの手を握り、立ち上がり

服屋に向かって歩き出す

手には咲お姉ちゃんの暖かさが伝わって来る

僕は咲お姉ちゃんの、さっきの事なんか忘れて、嬉しさでいっぱいになる

そうして歩いているうちに服屋に着いた

服屋、服屋と言ったら少し小さなイメージだが、この服屋はファッションショップと言う感じの広さだった

「茜入るよ」

「待ってよ」

僕は咲お姉ちゃんを追う様に服屋に入る

服屋は試着室が3つほどあり、1000着以上の服が並んでいる

「茜、私が選んだあげるから着て」

「うん」

すると咲お姉ちゃんが服を物色し始める

そうして5分ぐらいすると咲お姉ちゃんが服を持って来た

「はい、じゃあコレ着て」

僕は少し嫌な予感がするが、気にせずに試着室に入る

「やっぱり」

静かに僕は呟いた

そうして僕は咲お姉ちゃんに渡された服を着る

5分程度で着替えが済む

「茜ー開けるわよ」

「えっ！」

すると咲お姉ちゃんの声と共に試着室に掛かっているカーテンが開く

「可愛いー」

「そう？」

僕の服は着物だ

夏祭りの時に女性が着ている様な本当の『着物』だ

しかも帯はちゃんと巻いてあり、そして今時なミニスカートタイプの着物だよ

足は大量に露出されている

僕はくるりと体を回すと咲お姉ちゃんに話し掛ける

「咲お姉ちゃんは何にするの？」

「探してくるから着物<sup>それ</sup>先に買っていて」

「わかった」

すると咲お姉ちゃんは服を選びに行く

「あのー、これお願いします」

僕は店員さんを読んで会計を済ませる

「着物って高いんだな」

僕が買った着物は10万円もした

「茜ー、選んだから来て」



咲お姉ちゃんは服を選び終わった様で僕を読んで来る

「はい」

僕は咲お姉ちゃんの元へ小走りしながら向かう

「じゃあ」

「えっ？」

すると咲お姉ちゃんが僕も連れて試着室に入る

「なに？なに！」

僕は理解出来なくなる

「いいから、私着物、着た事ないから教えてよ」

咲お姉ちゃんの手には僕のと色違いの着物がある

「ムリだよ」

「問答無用だよ」

咲お姉ちゃんは僕の目の前で服を脱ぎ出す

「ちよっ！」

僕は目をそらす

「ふふ、可愛いー」

すると咲お姉ちゃんは下着だけになり、僕に抱きついて来る

「なに」

「茜と私って付き合ってるんだよね」

「多分？」

僕は曖昧な答えしか返せなかった

すると僕の中に何かが生まれる

「そんな曖昧に話さないで！」

咲お姉ちゃんは怒る様に怒鳴る

「証拠をちょうだい」

咲お姉ちゃんは求める様に目を瞑る

「うん」

僕は自分の意思で、優しく、ゆっくりと咲お姉ちゃんの唇に触れる  
咲お姉ちゃんの唇は柔らかく僕を包み込んでくれた

「茜なんで泣いてるの？」

「えっ」

すると僕の瞳から涙が零れる

「僕、咲お姉ちゃんが欲しかったんだ」

僕は自分をさらけ出す

「でも、沢山殺して、そんなやつが幸せでいて良いはずな言  
い聞かせて、でももう我慢出来ないよ！。僕、咲お姉ちゃんの事  
が心から好きなんだ」

すると咲お姉ちゃんの目からも涙が溢れる

「嬉しい」

「今更だけど付き合ってください」

「はい」

そして僕達は唇を交わした

これから僕達は二人で生きていく

恋人達の行方（咲バージョン）（後書き）

気付けば、あと1話ですね。

最後まで気を抜かないで頑張ります。

あと多分、土・日には出来ると思います。

## 恋人達の行方、夜の学校で肝試し 1（ハーレムバージョン）

僕は深夜、まあ、簡単に言えば夜、PM11:00時の学校の廊下に来ていた

そして僕の耳には五月蠅い程の悲鳴、とは違うが悲鳴みたいなのが入って来る

悲鳴は廊下全体に響き渡り、僕の鼓膜に「ってるさい!!」

僕は流石にその五月蠅さにイラついて叫ぶ

イラついている元凶は

「茜ちゃんは怖くないのー」

「そうだよ」

「女の子は怖いんだよ」

そうお姉ちゃん達だ

お姉ちゃん達は軽く涙目になりながら言ってくるが僕は

「怖い以前に五月蠅いよ」

と一刀両断にする

それに明里お姉ちゃん以外はREALとかGANTZやってるから、いくら夜でも大丈夫でしょ

やっぱ、私服と戦闘服じゃ違う感じなのかな？

そんな事はさておき、何故、僕がこんな事になったかと言うと4時間前ぐらいに遡るかな？

――――4時間前――――

僕の部屋にはピンと張り詰めた何かが、部屋の空気を凍結させている

そんな部屋の中、僕は一人で目を閉じ、座禅を組んでいた  
体の力は抜け、目には暗闇と言える物が写っている  
そして気と吸血鬼星人の力が体全体に駆け巡っている

するとセツトしていた目覚まし時計が部屋に鳴り響く

僕はゆっくりと目を開き、周りを見る

目には暗闇を見ていた為か、部屋の灯りが痛い程に眩しく突き刺さる

「時間か」

携帯を取り、目覚ましを切ると僕は立ち上がる  
すると固まった関節が軋み、音が鳴り響く

そんな事は気にしないで僕は食堂に向かって歩き出す

扉を開け廊下に出るが、廊下には全く人がいない  
音がない、と言ったら嘘になるが廊下からは音がない

聞こえる音は全てグラウンドからの音だ  
多分、部活の人がやってるんだろうか

「いつも通りだよね」

僕はそう流すと廊下を歩き出す

廊下の窓から涼しげな風と、まだ太陽の光が射し込んでいる  
こう言う所は夏らしいんだけどな

そうして僕は夏を感じながら歩いていると必然的に食堂の前まで着  
いた

食堂の自動扉からは美味しそうな匂いが流れている

思ったら、食堂ってこんな感じだったけ？

僕は久しぶりに疑問を抱くが、気に留める事もなく、食堂に入る

自動扉が開き、食堂に入ると美味しそうな匂いが僕を包み込むと同時  
に、沢山の人が席に座っているのが目に入ってくる

そして後ろでは開いた自動扉が閉まるモーター音が聞こえる

「茜ー」

「ん？」

僕は声が聞こえた方向に体ごと動かして見てみる

やっぱ戦闘の動きって、体に染み付くんだなー

そんな事を考えながら向いてみると、そこにはお姉ちゃん達がいた  
「なに？ 咲お姉ちゃん？」

「一緒に食べよ」

咲お姉ちゃんは僕を溶かす様な笑顔で言ってくる

「茜ちゃん、ここ座って」

続け様に涼お姉ちゃんが隣の席を指差しながら言ってくる

ちなみに涼さんから涼お姉ちゃんになったのは昨日、涼お姉ちゃんに言われたからだよ

「茜ちゃんは私の横だよ」

涼お姉ちゃんとは反対側に座っている明里お姉ちゃんが笑顔で言ってくる

すると二人が口論を始める

「神功先生は先生何ですか、生徒とそんな親しみ深くない方が良いと思いますよ」

涼お姉ちゃんが痛い所を突いて来る

「いいえ、私は茜ちゃんの面倒を見る様に頼まれてるので、むしろ親しみ深すぎる方がいいんですよ」

明里お姉ちゃんも正論で返す

でも

「僕、買ってくるからジャンケンで決めといてね。咲お姉ちゃん、えっとお願いね」

僕は長話は避けたいため、逃げる様に笑顔で咲お姉ちゃんに頼んで食券を買いに行く

「うん」

咲お姉ちゃんは笑顔で言ってくれた

そうして僕は食券を買う

ちなみに 買ったのは『生姜焼き定食』だ

僕はそのまま流れ作業の様に、買った食券をおばちゃんに渡す  
「あんたはよくモテるんだねー」  
急におばちゃんが意味不明な事を言ってくる

が直ぐに理由と言うか、何故そんな事を言ったのかがわかった  
それはお姉ちゃん達のジャンケンがすぐ五月蠅いからだ

しかも「茜ちゃんは私の横」と大きく言ってるからだ  
これを聞けば、おばちゃんが言った事も納得出来る

「出来たよ」

生姜焼き定食が出来た様でおばちゃんはプレートに乗せて渡して来る  
「ありがとうございます」

僕はお礼を言い、プレートを貰って、お姉ちゃん達の席に戻る

すると聞こえていたジャンケンの音がなくなる

終わったんだ

僕は少しホットした気持になる

そうしてお姉ちゃん達の席に着いた

そこには勝ち誇り、嬉しそうな笑顔を浮かべている明里お姉ちゃん  
と、悔しそうな顔になりながら、いじけている涼お姉ちゃんがいる

そして、そんな二人に挟まれながら楽しそうな笑みを浮かべている  
咲お姉ちゃんがいた

涼お姉ちゃんが負けたんだ

僕は状況がある程度は理解出来たが、一つだけ理解出来なかった



それは、

なんで咲お姉ちゃんが楽しそうなんだろ？、ま、いつか

「座るね」

僕は自然な流れで明里お姉ちゃんの左となり、簡単に言えば咲お姉ちゃんの隣にはならない所に座ろうとする

「うん」

明里お姉ちゃんは笑顔でOKを出してくれた

そして僕はプレートを置き、完全に座ろうとする

「ちよっ、茜はこっち」

咲お姉ちゃんが明里お姉ちゃんと自分の間の席を指差しながら言うて来る

やっぱりね

「なっ！あんた卑怯よ！」

涼お姉ちゃんが咲お姉ちゃんの策略に気づいたみたいだな

「明里お姉ちゃん？どっちで座ればいいの？」

「どっちでもいいよ」

「なら」

僕は咲お姉ちゃんを黙らせる為、二人の間に座る

「茜ありがとー」

僕が座つたと同時に咲お姉ちゃんが抱きついて来る

「ちよっ！」

僕はバランスを崩して明里お姉ちゃんの膝に頭を乗せる

周りから見たら、膝枕してもらってるみたいに見えるだろう、って！

その途端、僕の顔が暑くなる  
多分、赤くなってるだろう

「あかねちゃん？」

僕が明里お姉ちゃんの膝から頭を起き上げ様とすると、明里お姉ちゃんの顔が目に入る

明里お姉ちゃんの顔は耳まで赤く、段々と息が荒くなっていくのがわかる

「ハアハア茜ちゃん」

すると明里お姉ちゃんの顔が僕の顔に近づいて来る

つて！ちよつ！

「なに？明里お姉ちゃん？」

僕の声は明里お姉ちゃんに届かなず、明里お姉ちゃんは僕の顔に近づいて来る

そして明里お姉ちゃんの顔が僕の耳の近くまで来る

耳には明里お姉ちゃんの吐息と荒い息が入って来る

「ハアハア茜ちゃん、耳掃除してあげる」

「えっ？」

すると明里お姉ちゃんが僕の耳に自分の舌を入れて来る

明里お姉ちゃんの舌は少しだけザラザラしていて、唾液で濡れている  
明里お姉ちゃんは舌をゆっくりと耳の奥に入れながら、舌を優しく動かしてくる

「あつ、あ、あつ」

僕の耳は刺激される度に、気持良くなる

「チュツパ、茜ちゃんのチュパ美味しいよクチュクチュ」

明里お姉ちゃんが耳に口を当てながら、舌と唾液で音を立て、耳を刺激しながら言ってくる

「ちよつ、や、やめ」

僕の口から変な風に声が出る

「クチュクチュ、チュツパ、ダメよクチュ」

明里お姉ちゃんは否定して、もう一度舐め始める

「やめんか！」

咲お姉ちゃん達が、明里お姉ちゃんを僕の耳から離そうとする

「神功先生、流石に怒りますよ」

「あんな、やっていい事と悪い事があるでしょ」

二人が力を入れたのか、明里お姉ちゃんが僕の耳から飛ぶ様に離れる

すると唾液で濡れた僕の耳は軽く冷たくなり、明里お姉ちゃんの口と僕の耳を繋ぐ様に白い糸が張る

「大丈夫？茜」

「茜ちゃん？」

僕は二人に助けられて席に座る

「美味しかったのに」

明里お姉ちゃんがそんな事を言うと、二人が明里お姉ちゃんを睨み付ける

「うつ」

僕は怯えた様な声を出す

すると明里お姉ちゃんが急いで誤って来る

「ごめん、ごめん、茜ちゃん」

「うう、怖かったよー」

そうして状況进行处理して、やっと夕食を食べ始める

僕は生姜焼きを口に入れて齧る

すると口いっぱい生姜のいい匂いと、肉の美味しさ、香ばしさが  
広がる

「美味しい」

そんな代わり映えのない感想を言うと、咲お姉ちゃんが話し掛けて  
くる

「茜、遊びやらない？」

僕は唐突にそんな事を言われて、軽く思考が止まるが直ぐに復活する  
「・・・あつ、遊びつてなに？」

その質問を待っていたかの様に笑顔になる

「それは肝試しよ」

「定番だね」

僕のありきたり過ぎる答えに明里お姉ちゃん達も話し出す

「定番つて、お化け屋敷じゃないんだよ」

「肝試しなんだよ」

当たり前じゃん

「それが何かすごいのか？」  
すると二人があり得ないと言う顔になる

「肝試しはアレだよ。学校じゃなきゃ出来ないんだよ」  
いや、肝試しって言ったら墓地だし

「しかも普通は学生の時にやるもんなんだよ」  
そりゃ、大人はやらないよね

僕は数々の疑問を抱くが、どうしてか分かった。そう、それはこの  
世界ではこれが基礎なんだ

そう割り切って、僕は話しを続ける  
「で、なんでいかなり肝試しなの」

「「「やりたいからだよ」「」」  
三人がハモる  
って皆グルかよ

僕は自分に自分でツッコミを入れながら、路線を戻す為、話し出す  
「やるのは分かったけど何時やるの？」

「今日だよ。茜」  
頭痛い

「マジ」

「マジ、茜ちゃん」

明里お姉ちゃん

「一緒にやろうね」

涼お姉ちゃん、僕の意志はないんだね

僕は諦めて肝試しの事を聞く

「何時にやるの？」

「えっと、１０時から」

「うん、わかった」

そうして僕は夕食を食べながら説明を受ける

「えーと、時間はさっき言った通りPM10:00からで、一階から屋上まで巡回しながら、各教室に着いたら、その教室の怪談話をするの」

「中身は案外ふつーなんだ」

そうして説明を聞き終わり、夕食も食べ終わったから、部屋に戻る  
うとする

「１０時に学校の正門だからねー」

涼お姉ちゃんがそう言いながら手を振ってくれる

「茜ー忘れないでね」

咲お姉ちゃんも負け時と手を振ってくれた

「茜ちゃん、さっきの美味しかったわよ」

明里お姉ちゃんがそんな事を言う、って

すると僕の顔はまた暑くなる

今度は体の全てが暑くなり、ぼんやりしながらゆっくりとプレート  
を戻して廊下に出る

僕は廊下にある窓に体を投げ出しながら外を見る

ここが学生寮の為か周りには一切建物が無い  
必然的に光は無く、暗闇が広がっている

しかも夏とは言え、窓の外は涼しく暑くなつた僕を冷やしてくれる

そうして軽く涼み、また部屋に向かって歩き出す

寮生のほとんどが食堂にいる為、廊下には全く人がいない

部屋の前まで着き、扉を開ける

すると扉の金具が軋む、音を立てる

そして部屋に入ると、沈黙と暗闇が漂っている

僕は慣れた感覚で、電気を付ける

すると蛍光灯から、部屋の角まで照らす様な光が出されている

「何しよ」

僕はある程度の事は、もう済ましている為、何もやる事がなかった

時間確認するか

携帯を開く

画面には20:00と表示されている

つまりPM8:00だ

「中途半端だな。しょうがない」

僕はゆっくりと時間の整理をし始めた

先ず肝試しをやるのが11時。それに間に合う様に正門に行くのは20分は掛かる。行く前にシャワーに入りたいから10:00に

入ればいいかな？

そして僕の頭の中で時刻表が出来た

20：00 現在

22：00 シャワー

22：40 正門

23：00 肝試し開始

と安易だが大まかな表示は出来た

だが一つ問題がある

それはシャワーに入るまでの2時間をどう埋めるかだ

「座席でも組むか」

僕は何時の暇潰し感覚で座席を組む

足には軽く痛みが走り、その痛みが集中力を更に高めて来れる

座席を組むと、僕は携帯の目覚ましを21：50分にセットする

「じゃっ、入るか」

僕は手を組み、意識を集中、そして思考、物を考える事は辞める

すると頭の中は、深い暗闇が僕を覆う様に現れる

暗闇に身を任せる様に集中を解き放つ

体は完全に暗闇を纏い、包まれた

そこは何故か心地良くて僕は安心出来た



体の感覚では約5分が経った

もう、そろそろかな

僕がそんな事を思った瞬間、目覚ましの音が僕の耳に響き渡って来る

僕はその音を聞くとゆっくりと目を開ける

すると目には蛍光灯の光が入り、僕は眩しくなり、目を何回か閉じたり開いたりする

段々と目は慣れて来て、僕は立ち上がる

案の定、体からは骨が軋む音がするが、慣れてしまった僕からしたらどうでもいい事だった

それよりも

「集中していると時間の感覚なくなるんだよね」

僕はこの方が気掛かりだった

「まっ、いつか」

そうして僕はシャワーに入る為、着替えを用意する

着替えは下着と、肝試しに行く為の服だ

どんな服かは後でのお楽しみだよ

そうして僕は着替えを持ってシャワーに入る

35分が経ち、僕はシャワーから出た

僕は結んでいた髪をストレートにしている

「10:40分か」

携帯で時間を確認しながら、そんな事を言つと僕は携帯をポケットにしまい、部屋を出る

廊下には夜だがからか人がいない

と言つよりかは多分、食堂に行っているのだろう

そんな事を考えながら歩いていると、寮の玄関に着く  
此処から5分ぐらい歩いた所に学校の正門がある

僕は靴箱から靴を取り、履き始める

足には靴の締め付けが掛かる

それは足にちゃんとフィットしてると言つ事だろう

そうして僕は靴を履き終わると、玄関を出る

外には涼しいくらいの風が吹き、それが僕の体とまだ湿っている髪を大きく靡かす

「気持ちい」

僕の体はシャワーによってあつたまっていた為、風が僕を冷やしてくれた

「じゃつ、行こ」

僕はゆっくりと学校に向かって歩き出す

学校まで続く道には電灯が立ち並び道を照らしている  
だが遠くの街を見れば、光はポツポツとしかない

そんな景色を楽しみながら歩いていると学校が見える所まで着いた

正門にはお姉ちゃん達がいる

僕はゆっくりと近づき

そして

「こんばんは、お姉ちゃん」

そう微笑みながら言った

恋人達の行方、夜の学校で肝試し 1（ハーレムバージョン）（後書き）

本当は今回で終わらすつもりだったんですが、長くなりそうなのであと一つ追加します。

多分、今日じゅうには出来るかな？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0811x/>

---

GANTZに選ばれた男の娘

2011年11月27日21時46分発行